

福岡市博多区

# 比 恵 遺 跡

— 第6次調査・遺構編 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集

1983

福岡市教育委員会

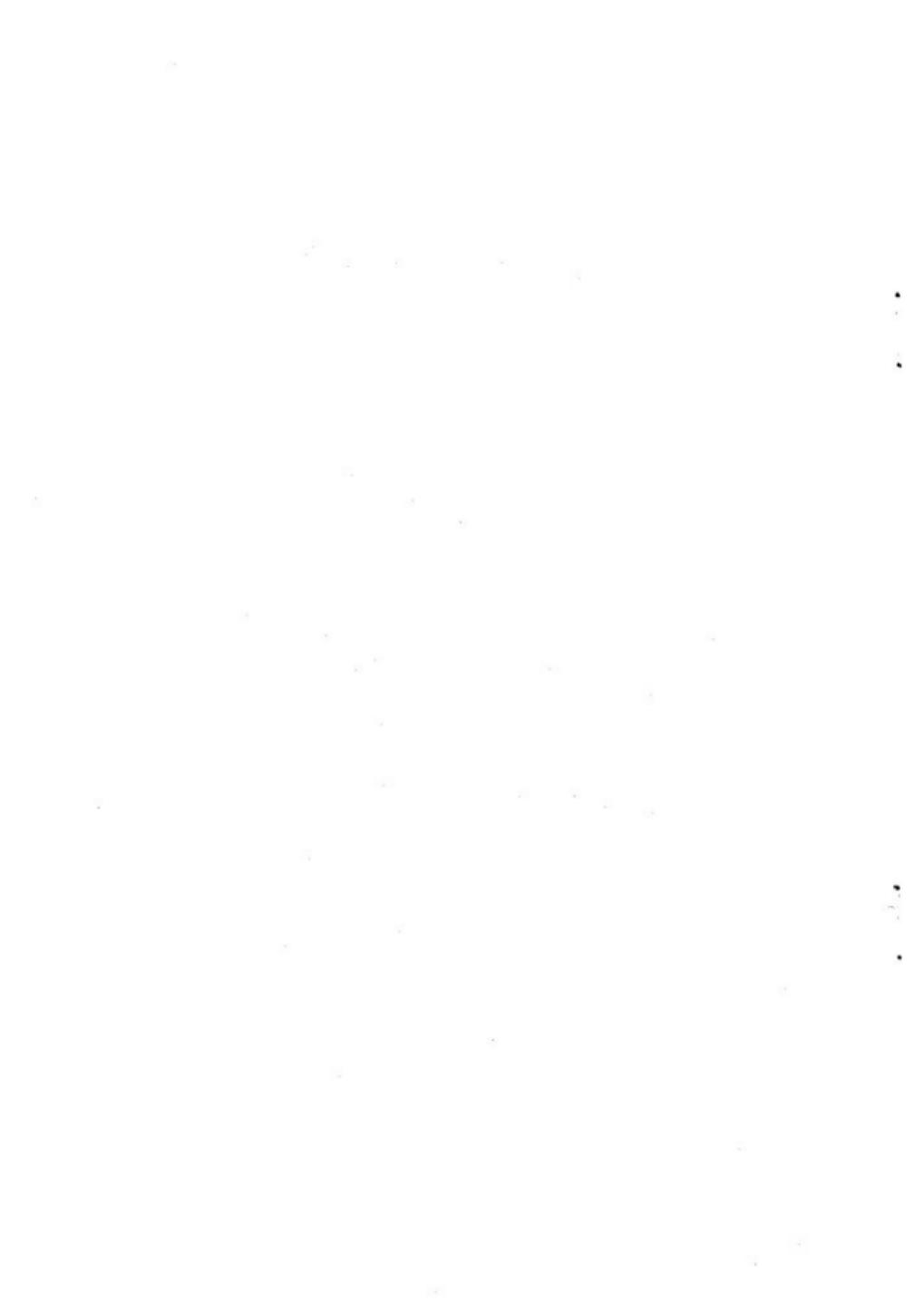
# 比 恵 遺 跡

— 第6次調査・遺構編 —



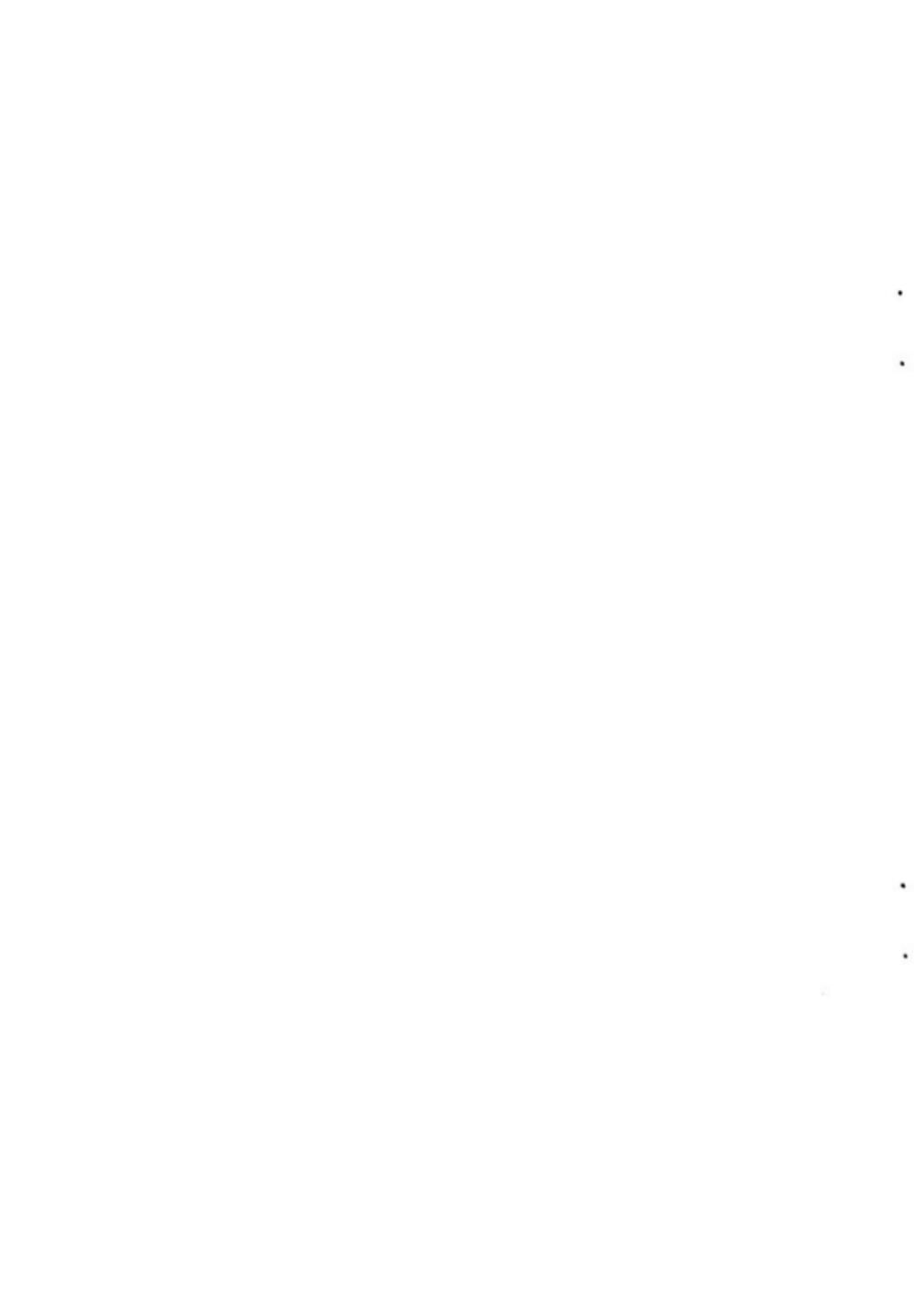
1983

福岡市教育委員会





SK28 瓶 棺 墓



## 序 文

博多駅の南に広がる比恵台地に昭和27年、市営住宅が建築され、その際建設予定地の一部が県指定史跡「比恵環溝住居遺跡」として保存されています。

福岡市建築局では、この市営住宅を改築する計画を立て、教育委員会に埋蔵文化財の事前調査を依頼するところとなり、福岡市教育委員会では、昭和57年5月から9月にかけて発掘調査を実施しました。

調査の結果、遺構の残存状況は予想以上によく、弥生時代の葬棺、井戸をはじめ、古墳時代、古代に至るまで各時代の遺構が検出されました。その中でも葬棺に副葬されていた銅剣に巻かれていた絹は、我が国でも最も古い時期のものとして注目されるところとなりました。

本書はその一部を報告するものです。この報告書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、併せて研究資料としても活用いただければ幸いです。

調査から出土資料の整理に至るまで指導委員の先生をはじめ多くの方々に御協力をいただきました。ここに心からの謝意を表するものです。

昭和58年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

## 例　　言

- 本報告書は1982年5月～9月に発掘調査を実施した市営小林町第1住宅の建替えに伴なう福岡市博多区比恵遺跡群の第6次発掘調査報告である。
- 遺構は呼称を全て記号化し、妻棺墓→S K、土壙墓→S X、竪穴住居址→S C、掘立柱建物→S B、井戸址→S E、土壤→S H、溝→S Dとしたが第1号古墳はこのまま呼んだ。
- 遺構の実測は浜石哲也・横山邦継・岩切幹嘉が中心に行ない、岡部裕俊(同社大)、山本雅代・太田史代・繩方俊輔(奈良大)、赤司善彦(明治大)、鶴木郁郎(九州大)、村上かをり(福岡大)の協力を得、製図は浜石・横山・赤司・村上で行なった。井戸址の実測図作成にあたっては一部土器の出土状況を全面見透しとしたものがある。
- 遺構の撮影は浜石・横山で分担して行ない、一部白石公高氏の協力を得た。
- 付論として布目順郎・小西孝先生には玉稿をいただいた。また森貞次郎先生には第2次調査時の記録・図面類の提供を受けた。
- 付図2は小林義彦氏(市文化課)の実測・製図により、二宮忠司氏には第5次調査全体図の提供をうけた。
- 本書の執筆は井戸址・土壙を浜石がおこない、他は横山が分担した。また編集は浜石の協力を得て横山が担当した。

## 本文目次

### 序

Iはじめに .....	1
1 調査に至る経過.....	1
2 調査の組織.....	1
II 遺跡の位置と環境 .....	3
III 調査の記録 .....	7
1 調査地点の概要.....	7
2 第6次調査概要.....	12
(1) 瓦棺墓.....	13
(2) 土壙墓.....	44
(3) 竪穴住居址.....	49
(4) 握立柱建物.....	52
(5) 井戸址.....	61
(6) 土壙.....	85
(7) 溝状遺構.....	91
(8) 方形周溝遺構.....	92
(9) 第1号古墳.....	93
IV おわりに .....	94

## 付論目次

I 比恵遺跡の細形銅剣に付着する織物・繊維について .....	99
布目順郎	
II 比恵遺跡出土の紡織物の走査型電子顕微鏡による観察 .....	111
小西 孝	

## 図版目次

	本文对照頁
PL. 1 比恵遺跡群付近航空写真(1/15,000) .....	3
PL. 2 1 第2次調査風景(昭和26年) .....	7
2 環溝遺構全景 .....	8
PL. 3 1 環溝遺構内堆積状況 .....	8
2 第3号土壤出土状況 .....	10
PL. 4 1 第1号甕棺墓出土状況 .....	10
2 第2号甕棺墓出土状況 .....	10
PL. 5 1 第4号甕棺墓出土状況 .....	10
2 第6号甕棺墓出土状況 .....	10
PL. 6 1 第8号甕棺墓出土状況 .....	10
2 第12号甕棺墓出土状況 .....	10
PL. 7 1 甕棺墓出土状況(東より) .....	12
2 甕棺墓出土状況(北より) .....	12
PL. 8 1 調査区南東部遺構出土状況 .....	12
2 調査区東部遺構出土状況 .....	12
PL. 9 1 S K01甕棺墓出土状況 .....	13
2 S K04・38甕棺墓出土状況 .....	35・39
PL. 10 1 S K02甕棺墓出土状況 .....	13
2 S K05甕棺墓出土状況 .....	17
PL. 11 1 S K06甕棺墓出土状況 .....	39
2 S K07・08・09甕棺墓出土状況 .....	17
PL. 12 1 S K10甕棺墓出土状況 .....	19
2 S K11・12甕棺墓出土状況 .....	19
PL. 13 1 S K13甕棺墓出土状況 .....	19
2 S K14甕棺墓出土状況 .....	19
PL. 14 1 S K15甕棺墓出土状況 .....	39
2 S K16甕棺墓出土状況 .....	39
PL. 15 1 S K17・18甕棺墓出土状況 .....	23
2 S K19甕棺墓出土状況 .....	39
PL. 16 1 S K20甕棺墓出土状況 .....	23

2	S K21・37號棺墓出土狀況	23・35
PL. 17	1 S K22號棺墓出土狀況	23
2	S K23號棺墓出土狀況	26
PL. 18	1 S K26・27號棺墓出土狀況	39
2	S K29・32號棺墓出土狀況	26・31
PL. 19	S K28號棺墓出土狀況	27・29・31
PL. 20	1 S K28號棺墓出土狀況	27・29・31
2	同號棺墓出土銅劍	27・29・31
PL. 21	1 S K30・36號棺墓出土狀況	31・35
2	S K31・35號棺墓出土狀況	31・35
PL. 22	1 S K32號棺墓出土狀況	31
2	S K33・30・36號棺墓出土狀況	31・35
PL. 23	1 S K36・33・30號棺墓出土狀況	31・35
2	S K34號棺墓出土狀況	31
PL. 24	1 S K40號棺墓出土狀況	35
2	S K37號棺墓出土狀況	35
PL. 25	1 S K42號棺墓出土狀況	35・37
2	S K41號棺墓出土狀況	35
PL. 26	1 S K43號棺墓出土狀況	38
2	S K44號棺墓出土狀況	38
PL. 27	1 S X03土壤墓出土狀況(西より)	44
2	同土壤墓主体部土層	44
PL. 28	1 S X04土壤墓出土狀況(北より)	46
2	S X05・06出土狀況(西より)	46
PL. 29	1 S C01住居址出土狀況	49
2	S C02住居址出土狀況	49
PL. 30	1 S C03・04・05住居址出土狀況	49・51
2	S C08住居址出土狀況	51
PL. 31	井戸址出土狀況 I	64～66
PL. 32	井戸址出土狀況 II	66～68
PL. 33	井戸址出土狀況 III	69・70・72
PL. 34	井戸址出土狀況 IV	72・74・75
PL. 35	井戸址出土狀況 V	76・77・79

PL. 36	井戸址出土状況 VI	79・81
PL. 37	井戸址出土状況 VII	81・83
PL. 38	土壤出土状況 I	85
PL. 39	土壤出土状況 II	88・90
PL. 40	1 第1号古墳出土状況	93
	2 同古墳周溝内遺物出土状況	93

## 挿図目次

	本文頁	
Fig. 1	比恵遺跡群周辺遺跡分布図 (1/2.5万)	2
Fig. 2	比恵遺跡位置図 (1/2万、明治34年)	4
Fig. 3	比恵遺跡群調査地点図 (1/8000)	5
Fig. 4	比恵遺跡群位置図 (1/6000、昭和7年頃)	6
Fig. 5	第2次調査遺構全体図 (1/400)	8
Fig. 6	環溝遺構および周辺遺構実測図 (1/100)	折り込み
Fig. 7	第1・2・3・4・5・6・8号豪棺墓出土状況実測図 (1/20)	折り込み
Fig. 8	第12号豪棺墓および土塁1・2号出土状況実測図	9
Fig. 9	第2次調査出土遺物実測図 (1/2)	10
Fig. 10	第5次調査遺構全体図 (1/200)	折り込み
Fig. 11	S K 1・2豪棺墓出土状況実測図 (1/30)	14
Fig. 12	S K 5・7豪棺墓出土状況実測図 (1/30)	15
Fig. 13	S K 8・9豪棺墓出土状況実測図 (1/30)	16
Fig. 14	S K 10・11・12豪棺墓出土状況実測図 (1/30)	18
Fig. 15	S K 13・14豪棺墓出土状況実測図 (1/30)	20
Fig. 16	S K 17・18・20豪棺墓出土状況実測図 (1/30)	21
Fig. 17	S K 21・22豪棺墓出土状況実測図 (1/30)	22
Fig. 18	S K 23・24豪棺墓出土状況実測図 (1/30)	24
Fig. 19	S K 25・29豪棺墓出土状況実測図 (1/30)	25
Fig. 20	S K 28豪棺墓出土状況実測図 (1/30)	28
Fig. 21	S K 28豪棺墓実測図 (1/12)	29
Fig. 22	S K 28豪棺墓副葬銅劍実測図 (1/2)	29
Fig. 23	S K 30・31豪棺墓出土状況実測図 (1/30)	30

Fig. 24	S K32・33 妻棺墓出土状況実測図（1／30）	32
Fig. 25	S K34・35 妻棺墓出土状況実測図（1／30）	33
Fig. 26	S K36・37 妻棺墓出土状況実測図（1／30）	34
Fig. 27	S K38・40 妻棺墓出土状況実測図（1／30）	35
Fig. 28	S K41・42 妻棺墓出土状況実測図（1／30）	37
Fig. 29	S K43・44 妻棺墓出土状況実測図（1／30）	38
Fig. 30	S K3・4・6・16・19 妻棺墓出土状況実測図（1／20）	40
Fig. 31	S K15・26・27・39 妻棺墓出土状況実測図（1／20）	41
Fig. 32	妻棺墓の埋置方位と角度	43
Fig. 33	S X01・02 土壤墓出土状況実測図（1／30）	45
Fig. 34	S X03 土壤墓出土状況実測図（1／30）	折り込み
Fig. 35	S X04 土壤墓出土状況実測図（1／30）	47
Fig. 36	S X05・06・07 土壤墓出土状況実測図（1／30）	48
Fig. 37	S C01・02 竖穴住居址出土状況実測図（1／60）	50
Fig. 38	S C03・04・05 竖穴住居址出土状況実測図（1／60）	折り込み
Fig. 39	S B01・02・03・04 掘立柱建物出土状況実測図（1／100）	53
Fig. 40	S B05・06・07・08 掘立柱建物出土状況実測図（1／100）	54
Fig. 41	S B09・10・11・12・13 掘立柱建物出土状況実測図（1／100）	56
Fig. 42	S B14・15・16・17・18・19 掘立柱建物出土状況実測図（1／100）	58
Fig. 43	S B20・21・22 掘立柱建物出土状況実測図（1／100）	59
Fig. 44	井戸址分布図（1／400）	61
Fig. 45	井戸址断面図（1／150）	63
Fig. 46	S E01・02・03 井戸址実測図（1／30）	64
Fig. 47	S E04・05・06 井戸址実測図（1／30）	65
Fig. 48	S E07・08・09 井戸址実測図（1／30）	66
Fig. 49	S E10・11 井戸址実測図（1／30）	67
Fig. 50	S E12・13 井戸址実測図（1／30）	68
Fig. 51	S E14・15・16 井戸址実測図（1／30）	69
Fig. 52	S E17・18 井戸址実測図（1／30）	70
Fig. 53	S E17 井戸側大型妻実測図（1／8）	71
Fig. 54	S E19・20・21 井戸址実測図（1／30）	72
Fig. 55	S E22・23・24・25・26 井戸址実測図（1／30）	73
Fig. 56	S E27・28 井戸址実測図（1／30）	74

Fig. 57	S E 29・30井戸址実測図（1／30）	75
Fig. 58	S E 31・32・33井戸址実測図（1／30）	76
Fig. 59	S E 33井戸址出土井桁実測図（1／6）	折り込み
Fig. 60	S E 34・35・36・37井戸址実測図（1／30）	78
Fig. 61	S E 38・39・40・41・42・43・44井戸址実測図（1／30）	80
Fig. 62	S E 45・46・47・48・49・50井戸址実測図（1／30）	82
Fig. 63	S H 01・02・03・04・05・06土壌実測図（1／30）	86
Fig. 64	S H 07・08・09・10土壌実測図（1／30）	87
Fig. 65	S H 11・12・13・14土壌実測図（1／30）	88
Fig. 66	S D 01・03溝断面実測図（1／40）	91
Fig. 67	方形周溝遺構実測図（1／60）	92
Fig. 68	第1号古墳実測図（1／100）	折り込み
Fig. 69	第1号古墳周溝土層断面実測図（1／40）	93
Fig. 70	完成予定建物と遺構との関連図	96

## 本文表目次

Tab. 1	豪棺墓一覧表	42
Tab. 2	掘立柱建物計測表	60
Tab. 3	井戸址一覧表	84

## 付図目次

付図 1	第6次調査出土遺構全体図（1／100）
付図 2	第5・6次調査地点図（1／400）

# I はじめに

## 1 調査に至る経過

1981（昭和56）年福岡市建築局より、博多区駅南四丁目405—1番地の市営小林町第1住宅の老朽化に伴う建替え計画が文化課に出され、当該地における埋蔵文化財の有無の確認が事前に必要となった。文化課では当局と協議の結果家屋・施設一切が除去された同年3月9～10日に亘って試掘調査を行なった。この結果過去に行なわれた北患遺跡の調査成果を裏付ける様に弥生時代墓地・住居址・窓穴遺構など多数分布することが判り、建設によって失なわれるこれらの遺構の本調査が必要となり、1982（昭和57）年5月6日より本調査を始めた。

## 2 調査の組織

調査委託 福岡市建築局

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係

事務担当 柳田純孝（係長）、古藤国生

調査担当 浜石哲也、横山邦継

調査補助 岩切幹臺、山本雅代、太田史代、緒方俊輔（奈良大学）、岡部裕俊（同志社大学）、赤司善彦（明治大学）、桜木郁郎（九州大学）、村上かをり（福岡大学）、白石公高（写真撮影）

整理補助 山崎恵美子、野村弥生、野邑久子、木村絹子、取違ムツ子、城戸トミ子、稻吉尚子、雪吉良子、河鍋光子、北村信子

調査・整理作業 荒木君子、青柳恵子、池見寿夫、石見良教、岩隈由丸、植田隆、上村和美、櫻本明浩、大山幸治、尾上彰、大部茂久、奥田洋美、尾崎順子、尾崎文枝、小野倉太、樋山美穂子、金子秀明、嘉村芳光、木原泰信、菊池栄子、米鳴友子、久良木シズエ、木山祐子、久保山まさ子、久保山二三子、権藤利雄、古賀博子、小柳恒夫、坂口一樹、佐土島初喜、関富美男、津村武光、手柴泰隆、徳永静雄、舎川キチエ、中野英隆、長野康子、中原嘉男、永松伊都子、永松富子、林田初美、日隈正守、日比野典子、平川道子、松尾泰、松永シゲ子、光安義幸、三浦力、宮本雄司、無津呂ハル子、村崎優子、安高久子、山口淳、山口節子、山村スミ子、吉岡恭一、吉田キミノ、米丸次男

なお発掘調査にあたっては地元町内会長無津呂三代次、池本政雄、中原志外顕、荒木律の各氏に諸協力・援助を受けた。また森貞次郎（九州産業大学）、岡崎敬・西谷正（九州大学）の先生方には諸々の御指導をいただいた。

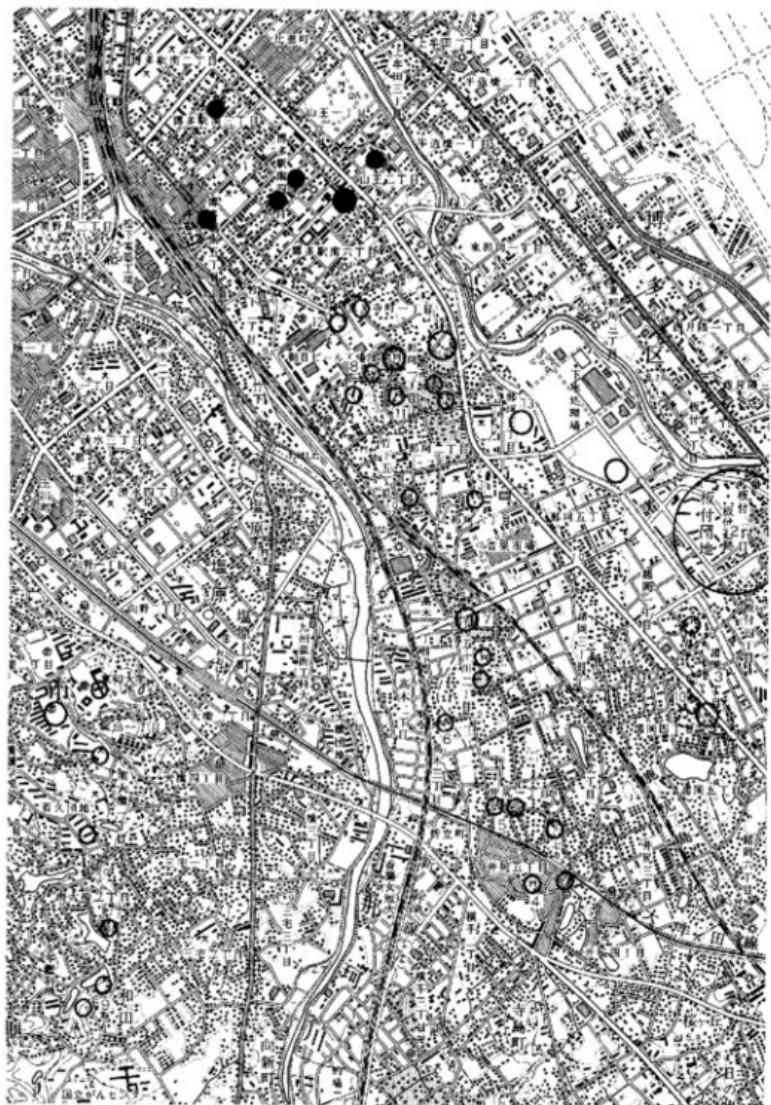


Fig.1 比恵遺跡周辺遺跡分布図 (1/2.5万。弥生-古墳時代)

- 1 比恵遺跡跡、2 枝行通跡、3 露岡通跡、4 井尻山神社通跡、5 井尻塚古墳跡、6 五十河高木通跡  
7 砂高寺通跡、8 宮前通跡、9 相田通跡、10 露岡古墳跡、11 斎宮八幡古墳、12 露岡麻子塚遺跡

## II 遺跡の立地と環境

立地 二日市狹隘部より博多湾に向って北方にひろがる福岡平野は北にこれらをつらぬいて流れる那珂川・御笠川の二大河川によって開拓され流域に沿って幾多の侵食丘陵を残している。比恵遺跡群ののる那珂丘陵はこれらの残丘の一つで、東西幅1km、南北2kmをはかる阿蘇噴出物（鳥栖ローム・八女粘土）で構成された広大な洪積中位段丘であり、標高8~6mと北に向って漸次低くなる。比恵遺跡群はこの那珂丘陵の北端部に位置する。(Fig. 2・3・4)

周辺の歴史的環境 (Fig. 1) 比恵遺跡群周辺では弥生~古墳時代に亘る集落址・墓地遺跡の分布は非常に濃厚である。特に比恵遺跡群ののる那珂丘陵（那珂川右岸）および御笠川左岸にあたる麦野丘陵から北に連絡する板付丘陵および諸岡独立丘陵などは弥生時代前期より古墳時代まで集落址が連続する特徴がある。弥生時代遺跡では東南約2.5~3kmに位置する低丘陵上にある板付・諸岡遺跡がある。板付遺跡では東西150m、南北600mの丘陵上に弥生前期~後期に至る生活遺構（環溝に囲まれる竪穴住居址・多数の袋状貯藏穴・中期後葉~後期の井戸址・獨立柱建物など）、墓地（前期後半より後期初頭に至る覆棺墓・木棺土壙墓があり、田端地区では前期末覆棺に細形鋼劍・銅鋒を副葬する。）および丘陵周辺の沖積地に前期初頭~後期にかけての水田遺構と共にともなう水利施設が見付かっている。生産遺跡は初期には丘陵縁辺部にひろがり、中期以降飛躍的に拡大する傾向にある。また後期には集落内青銅武器の鋳造が行なわれている。諸岡遺跡では前期末~後期初頭に至る墓地（鍵棺墓・土塚墓で細形鋼劍副葬）および前期末~中期初頭までの生活遺構などが見付かり、特に生活遺構では朝鮮系無文土器と前期末弥生式土器の共存する竪穴が多く、注目される。またこれの西方約1kmの井尻周辺は那珂丘陵の南端部に近く、弥生後期の鉄鎌を出土した井尻地緑神社遺跡、中~後期覆棺墓地井尻栄町遺跡および五十川地区の鋼劍鋳型を出土した妙楽寺遺跡などがある。次いで古墳時代になると石棺系石室を内部主体とする諸岡古墳群、那珂八幡および線刻装飾をもつ横穴式石室を内部主体とする刺塚の二大前方後円墳などが知られ、紀元4世纪末~5世纪に比定できる柵状遺構をともなう巨大な水利施設が検出された那珂深ツサ遺跡はこれら古墳群の造営を行なわしめた新しい首長層の生産活動への関わりがこの時期の全国的な生産地開発に伴う溝渠等の掘削・整備の傾向と符号して色濃く出た一例として考えることができるかも知れない。

註 (1) ① 中山平太郎「板付遺跡の新資料(板付北嶺の遺物)」「考古学雑誌 第7巻7号」1917年

② 森 重次郎・岡崎 敬「福岡県板付遺跡」「日本農耕文化の生成」1961年

③ 下條信行「板付遺跡調査報告書」「福岡市埋蔵文化財調査会報告書 第8集」1970年

④ 「板付西辺遺跡調査報告書」(1)~(8)『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第29・31・35・38・49・57・65・83集』1972~1982年

⑤ 「板付一帯道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書」「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第39集」1977年

⑥ 「板付一帯住宅建設にともなう発掘調査報告書」「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第35集」1976年

(2) 同上註(5)

(3) 「那珂深ツサ遺跡」I・II『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第72・82集』1981~1982年

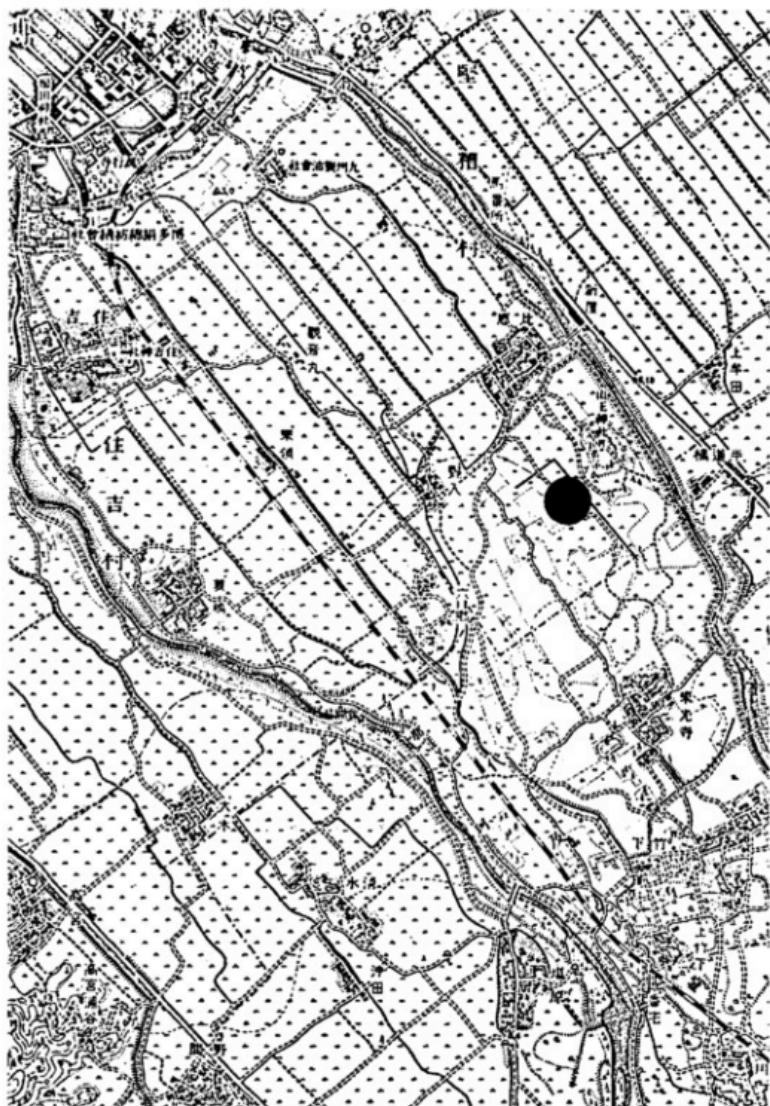


Fig. 2 比惠遺跡位置図 (1/2万, 明治34年)

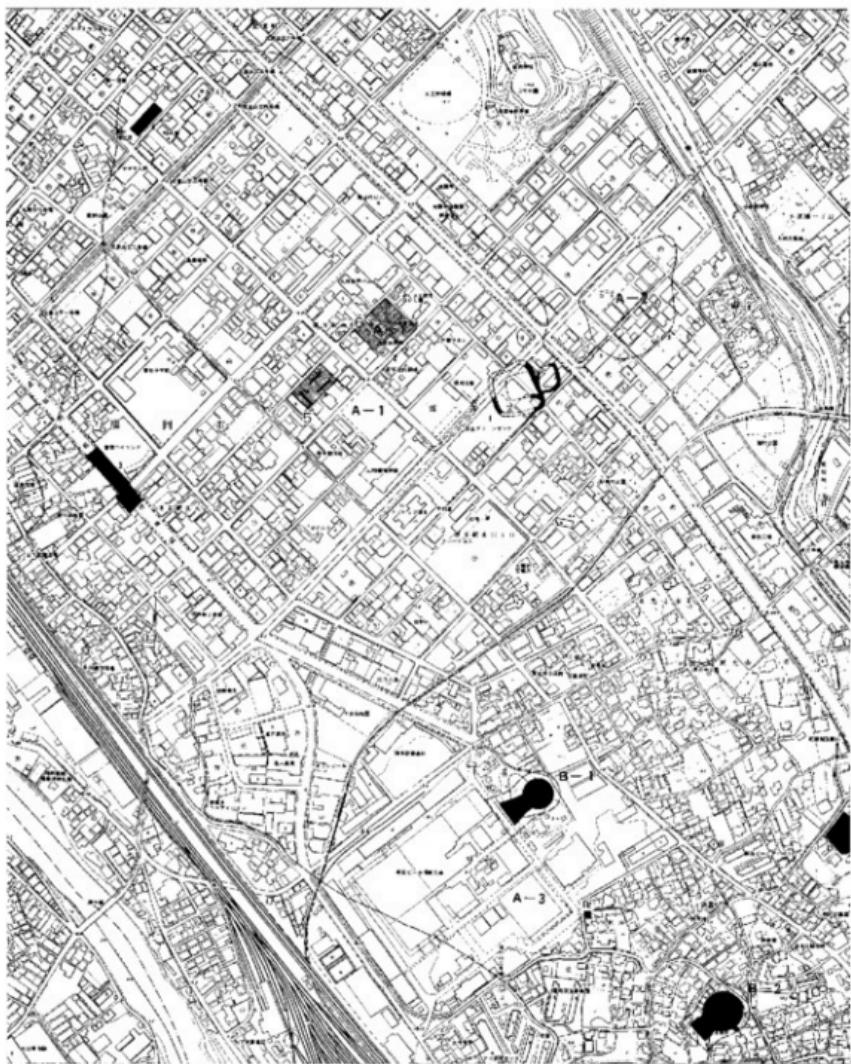


Fig. 3 比恵遺跡群位置図 (1/8,000)

A-1 比恵遺跡群 (1 第1次調査, 2 第2次調査, 3 第3次調査, 4 第4次調査, 5 第5次調査, 6 第6次調査)

A-2 比恵櫛棺遺跡, A-3 球河遺跡群

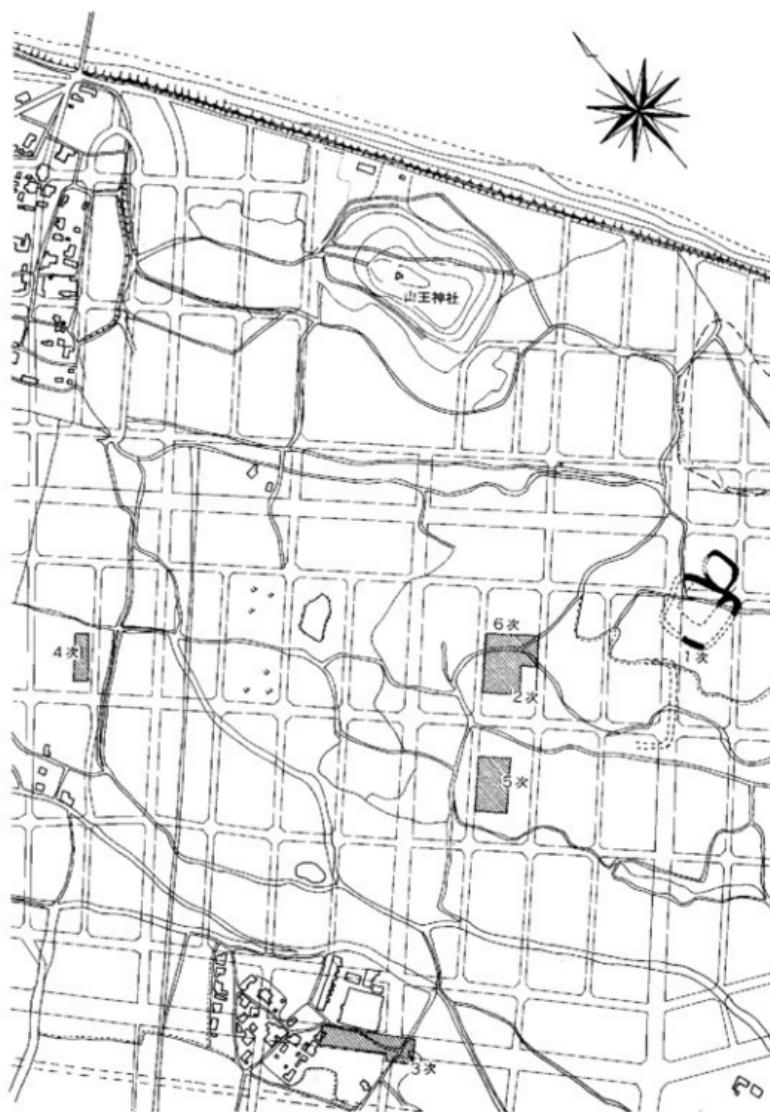


Fig. 4 比翼遺跡群位置図 (1/6,000, 昭和7年頃)

### III 調査の記録

#### 1 調査地点の概要

那珂丘陵北端部地域（比恵遺跡群）における埋蔵文化財の考古学的調査は昭和13年に始まる区画整理事業に伴う調査を第1次として昭和56年までに第5次を数えているがここでは各調査についての概要を述べることとする。また第2次調査については森貞次郎先生より当時の記録写真類の提供を受けあわせて収録することができた。

##### 第1次調査（昭和13～14年）

昭和8年頃より実施されていた土地区画整理事業の進行に伴って調査がおこなわれた。

調査で検出された遺構は「環溝住居址」4基（第1～4号）以上、弥生時代窓棺墓12基以上である。環溝住居址のうち第1号は一辺が約30mを測るやや南北に長い方形を呈し、内部には時期を異にする竪穴5基、井戸址2基、土壙などがあり、溝外北側に6基の窓棺墓が見付かっている。またこれ以外の環溝は第2号（1辺70m）、第3号（1辺40m）、第4号（1辺90m）があり、現存した環溝の深さ、幅にも種々の規模が知られた。なお環溝の時期については第1号が中期に属するとされる。また環溝の東側の微高地に存在した窓棺墓地では上限は不明であるが中期末～後期初頭に降る窓棺墓が知られた。

比恵遺跡群第1次調査はそのきわめて限られた調査条件の中で集落特に弥生時代集落の研究に多くの遺跡論的成果を提供した。

##### 第2次調査（昭和27年）（Fig. 5～9・PL. 2～6）

第2次調査は同年市営住宅小林町第1住宅の進行に伴って福岡県・福岡市の委託を受けた森貞次郎氏（現九州産業大学教授）によっておこなわれた。

調査は今回（第6次）調査と西南部において重複する範囲にあり、遺構の種類総数において整理が必要であるがこれは後に第6次調査の項で述べる。

第2次調査で検出された遺構は、環溝遺構1基、土壙3基および環溝内外に点在する小竪穴群（計68個）と環溝北西側10～20mにひろがる18基以上の窓棺墓である。また第6次調査での第1号古墳周溝内大石もドルメン卓石の可能性をもって浮揚させ下部の調査がおこなわれたが下面には他の施設ではなく須恵器類が出土したにとどまった。

次に遺構や遺物の写真や実測図は保存されているが、出土遺物（土器片、窓棺片、数個の石器）の保管については、残念ながら当時の埋蔵文化財の対応の機関が不十分であったため現在は散逸している。従って各遺構について当時の実測図・記録類によって各個別遺構に説明を加え、報告とする。

### 1. 環溝遺構 (Fig. 6)

環溝遺構は北辺にブリッジをもつ方形の溝遺構である。その規模は外法で一边がほぼ10mを測るが、北辺および南辺が若干長く東西に長い平面形となる。溝の幅・深さは過去の削平によって特に南辺の保存が悪く、北辺で幅0.8m・深さ0.55~0.6m、南辺の幅0.6~0.8m・深さ0.3~0.6m、東辺の幅0.9~1m・深さ0.65~0.8m、西辺の幅0.8~1m・深さ0.4~0.5mを測ることができる。また環溝内辺によって囲まれる面積は約75m<sup>2</sup>となる。

次に環溝に伴う遺物類は溝中より出土するものが殆どであった。溝中では北辺西半および西

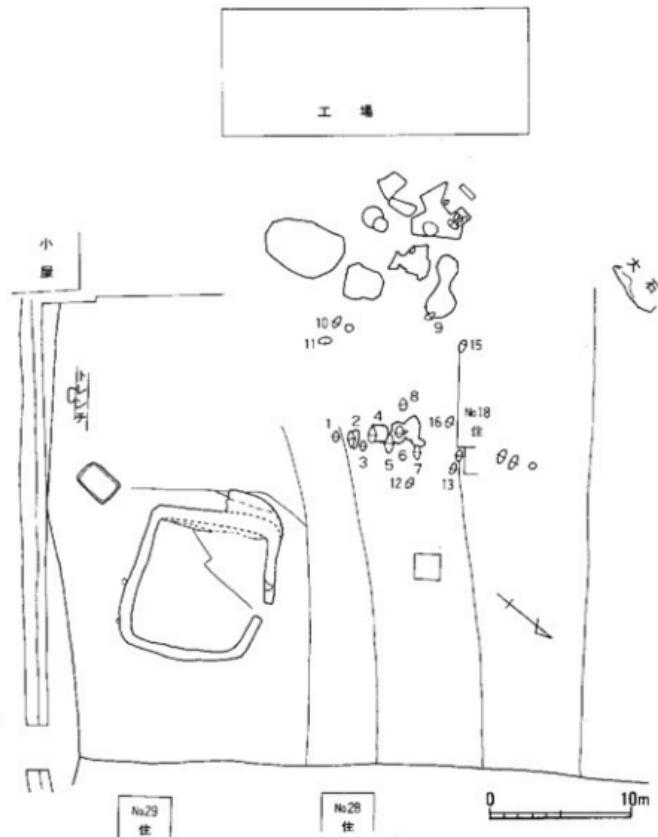


Fig. 5 第2次調査遺構全体図 (1/400)

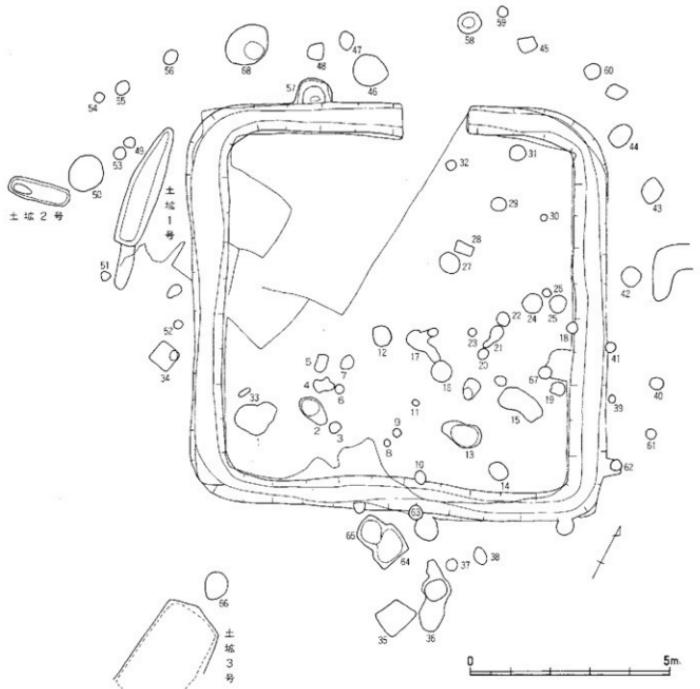


Fig. 6 環溝遺構および馬辺遺構実測図 (1/100)

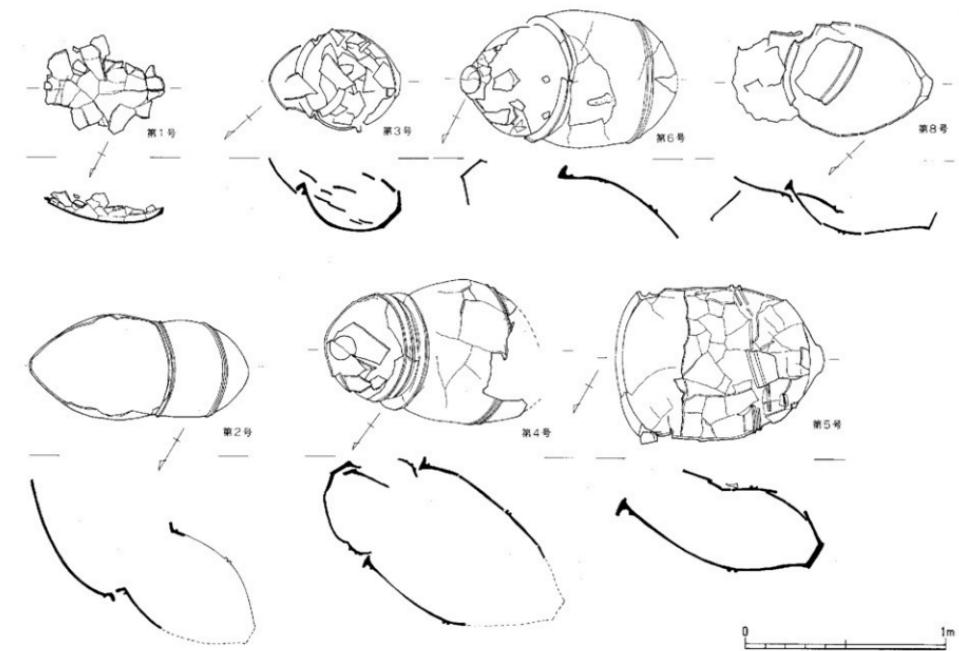


Fig. 7 第1·2·3·4·5·6·8号青铜器出土状况实测图 (1/20)

辺北半にかかるコーナー部分を中心に弥生時代中期中頃以降の土器類が多量に出土したが土師器類は含まれなかった。

本遺構の性格については当時まだ住居址に付設するものと考えられていたが、現在これを方形周溝墓に比定するとしても墓廬の存在が不明であり、かつ北部九州の弥生中期に周溝墓が存在していたという類例がまだ知られていないので必ずしもきめ手にならないという状態である。

## 2.小豎穴群 (Fig. 6)

環溝内外に点在する小豎穴は調査されたもので68個にのぼる。これらは掘立柱建物あるいは他の施設としてまとまりをもつものは無かったがこのうち6・8・9・11・12・13・16・19・21・22・23・27・39・40・42・44・45・46・60・61・62・63・66・68の24個は時期的に古墳時代と考えられた。小豎穴群は規模的に径0.2~0.5m・深さ0.05~0.7mとかなりの幅があるが全体的に小型の豎穴は深く、大型のものは残りが浅い。

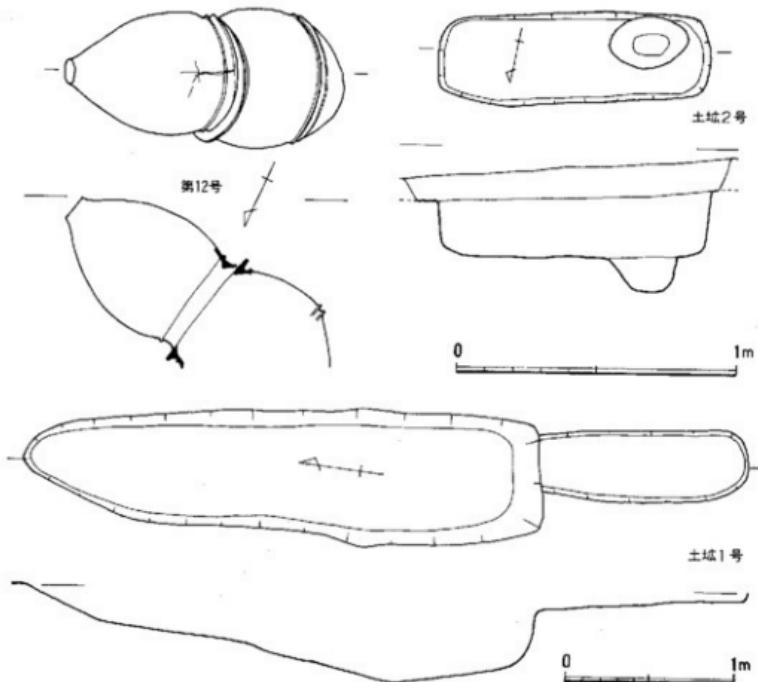


Fig. 8 第12号施棺墓および土塚1・2号出土状況実測図

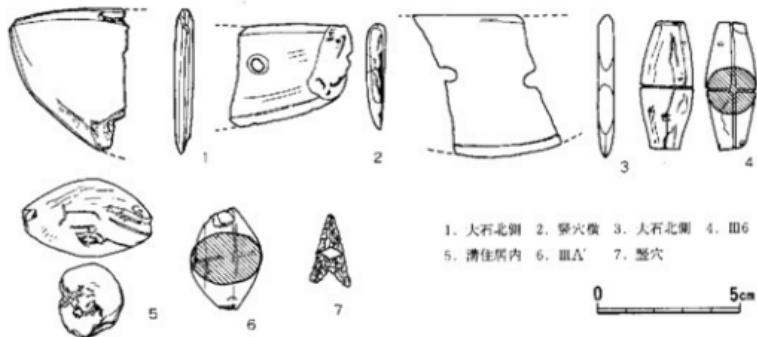


Fig. 9 第2次調査出土遺物実測図 (1/2)

### 3. 墓棺墓 (Fig. 7・8)

環溝西北部で18基以上が確認された。その殆どが東西方向に軸を取るもので、時期的には弥生時代中期後半から後期初頭に亘るものと考えられる。

第1号墓棺墓 下蓋のみを残し、主軸をN-64°-Eに向ける。

第2号墓棺墓 覆口式の墓棺墓である。主軸をN-60°-Eに向ける。埋置角度は38°である。

第3号墓棺墓 覆口式の墓棺墓である。主軸をN-42°-Eに向ける。埋置角度は44.5°である。

第4号墓棺墓 吞口式墓棺墓である。主軸をN-54.5°-Eに向ける。埋置角度30.5°である。

第5号墓棺墓 単棺か。主軸をN-59.5°-Eに向ける。埋置角度は24.5°である。

第6号墓棺墓 接口式墓棺墓である。主軸をN-63.5°-Eに向ける。埋置角度50.5°である。

第8号墓棺墓 覆口式墓棺墓である。主軸をN-45°-Eに向ける。埋置角度は25°である。

第12号墓棺墓 接口式墓棺墓である。主軸をN-60.5°-Eに向ける。埋置角度は37°である。

### 4. 土壙 (Fig. 8)

第1号土壙 第1号土壙は環溝西側に隣接する溝状土壙で長・幅が3.2×0.8mを測る。底面は中央部で約0.65mであり、北側に向って緩く立あがる。覆土に焼灰が多い。

第2号土壙 第2号土壙は長・幅が1.6×0.5mを測る隅丸長方形の土壙である。底面はほぼ平坦で深さ0.3mを残す。古墳時代の填墓であろう。

第3号土壙 環溝造構の南コーナー3mに隣接する長方形土壙である。土壙は長・幅が2.8×1.8mを測り、覆土には焼土が多く含まれていた。また覆土中では筒形器台を含む中期後半の遺物が出土した。

### 5. 第2次調査採集遺物 (Fig. 9)

第2次調査では遺物は全て散逸しているため当時の実測図に掲った。1、2、3は石庖丁残欠である。3は大石北側出土。4は管状土錐で、長・短軸ともに溝を有する。5・6は土製投

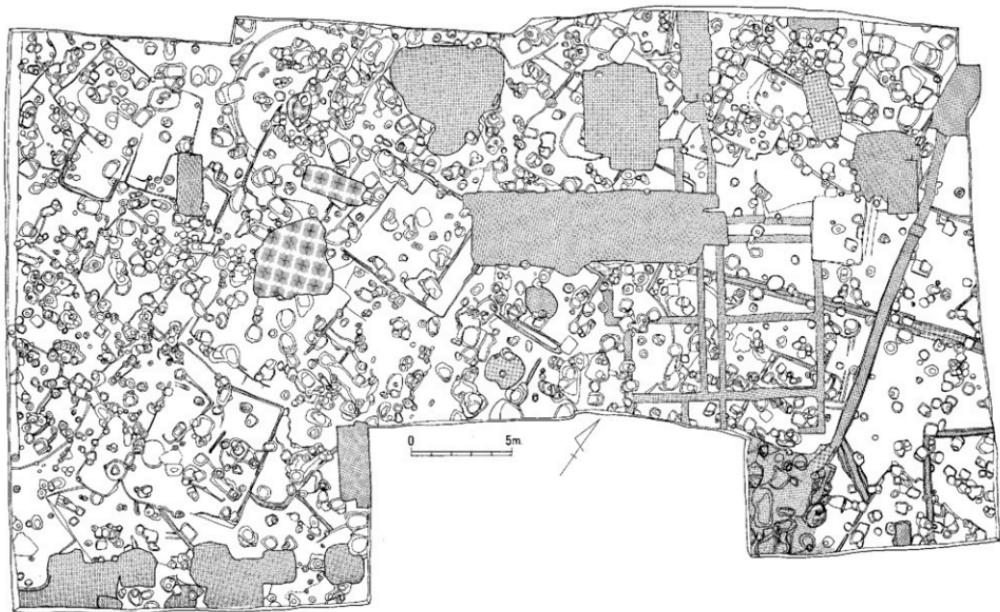


Fig.10 第5次調查橋全体図 (1/200)

弾である。5は環溝内出土。7は円基無茎式打製石鎌である。黒曜石製である。

#### 第3次調査（昭和41年）

第3次調査は昭和39～41年にかけて施行された県道博多駅～竹下線の拡張調査に伴なって行なわれた。（春住遺跡）

調査は拡幅工事に伴うもの以降に昭和42・44年と断続的に観察調査の形でおこなわれた。これらの調査から縄文時代晩期終末から弥生時代前期にかけての貯蔵穴8基（1～8号ピット）、弥生中期須玖式に属する甕棺墓2基、溝造構などが確認された。貯蔵穴のうち1号・3号・4号・6号・7号・8号ピットは削平者しく、最下底部層で夜白式上器と板付I式土器の共伴が知られた。また2号ピットは上部に弥生中期後半の上器を混じ、また6号ピットは共伴土器に板付II式土器をもつものがある。同調査では上記の土器類以外に扁平打製石斧、石庖丁、石斧、石鎌、土製紡錘車などが採集された。

#### 第4次調査（昭和54～55年）

第4次調査は日本住宅公団の建設工事に伴って行なわれた。（瑞穂遺跡）

調査地は那珂丘陵の北端部に近い位置にあたり、殆どが丘陵上にあたるが西側で谷の侵入する部分があった。東側丘陵部では弥生時代前期～中期に亘る貯蔵穴6基（非常に多量の炭化糧を貯蔵）、祭祀遺構をともなう中期後半の甕棺墓12基および古墳時代前期～中期に亘る溝状遺構が検出された。また西側谷部では杭列を伴う弥生前期の泥炭質土層が見付かり、農具類が出土している。

#### 第5次調査（昭和56年）（Fig.10）

第5次調査は民間自動車会社建物建設に伴って行なわれた。

調査では以前に製造工場があり、基礎と諸々の施設による搅乱で遺構にかなりの改変がみられたが、遺構は全面に分布して重複の激しいものであった。遺構は弥生時代中期から古墳時代前期に亘る竪穴住居址42軒、弥生時代に属する掘立柱建物23棟、それから弥生時代中期後半の丹塗袋状口縁長頸壺を出土した井戸など井戸3基を検出した。

第5次調査は今回の第6次調査地点の西側に近接し、竪穴住居址・掘立柱建物などの遺構が豊富であることから両地点の比較検討が興味深いが、成果については現在鋭意整理中であり、詳細は近刊が予定される本報告を待ちたい。

#### 比恵遺跡関連文献

1. 銀山猛「原始日本民族の集落形式」『日本諸学振興委員会研究報告第21編』 1940年
2. 銀山猛「日本原始聚落の研究」『歴史第16卷2号』 1940年
3. 福岡市役所「福岡」 1950年
4. 銀山猛「北九州の古代遺跡－墳墓・集落・都城－」『日本歴史新書』至文堂 1956年
5. 銀山猛「環溝住居址小論（一～四）」『史蹟67・68・74・78』九州大学 1956～1959年
6. 球磨野古代史研究会「見捨てられた春住遺跡－奥文治湖終末へのアプローチ－」『球磨野古代史研究会報 第2集』 1977年7月
7. 日本住宅公団「瑞穂～福岡市比恵古地遺跡」 1960年

## 2 第6次調査概要

第6次調査は第2次調査（昭和27年）後『環溝住居址』として遺構の保存措置がなされた環溝遺構部分を除く市営住宅建設地が調査の対象地となった。同地内は市営住宅建設時の基礎掘方・上水道・排水側溝などの諸施設による搅乱で削平が著しい。またほぼ東半にあたる部分は近世以降に水田化がなされ、水利施設としての溝（S D07・08）をともなって削平が数10cmに及んでいる。

調査は前述の如く過去の削平によって20~30cmの整地土を除くと遺構が直ちに露呈する状況にあった。遺構は弥生時代中期~歴史時代に亘る墓地（槨棺墓・土壙墓）・生活遺構（竪穴住居址・掘立柱建物・井戸址・土壙・溝状遺構）である。

墓地は旧状でかなりの高まりとなっていたとされる調査区西端部と中央部に亘る。槨棺墓は弥生前期に遡るものはなく中期前葉~後期初頭に亘る44基（SK01~44）が検出され、細形鋼剣刺葬墓（SK28）もあった。土壙墓は7基（SX01~07）となった。

生活遺構は槨棺墓地を除く調査区全域に分布しており、竪穴住居址9軒（SC01~09）、掘立柱建物22棟（SB01~22）、井戸址50基（SE01~50）、土壙15基（SH01~15）、溝状遺構9条（SD01~08、SX08）、古墳1基が検出された。竪穴住居址は中期後半~古墳時代前期に亘る。掘立柱建物は竪穴住居址と重複し、近世溝（SD07）東側にも分布し、小規模のものが多い。弥生後期~古墳時代前期に比定される。更に井戸址は弥生中期後半~古墳時代前期に亘り、近世溝（SD07）の西側に散在するものと同溝の東側地域の南北に2群がみとめられたが前記の掘立柱建物群とは殆ど重複していない。また井戸址は殆ど素掘りと考えられるが、中には井戸側として大型甕を使用するものや井桁に納板材を用いた例もみられる。

以下に各個別の遺構について詳述することとする。

### 調査日誌抄

1982年5月6日 ユンボを入れ遺構検出開始

〃 5月13日 13:30PMにSK28槨棺墓より細形鋼剣が出土した。

〃 6月27日 近世溝（SD07）以西の遺構検出がおわり、現地の説明会（写真）を行なう。盛況であった。

1982年8月24日 本日より東半部の井戸址の発掘にかかる。

1982年9月5日 本日にて膨大な井戸址の実測・遺物取上げが完了した。



遺跡見学会風景（6月27日）

## (1) 製棺墓 (Fig. 11~32, PL. 9~26, Tab. 1)

**概要** 第6次調査で確認された製棺墓は墓壙掘方のみのものを含めて計44基となつたが、第2次調査での第6号製棺墓がS K34製棺墓と切あう擾乱坑、第6号製棺墓がS K24製棺墓と切あう擾乱坑、第11号製棺墓がS K35製棺墓と切あう擾乱坑とそれぞれ一致すると考えられるため5基を追加、更に当時の調査区は今回のS K28製棺墓より西側に拡がつており製棺墓3基以上の確認があるため都合製棺墓は52基以上の構成になることは確実である。墓域については第2次調査の成果から更に西側に拡大することが知られるが、南限は現在の遺跡会館下の様子が昭和27年当時からも不明である点で範囲を限れない。

製棺墓は遺存状態の悪いものを除くと中期前葉4基、中期中葉5期、中期後葉14基、中期末～後期初頭17基の時期構成となっているが第2次調査のものを含めると中期末～後期初頭の時期に属するものが多い。細形銅剣を副葬するS K28製棺墓は中期前葉に含まれる。以下各製棺墓については個別の出土状況の説明を加えるが、全体は表にして後にまとめた。(Tab. 1)

### S K01製棺墓 (Fig. 11・PL. 9)

S K01製棺墓は第1号古墳の周溝南端に近く位置し、墓域内では最北部にあたるとおもわれる。同墓は第1号古墳周溝掘削および後世の擾乱坑によって墓壙を大きく破壊されている。墓坑はS K02に類似する形態となろう。

製棺墓は上襲・下襲ともに大型の製作土器を使用した接口式合口製棺墓である。製棺墓はN-66.5°-Eを主軸として9°の緩い角度をもって埋置されており、墓壙の掘削と製棺の挿入は東側方向よりおこなわれている。

棺使用製のうち上襲は口縁部が最大口径となり、口唇内面への発達が著しく外方に傾斜する。胴部には中位に2条の三角突帯をもつ。下襲は胴部中位よりやや上った部分を最大径とし、上部が内傾化する。胴部中位よりやや上に2条の三角突帯を有する形態となる。

### S K02製棺墓 (Fig. 11・PL. 10)

S K02製棺墓はS K01製棺墓の東側に隣接する位置にある。墓壙は竪坑が1×1.5mの横長の長方形をなし、これより挿入された横穴は奥行き2.4mをはかる。

製棺墓は上襲・下襲ともに大型の製作土器を使用した接口式合口製棺墓である。製棺墓はN-30.5°-Wを主軸として水平に埋置されており、墓壙の掘削と製棺の挿入は南側方向よりおこなわれている。

棺使用製のうち上襲は口縁部が内方に発達し、胴部中位に2条の三角突帯を有する。胴部は突帯以上は外方にひらかず直立的に口縁部につながる。下襲は口縁が内外面に発達した平坦口縁を有し、胴部中位に一条の三角突帯を廻らす。突帯以上は胴部が膨らみを増し口縁下付近でしまる。突帯は口縁下にはつかない。

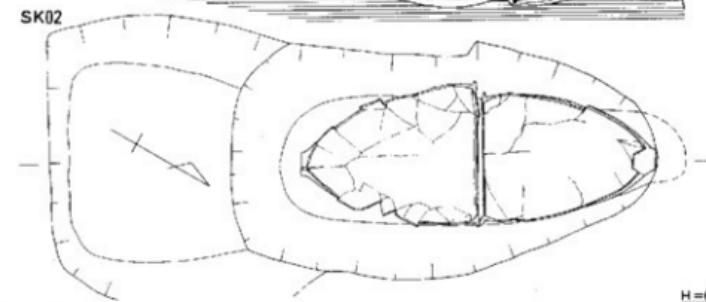
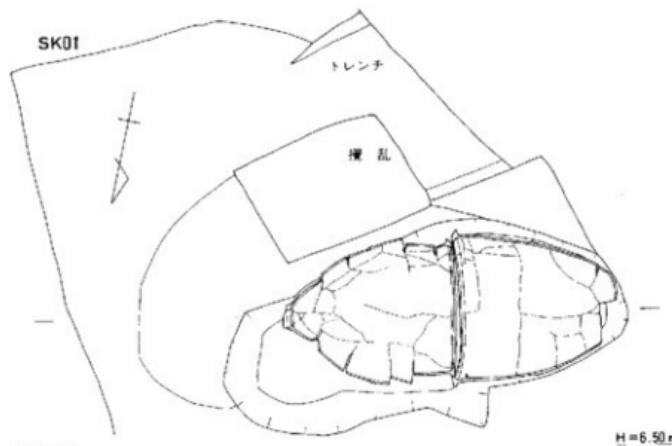
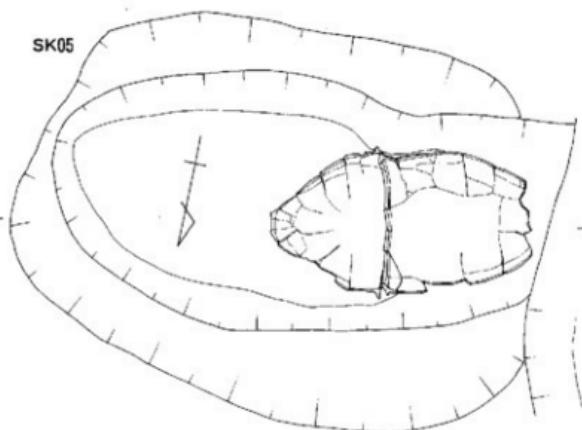


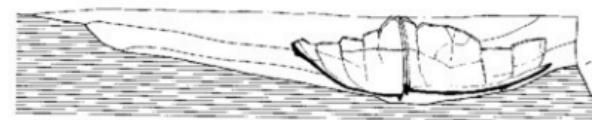
Fig.11 SK01・02櫻棺墓出土状況実測図 (1/30)

SK05



H = 6.50 m

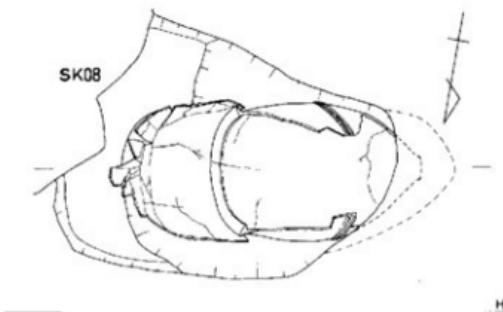
SK07



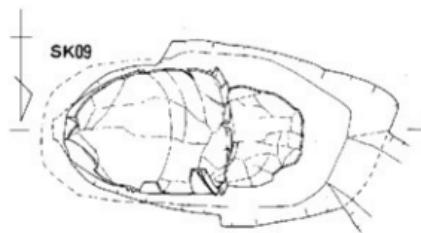
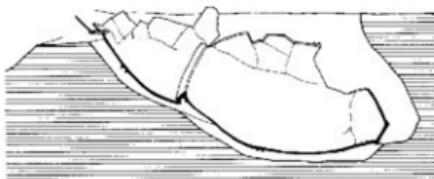
H = 6.40 m



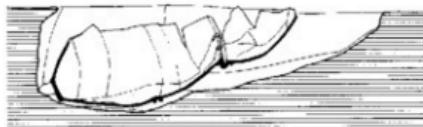
Fig.12 SK05・07號棺墓出土状况实测图 (1/30)



H



H



H = 6.50 m

0 1m

Fig.13 SK08・09塚古墓出土状況実測図 (1/30)

#### S K05 裸棺墓 (Fig. 12・PL.10)

S K05 裸棺墓は第1号古墳周溝掘削時に下蓋を著しく破損している。墓壙は $2 \times 2.8m$ をはかる隅丸長方形をなす。

裸棺墓は上蓋を大型鉢・下蓋を大型菱形土器を使用した接口式合口裸棺墓である。裸棺墓はN-78°-Eを主軸として3.5°というほど水平に近い緩い角度で埋置されており、墓壙の掘削と裸棺の挿入は東側方向よりおこなわれている。

棺使用蓋のうち上蓋は内外とも口縁部が発達した「T」字形口縁を有する鉢で口縁下にやや下って2条の三角突帯を廻らす。下蓋は口縁部が内方に発達が著しく外方に傾斜する。胸部には中位よりやや下った位置に2条の三角突帯を廻らすが、胴部は突帶上から一端膨らみ、次いで内傾気味に立あがる。

#### S K07 裸棺墓 (Fig. 12・PL.11)

S K07 裸棺墓は墓地東側にS K 8・9 裸棺墓と並列する位置にある。墓壙は水道管理設によつてかなりの削平を受けている。

裸棺墓は單棺の可能性が高い。裸棺墓はN-112°-Eを主軸として34°の急角度で埋置されている。墓坑の掘削と裸棺の挿入は東側方向から行なわれている。

棺使用蓋は内傾化する「T」字形口縁を有し、最大径を胸部中位にもつ。中位に2条の「コ」字形突帯廻らす。

#### S K08 裸棺墓 (Fig. 13・PL.11)

S K08 裸棺墓はS K07・09に並列する位置にある。墓壙は不整な隅丸長方形をなす。

裸棺墓は上蓋に中型の蓋、下蓋に大型の菱形土器を使用した接口式合口裸棺墓である。裸棺墓はN-89.5°-Eを主軸として21°の急角度で埋置されている。墓壙の掘削・裸棺の挿入は東側方向からである。

棺使用蓋は上蓋が内窓気味に外反する口縁直下に1条の三角突帯を廻らす。下蓋は内傾化の著しい「T」字形口縁を有し、胸部は卵形を呈して口縁部付近に至つてよくしまる。そして胸部中位に高い2条の「コ」字形突帯と口縁部直下に鈍い三角突帯を1条廻らす。

#### S K09 裸棺墓 (Fig. 13・PL.11)

S K09 裸棺墓はS K07・08 裸棺墓の南側に並列して埋置されている。墓壙は竪坑部分が顕著に残らない。

裸棺墓は上蓋に口縁打欠きの大形蓋・下蓋に大型菱形土器を使用した覆口式合口裸棺墓である。主軸はN-80.5°-Eにとり31°の急激な角度をもつて埋置される。墓壙掘方・裸棺挿入は東側方向から行なわれている。

棺使用蓋は上蓋が胸部中位よりやや下に2条の三角突帯をもつ。下蓋は内傾化の著しい「T」字形口縁を有し、胸部最大径となり、中位に2条の「コ」字形突帯を廻らす。

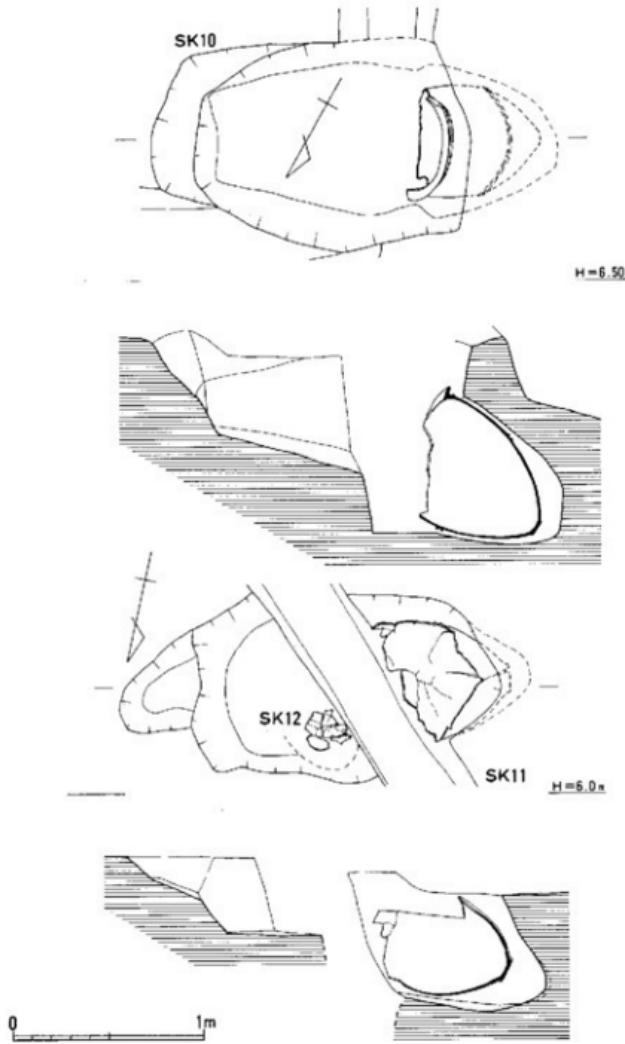


Fig.14 SK10・11・12號棺墓出土状况実測図 (1/30)

#### S K10 龫棺墓 (Fig. 14・PL.12)

S K10 龫棺墓は水道管理設による搅乱受けるが竪坑の段を明瞭に残す。

櫛棺墓は単棺で大型の櫛形土器を使用している。主軸をN-51°-Eにとり37.5°の強い角度で埋置している。墓壙の掘削・櫛棺挿入は東側方向からである。

棺使用櫛はやや内傾化した口縁を有し、胴部は全体に膨らみがつよく、胴中位以上はやや内傾しながら立あがっている。口縁下突帯は断面三角形、胴部中位のものは2条の「コ」字形突帯である。

#### S K12 龫棺墓 (Fig. 14・PL.12)

S K12 龫棺墓はS K10 龫棺墓の南側に隣接する。墓壙は水道管理設に非常な搅乱を受けている。また墓壙覆土中には小児棺 S K11 龫棺墓が當まれている。

櫛棺墓は単棺で口縁部を欠損するが大型の櫛形土器を使用している。櫛棺墓はN-78.5°-Eに主軸をもち26.5°の強い角度で埋置されている。墓壙の掘削・櫛棺の挿入は東側方向からである。

棺使用櫛は口縁部形態が不明であるが、胴部中位に下方に向く2条の「コ」字形突帯を廻らす。胴部中位以上は直立気味に内傾している。全体に胴下半はしまりがない。

#### S K13 龫棺墓 (Fig. 15・PL.13)

S K13 龫棺墓は墓地の東辺に位置している。竪坑は方形状をなすが狭く、底面は横穴に向って緩く傾斜する。

櫛棺墓は上櫛に中型の櫛・下櫛に大型の櫛形土器を使用している接口式合口櫛棺墓である。N-118°-Eに主軸方向をとり、36°の強い傾斜をもって埋置されている。墓壙の掘方・櫛棺の挿入は東側方向から行なわれている。

棺使用櫛は上櫛が胴部中位を最大径とする櫛で口縁はよくしまり、外方によく発達した口縁部は下方にたれ、やや下った位置に一条の三角突帯を廻らす。また胴部中位よりやや下った位置に2条の三角突帯を廻らす。下櫛は胴部中位よりや上方に最大径を有する櫛で口縁部はよくしまる。また口縁部は内傾化が著しく、直下に一条の三角突帯を廻らす。胴部中位に2条の「コ」字形突帯を廻らす。

#### S K14 龫棺墓 (Fig. 15・PL.13)

S K14 龫棺墓は墓地の東辺に位置する。竪穴は0.7×1.1mの隅丸方形を呈し、底面は幅約0.4mの狭いものとなっている。排水溝の掘削によってかなりの欠損がみられる。

櫛棺墓は単棺で口縁部の半分を欠損するが大型の櫛形土器を使用している。N-131.5°-Eに主軸をとり、31°の傾斜をもって埋置されている。墓壙の掘削・櫛棺の挿入は東南側より行なわれている。

棺使用櫛は全体に胴部のふくらみが大きく、口縁部はよくしまる。口縁部は分厚く内傾化しており、直下に三角突帯1条を廻らす。胴部中位よりやや下った位置に2条の三角突帯を廻らしている。

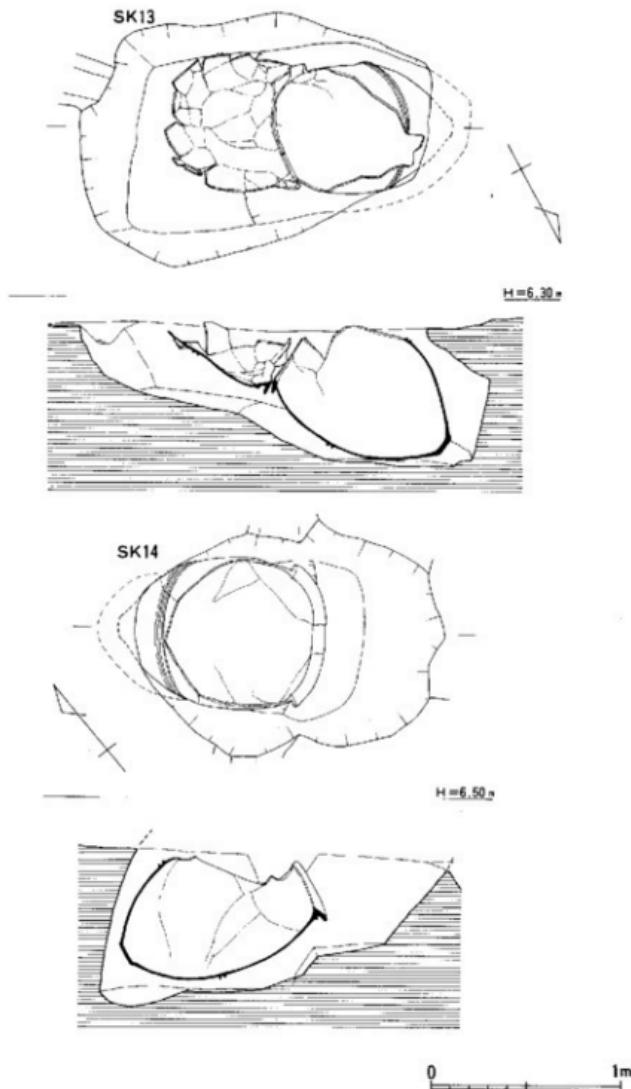


Fig.15 SK13・14棗棺墓出土状況実測図 (1/30)

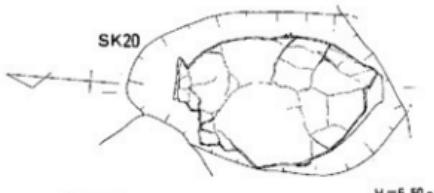
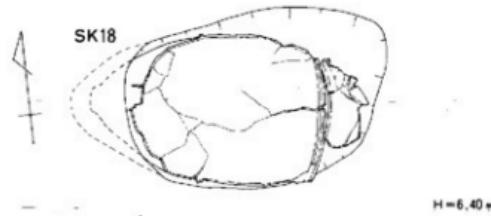
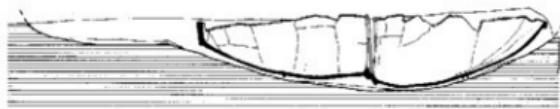
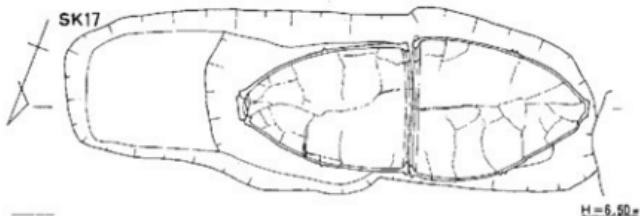


Fig.16 SK17・18・20巻棺墓出土状況実測図 (1/30)

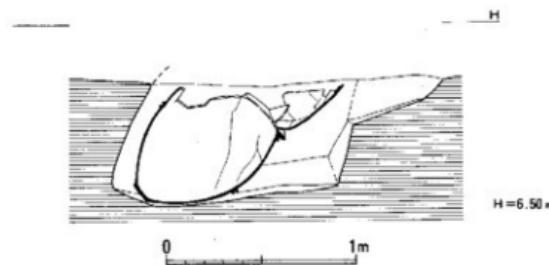
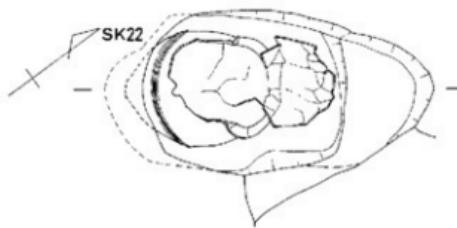
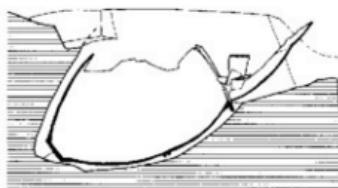
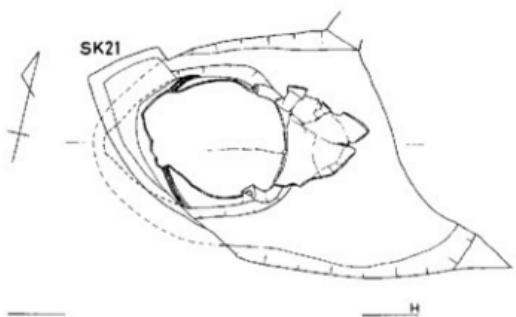


Fig.17 SK21・22号棺墓出土状況実測図 (1/30)

### S K17 裹棺墓 (Fig. 16・PL.15)

S K17 裹棺墓は墓地のほぼ中央部に S K18 裹棺墓の北側に並列している。墓壙は長方形を呈し、横穴との間に明瞭な段をもつ。

裹棺墓は上巻・下巻ともに大型夔形土器を使用した接口式合口裹棺墓である。N-67°-Eに主軸をとり、3.5°の緩い傾斜をもって埋置されている。墓壙掘方・裹棺挿入とともに東側からおこなっている。

棺使用巻は上巻が胴部中位から直線的に立あがり、口縁内面の突出が著しく、胴中位に一条の三角突帯をもつ。下巻は口縁が外方に傾斜し、胴部に2条の三角突帯を廻らす。

### S K18 裹棺墓 (Fig. 16・PL.15)

S K18 裹棺墓は S K17 裹棺墓の南側に隣接する。上部の削平により上巻は殆どない。

裹棺墓は上巻が大型鉢、下巻が大型巻を使用した接口式合口裹棺墓である。N-95°-Eに主軸をとり、29°の傾斜をもって埋置されている。墓壙掘方・裹棺挿入は東側からである。

棺使用巻は下巻が口縁部を最大径として、胴部が中位より直線的に立ちあがる。外脛部が垂れる「T」字形口縁を有し、直下に1条の「コ」字形突帯をもつ。胴部中位に同様の突帯を2条廻らす。

### S K20 裹棺墓 (Fig. 16・PL.16)

S K20 裹棺墓は S K21・37 裹棺墓と隣接しており時期的に先後関係があろうが出土状況では判断が不明である。

裹棺墓は単棺か。主軸を N-5°-W にとり、29°の強い角度で埋置されている。墓壙掘方・裹棺挿入も北側から行なっている。

棺使用巻は胴全体にふくらみが大きく、胴部中位より直線的に立あがり、口縁部は内方への張出しが大きく外方に傾斜する。口縁より下った位置に2条の三角突帯および胴部中位に「コ」字形突帯2条を廻らす。

### S K21 裹棺墓 (Fig. 17・PL.16)

S K21 裹棺墓は S K37 裹棺墓と切り合い関係にあってこれより新しく營まれた可能性がたかい。

裹棺墓は上巻が中型の巻、下巻が大型巻を使用した接口式合口裹棺墓である。主軸を N-77°-E にとり、36°の傾斜をもって埋置される。墓壙掘方・裹棺挿入は東側からである。

棺使用巻は上巻が胴部中位より口縁に向ってのしまりの大きいもの。下巻は胴部全体のふくらみが大きく、口縁付近でよくしまる特徴をもつ。口縁は小さく内傾し、直下に1条の三角突帯、胴中位に2条の「コ」字形突帯を廻らす。

### S K22 裹棺墓 (Fig. 17・PL.17)

S K22 裹棺墓は S X01 土壙墓の北側に隣接する。墓壙は長円形をなす。

裹棺墓は上巻が中型巻、下巻が大型巻の呑口式合口式裹棺墓(?)である。主軸を N-36°-E

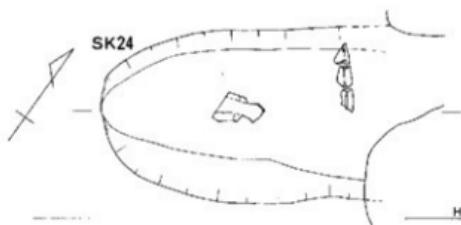
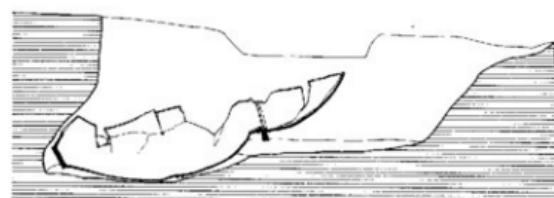
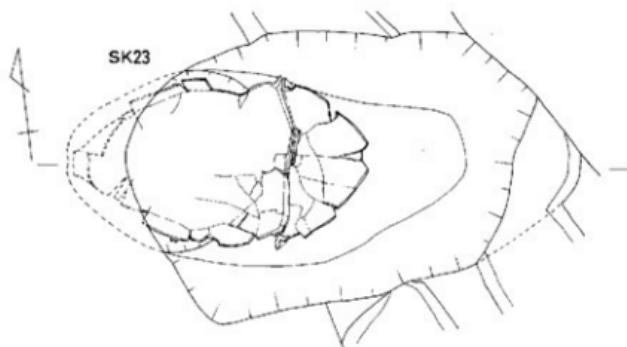


Fig.18 SK23・24槨墓出土状況実測図 (1/30)

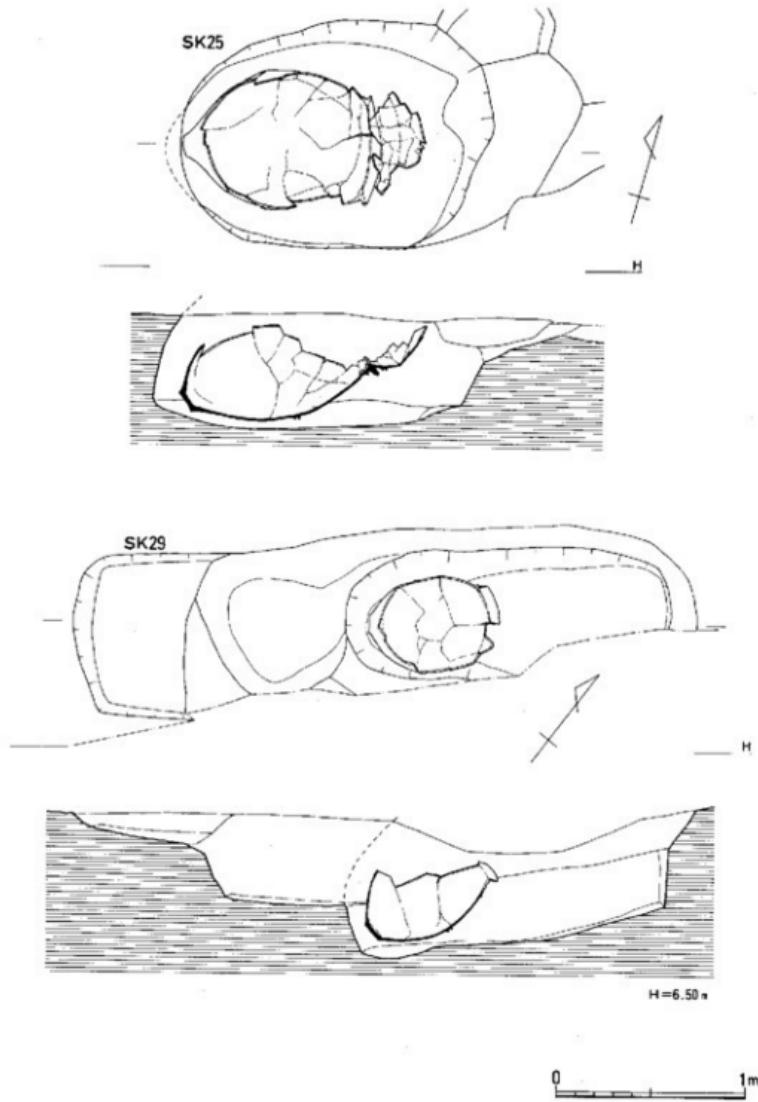


Fig.19 SK25・29槨墓出土状況実測図 (1/30)

にとり、 $39^{\circ}$ の急角度で埋置されている。墓壙掘方・喪棺挿入も北東方向からである。

棺使用喪は上喪が内窓気味に直立する口縁直下に一条の三角突帯を付す。下喪は胴部中位より口縁に向ってしまいが良い。内傾化する口縁直下に一条の三角突帯、胴部中位に2条の「コ」字形突帯を付す。

#### S K23喪棺墓 (Fig. 18・PL.17)

S K23喪棺墓はS K13喪棺墓の東側に隣接している。墓壙は埋設管掘方、基礎坑などによる搅乱で改変が著しいかほほ隅丸長方形をなす。

喪棺墓は上喪が大型の鉢・下喪が大型の彫形土器を使用した接口式合口喪棺墓である。同棺はN- $96.5^{\circ}$ -Eに主軸をとり、 $28.5^{\circ}$ の傾斜をもって埋置されている。墓壙掘方・喪棺の挿入は東側からなされている。

棺使用喪は上喪が口径に比して身丈のつまつた鉢で外方に強く張出す口縁は下方に垂れ口縁直下に一条の三角突帯を廻らす。下喪は胴部中位よりやや上った位置が最大径となり全体に膨らみのつよい喪で、やや外唇部の垂れ気味の口縁部直下に一条の「コ」字形突帯、胴部中位に下方のものが高く全体に上向きな「コ」字形突帯2条を付している。

#### S K24喪棺墓 (Fig. 18)

S K24喪棺墓は第2次調査第7号喪棺墓と切り合い関係にある。喪棺は下喪と考えられる縫口縁部と墓壙の底面に密着して喪胴部が見付かったにすぎない。喪は口縁が内窓しながら外反し、直下に一条の三角突帯を付す。

#### S K25喪棺墓 (Fig. 19)

S K25喪棺墓はS K24喪棺墓の西側に隣接する位置にある。墓壙は削平により上半部を失うが隅丸長方形をなす。

喪棺墓は上喪・下喪ともに大型の彫形土器を使用する接口式合口喪棺墓である。同棺は主軸をN- $74^{\circ}$ -Eにとり、 $34^{\circ}$ の急角度で埋置されている。墓壙掘方・喪棺の挿入は東側から行なわれている。

棺使用喪は上喪が胴部突帯以上打欠きの喪で突帯は三角突帯2条を付す。下喪は胴部中位を最大径とする喪で口縁外唇部が肥厚し、やや内傾する。口縁部直下に一条の「コ」字形突帯を付す。胴部中位には2条の「コ」字形突帯を付しており、全体に安定感をあたえる。

#### S K29喪棺墓 (Fig. 19・PL.18)

S K29喪棺墓は調査区南端壁際にあり、後世の搅乱によって墓壙の欠損が大きい。本棺は墓壙のスペース等から合口喪棺墓の上喪が失なされたものと考えられる。

喪棺墓は主軸をN- $53^{\circ}$ -Eにとり、 $45^{\circ}$ のきわめて急角度で埋置されている。墓壙掘方・喪棺の挿入は北東側からである。

棺使用喪は、下喪が胴部中位を最大径とする喪でこれより以上の内傾化がいちじるしい。口縁部は「く」字形に強く屈曲し、直下に1条胴部中位に2条の三角突帯を付す。

### S K 28 裔棺墓 (Fig. 20, PL. 19・20)

S K 28 裔棺墓は調査区南西部に位置し、住宅化の際の削平で非常な影響を蒙っているが全体のまとまりは保えることができた。検出時には東西に長い大形土壙と裢棺墓とが切り合い関係にあるものと考えて精査したが覆土層観察でも漆黒色土の單一層であり、また遺構全体が露出するに及んで長方形土壙の南辺に裢棺墓が直交することが判りこの豊穴も裢棺墓に付帯する施設であると判断した。

裢棺墓は上裢・下裢とともに大型の甕形土器を使用した接口式合口裢棺墓である。同棺は主軸をN-18.5°-Wにとり、ほぼ水平に埋置されており、接口部に近い上裢側に切先を北側に向かた細形銅劍1振が副葬されていた。銅劍は後世の流入土があり裢壁面より若干浮いた状態にあったが、露呈した面の裏面には布痕が顕著にみとめられた。

墓壙は東西方向に長く、東西・南北が4.1~4.2×2.2mの長大な豊穴を掘り、更に長軸と直交する不整長円形の豊穴(1.7×1.4m)とこれに連絡して南辺の壁中央部から0.7m程の横穴を穿つもので同時期に比定できる他の裢棺墓と比較すると際立った突出をみせており、裢棺埋覆に必要な墓擴の法量をはるかに越える点で上部に何等かの施設が想定されようがこれらについて触れる材料がなかった。

### 出土裢棺 (Fig. 21)

出土した裢棺はいづれも器面の荒れが著しく内・外面ともに調整痕を十分に明らかにできない。

下裢は外口径62cm・内口径48.5cm、底部径11.6cm、器高87cmをはかる甕形土器である。口縁部は内方への張出しがつよく、外方に向って傾斜する。胴部は口縁付近で緩くしまり、中位よりやや下った位置に非常に低い三角突堤1条を廻らす。底部外面は2cm程度の平坦部をもち内面が凹むあげ底となっている。器色は暗赤褐色～暗褐色を呈する。焼成は堅緻。胎土に石英砂などの砂粒の混入が多い。器壁は口縁部を除き約1cm程度である。また口縁下にみとめられる粘土接合痕から粘土帶の平均的幅は10cm内外である。

上裢は外口径59~60cm・内口径49cm、推定器高87~88cmをはかる甕形土器である。上裢は下裢に比して形態的に古い要素がある。口縁部は外方への発達が弱く内側への張出しがつよい。胴部は口縁付近で緩くしまるが、下方は直立的で中位よりやや上った位置に低い三角突堤1条を廻らす。またこの突堤より下方は急に径を減じて底部へとすばまる。器色は黄褐色～暗黄褐色を呈する。焼成は堅緻である。胎土は石英粗砂などを多く含む。器壁厚は0.8~1cmをはかる。また粘土接合痕からみた粘土帶の平均的幅は11~12cm程度であった。

### 副葬銅劍 (Fig. 22・PL. 20)

S K 28 裢棺墓に副葬銅劍は全面が綠青でおおわれている以外は殆ど欠損はみられない。法量は全長30.35cmをはかり、茎長2.1cm、劍方長3.3cm(幅は上端突出部3.4cm、中位3.25cm、下端

SK28

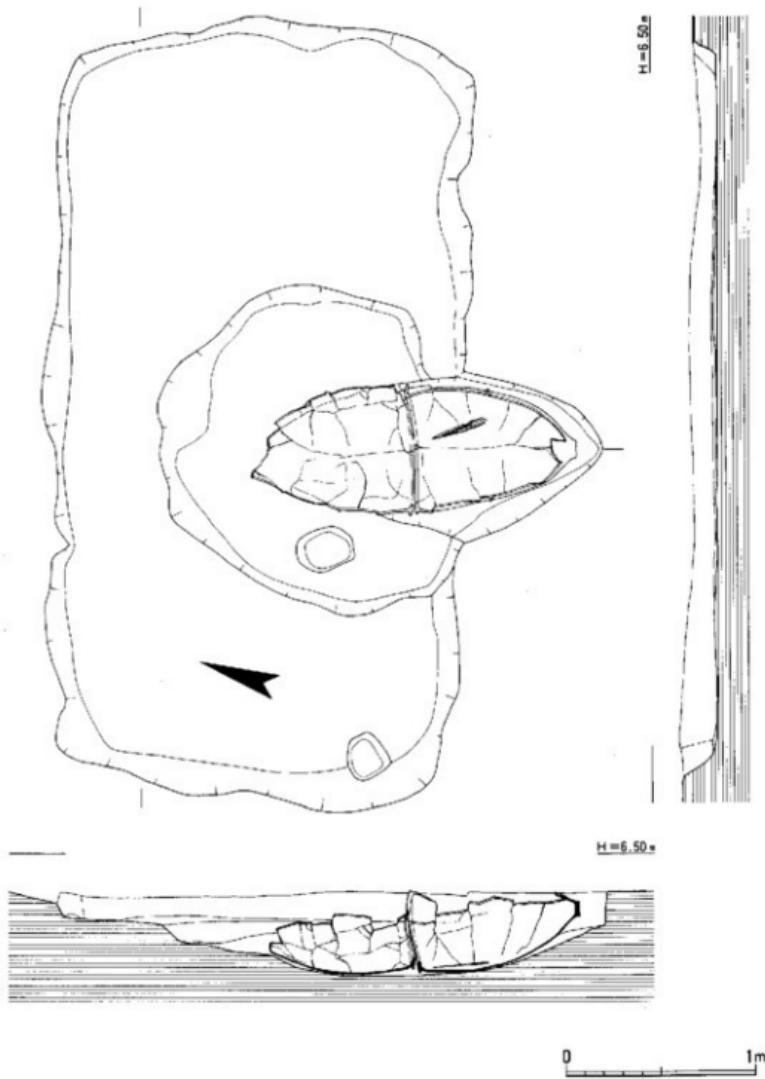


Fig.20 SK28秦墓出土状况实测图 (1/30)

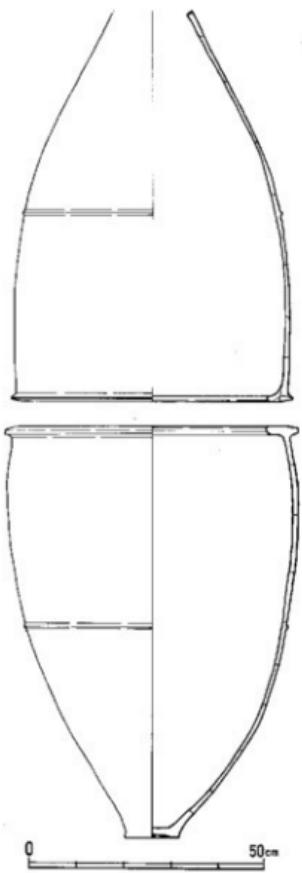


Fig.21 SK28太槍実測図 (1/12)

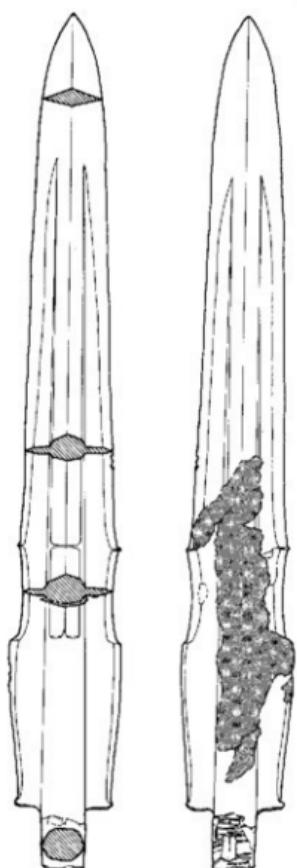
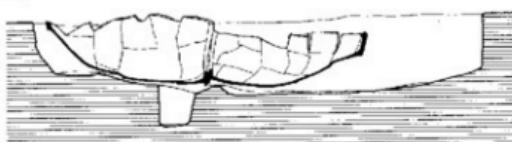
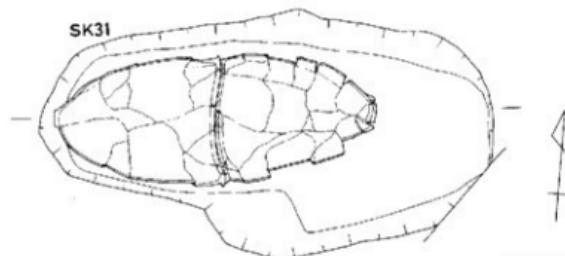
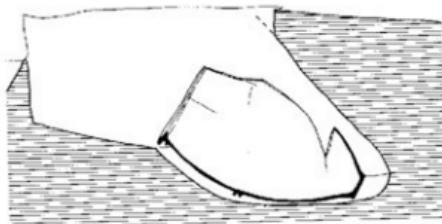
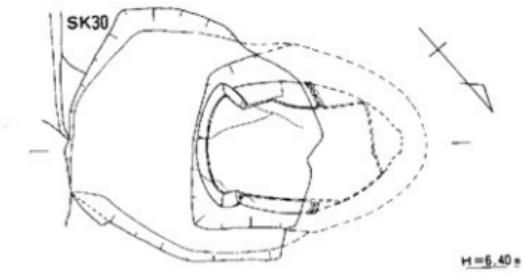


Fig.22 SK28太槍基副鉢刺実測図 (1/2)

突出部3.8cm）関部幅3.4cmをはかる。また重量は204gである。銅剣は鋒より刃方下端部まで背に鎬をもち、これ以下は鎬がなく、背部は円棒状となる。また刃方上端部は棘状に両側とも突出し、関部端も両側がまるく突出している。次に身部の最大部は刃方下端部にあって幅4cm



0 1m

Fig.23 SK30・31號棺墓出土狀況實測圖 (1/30)

をはかり、同部位での背部の幅は1.4 cmとなり、両部位の比率は約3:1の割合となる。これらの諸特徴からこの銅劍は森貞次郎氏の分類に従えばB1b型細形銅劍にあたり、岩永省三氏による細形銅劍Ia型式に相当し、中期前葉を中心とし一部中葉まで残る副葬類例に符号するものといえる。また銅劍には劍身を包む様に關部から鉗に向かって幅7~8 mm単位の布巻き痕跡および茎に糸を巻付けた痕跡が認められ、内容についての鑑定結果ではいづれも紺で革のものは撚りをかけず繊維を束ねたものである。また劍身に付着する紺布は国産品である可能性が高いとされた。詳細については付論によられた。

註

- 森貞次郎「弥生時代における細形銅劍の進歩について」『日本民族と南方文化』全閣丈大博士記念委員会編 1968年
- 岩永省三「弥生時代青銅器型式分類編年再考」『九州考古学』N55 1980年

S K30櫛棺墓 (Fig. 23・PL.21) S K30櫛棺墓は主軸をN-128.5°-Eにとり、29°の傾斜をもつて埋置された单棺墓である。墓壙掘方・櫛棺の挿入は東南側よりおこなわれている。

棺使用部は胴部中位を最大径とする大型甕である。外方によく発達した口縁部は内傾気味で直下に一条の「コ」字形突帯を廻らす。胴部中位には2条の高い「コ」字形突帯を廻らす。全体に胴部のふくらみがつよく、底部も安定している。

S K31櫛棺墓 (Fig. 23・PL.21) S K31櫛棺墓は調査区南西端に位置し、上妻・下妻とともに大型の櫛形土器を使用した接口式合口櫛棺墓である。主軸をN-88.5°-Eにとり、7.5°の角度で埋置されている。墓壙掘方・櫛棺の挿入は東側から行なわれている。

棺使用部の上妻は胴部中位よりやや上った位置を最大径として内傾しながら立あがる。口縁部はたれ気味で胴部に2条の三角突帯を付す。下妻は全体的に胴部のしまりが少なく、内方に発達した口縁部は若干外傾する。胴部中位に一条の「コ」字形突帯を付す。

S K32櫛棺墓 (Fig. 24・PL.22) S K32櫛棺墓は調査区南端にあたり、排水溝による破壊が著しい。下妻のみしか残らないが、主軸をN-56.5°-Eにとり、26°の傾斜で埋置されている。墓壙掘方・櫛棺の挿入は東側から行なわれている。

棺使用部は胴部が中位よりやや上った位置より内傾化し、外方によく伸びる口縁部は内傾して直下に三角突帯1条を付す。胴部中位に下帯が高い「コ」字形突帯2条を付す。

S K33櫛棺墓 (Fig. 24・PL.22) S K33櫛棺墓は調査区南端に位置し、岡にはないが木来は複口式合口櫛棺墓である。主軸をN-62.5°-Eにとり、46°の傾斜をもつて埋置されている。墓壙掘方・櫛棺の挿入は東側からである。

棺使用部は下妻がつよく「K」字形に屈曲して直下に一条の三角突帯を付す。胴部最大径は中位よりやや上にあり、中位に2条の「コ」字形突帯を付す。

S K34櫛棺墓 (Fig. 25・PL.23) S K34櫛棺墓はS K32櫛棺墓の北側に隣接し、擾乱による破壊が著しい。同墓は下妻のみを残し、主軸をN-58°-Eにとり、44°の強い角度で埋置されて

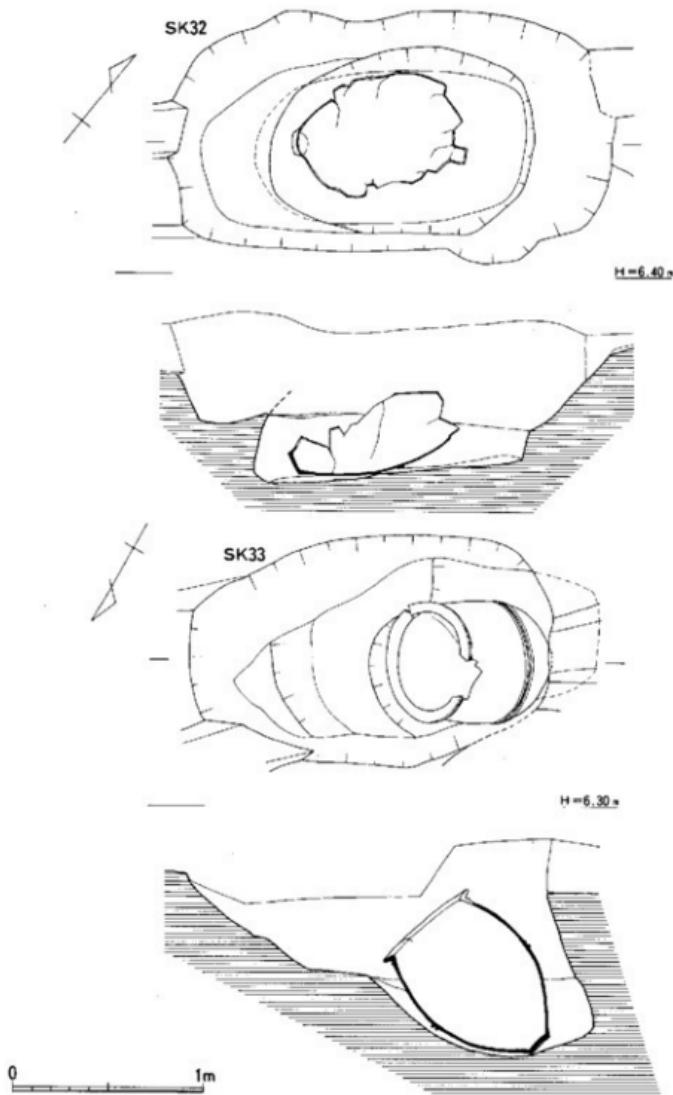


Fig.24 SK32・33雙棺墓出土状況実測図 (1/30)

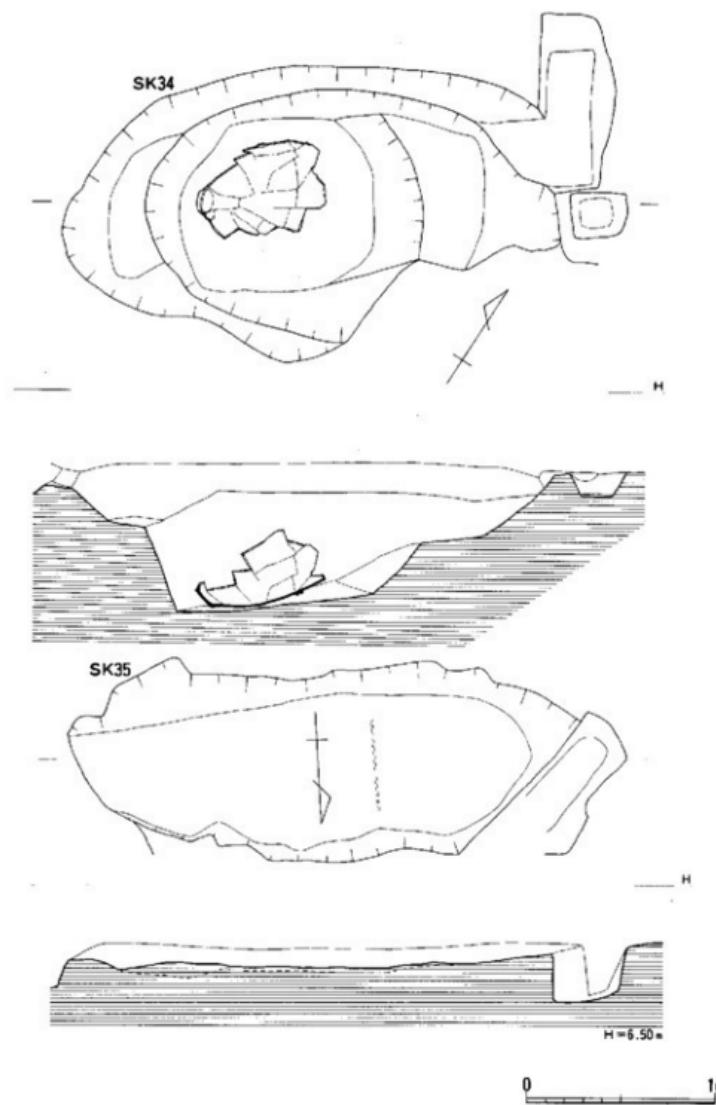


Fig.25 SK34・35号棺墓出土状況実測図 (1/30)

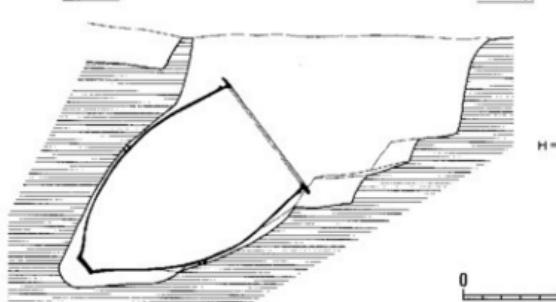
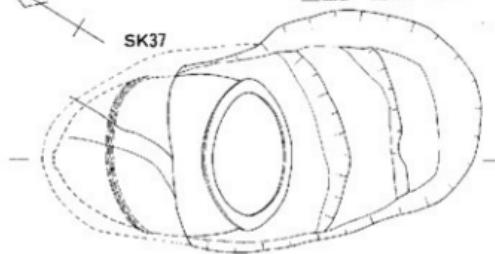
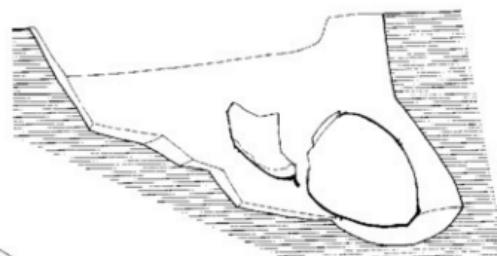
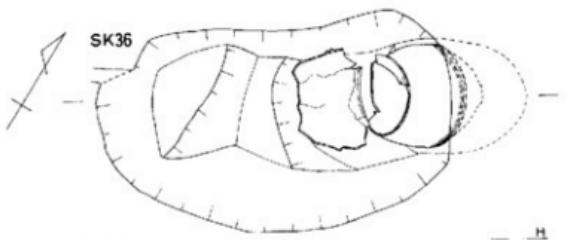


Fig.26 SK36・37棗棺墓出土状況実測図 (1/30)

いる。墓壙掘方・襲棺の挿入は東側から行なわれている。

棺使用襲は口縁部を欠損するが、胴部は中位より直立に近く、下部突帯が高く、下向きの「コ」字形突帯2条を中位に付している。

S K35襲棺墓 (Fig.25・PL.21) S K35襲棺墓は上部を完全に破壊され、断面「コ」字形突帯痕をスタンプとして残しているが、本棺は第2次調査における第11号襲棺墓と位置的に重複する可能性がある。

S K36襲棺墓 (Fig.26・PL.23) S K36襲棺墓はS X08方形周溝遺構と切り合い関係にあるが新・古の差は明確でない。上襲・下襲とともに中型の襲形土器を使用した接口式合口襲棺墓である。主軸をN-59°-Eにとり、40°の強い傾斜をもって埋置される。墓壙掘方・襲棺の挿入は東側からである。

棺使用襲は上・下襲ともに口縁の屈曲がつよく、直下に一条の三角突帯を付す。胴部の中位よりやや上部を最大径として急激に口縁へとしめる。胴部中位にいづれも2条の「コ」字形突帯を付す。

S K37襲棺墓 (Fig.26・PL.24) S K37襲棺墓は墓地東辺に位置する単棺墓で、墓壙は3段の平坦部を残し、埋置状態をよくとどめている。棺は主軸をN-32°-Wにとり、37°の強い傾斜で埋置される。墓壙掘方・襲棺の挿入は東南側より行なわれる。

棺使用襲は器高118cm、口径77.5cm、胴部最大径75cm、底部径10cmをはかり墓地内では最大のものである。胴部は中位よりやや下った位置よりゆるく内傾して立あがる。口縁も若干内傾し、直下に三角突帯1条を付す。また胴部には2条の「コ」字形突帯を付す。

S K38襲棺墓 (Fig.27) S K38襲棺墓は墓地の北東辺に位置し、上襲・下襲ともに大型の襲形土器を使用した接口式合口襲棺墓である。墓壙は斜坑に近い形態となる。主軸をN-9°-Wにとり、34°の角度で埋置される。S K4 襲棺墓が墓壙上にのる。

棺使用襲は上襲が口縁部が「く」字形につよく内傾し、直下に一条の「コ」字形突帯を付し、胴部中位に2条の「コ」字形突帯を付す。下襲は口縁がやや外方に垂れ、よくしめる。最大径を胴部中位にもち、ここに2条の「コ」字形突帯を付す。

S K40襲棺墓 (Fig.27・PL.24) S K40襲棺墓は墓地西端に位置し、主軸をN-1.5°-Wにとり、21°の角度をもって埋置される接口式合口襲棺墓である。

棺使用襲は上襲が胴上部より打欠きで、2条の「コ」字形突帯を付す。下襲は口縁部がよくしめる、外口唇が肥厚して内傾する。最大径を胴部中位よりやや上にもつ。

S K41襲棺墓 (Fig.28・PL.25) S K41襲棺墓は第1号古墳周溝掘削により破壊を受けている。主軸をN-91.5°-Wにとり、40°の角度で埋置される。棺は下襲のみで胴部の膨らみが大きく2条の「コ」字形突帯を付す。

S K42襲棺墓 (Fig.28・PL.25) S K42襲棺墓は墓地南端に位置し、主軸をN-83°-Eにと

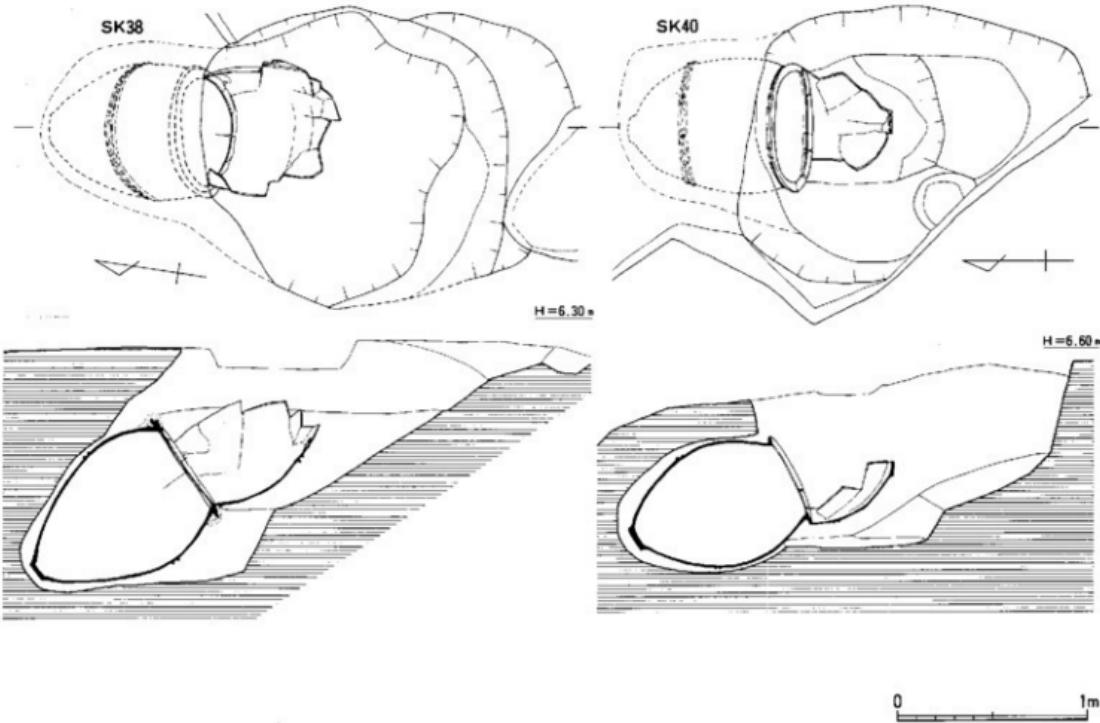


Fig.27 SK38・40號棺墓出土状况実測図 (1/30)

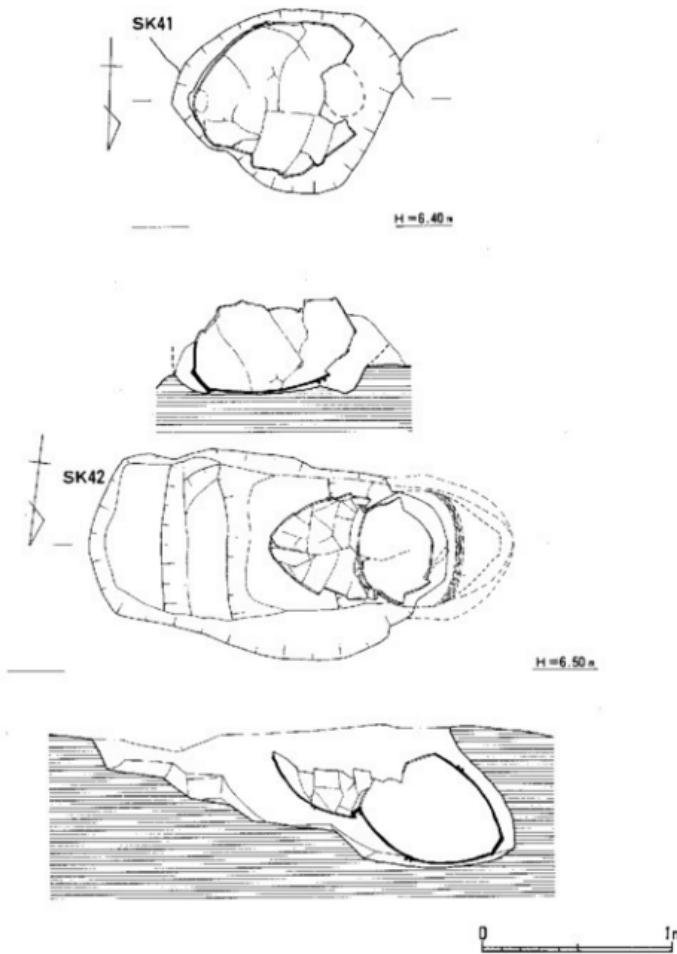
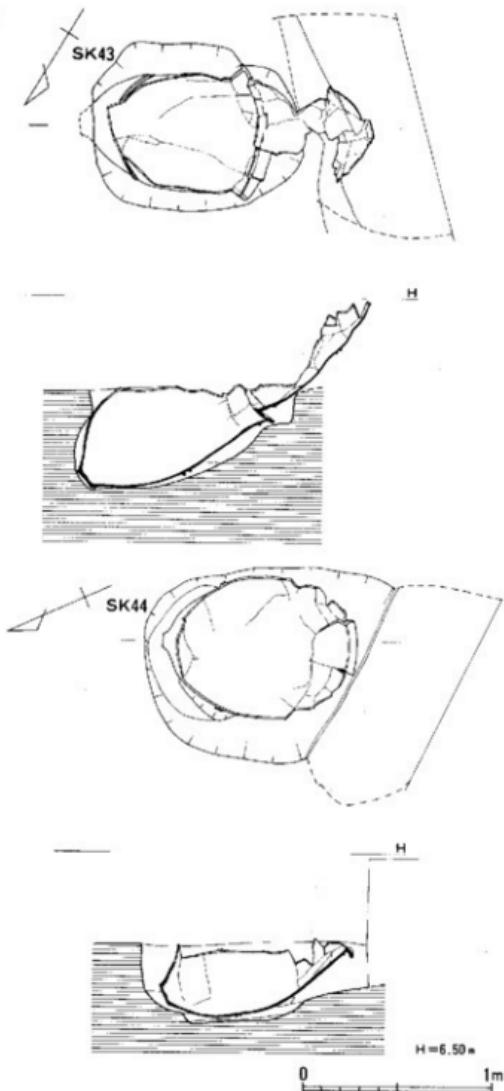


Fig.28 SK41・42號棺墓出土状況実測図 (1/30)

り、30°の傾斜で埋置される。覆口式合口窓棺墓である。下窓に大腿骨片が残る。

棺使用窓は上窓が打欠きで、下窓は口縁部がよくしまり、「く」字形に強く屈曲する。胸部中位に2条の「コ」字形突帯を付し、最大径は中位よりやや上った位置にある。胴下半もしまりがなく、底部は安定している。



#### S K 43 壺棺墓

(Fig.29・PL.26) S K  
43壺棺墓は墓地西辺に位  
置し、主軸を N-110.5°  
-Wにとり、39.5°の角度  
をもって埋置される接口  
式合口壺棺墓である。

棺使用甕は上甕・下甕  
とともに胴部中位よりやや  
下った位置に2条の突帯  
を廻らし、これ以上は若  
干外反しながら直立する。  
下甕は口縁が内外方によ  
く発達し、直下に「コ」  
字形突帯を1条廻らす。  
上甕は口縁外唇が下方に  
垂れ、内唇は肥厚し、外  
唇直下に一条の三角突帯  
を廻らす。

#### S K 44 壺棺墓

(Fig.29・PL.26) S K  
44壺棺墓は主軸を N-12  
7°-Eにとり、24°の角度  
で埋置されている。單棺  
墓であろう。墓壙掘方・  
甕棺埋置は東側からなさ  
れている。

棺使用甕は口縁部が内  
外によく発達する。最大  
径部は胴部中位よりやや  
下った位置で、2条の「コ」  
字形突帯を付す。

Fig.29 SK43・44壺棺墓出土状況実測図 (1/30)

次に S K03・04・06・11・15・16・19・26・27・39號棺墓については残りが悪く、図示縮尺の都合上順不同となった。これらのうち S K03・04・11・19・26については小児用號棺墓と考えられる。以下個別に説明を加える。

S K03號棺墓 (Fig.30) S K03號棺墓は小型窓の胴部下半以下を残すのみである。S K39號棺墓より新しい所産であろう。主軸を N-82°-W にとる。

S K04號棺墓 (Fig.30・PL.9) S K04號棺墓は墓地北端に位置し、S K38號棺墓（中期末）の墓壙上にのり、これより新しい所産である。棺は主軸を N-116°-E にとり、26°の傾斜をもって埋置されている。墓壙掘方・號棺埋置は東南側より行なわれている。

S K06號棺墓 (Fig.30・PL.11) S K06號棺墓は墓地西端に位置し、長さ 110×80cm 程度の東西に長い豊穴上に倒立の状態で口縁を下にして埋置されている。所謂「倒置棺」は墓壙底面に接して棺を倒立させるのが一般的であるが、この場合は底面より 20~25cm 程度浮いている。棺使用窓は口縁部がよくしまり、内寫気味に外反する口縁直下に一条の三角突帯を付す中型窓である。

S K15號棺墓 (Fig.31・PL.14) S K15號棺墓は全くの削平を受け、胴部をわずかに残すにすぎない。棺使用窓は胴部に 2 条の三角突帯を付す大形窓である。

S K16號棺墓 (Fig.30・PL.14) S K16號棺墓は S K03 土壙墓の南辺を切って営まれている。棺は主軸を N-3.5°-W とほぼ南北方向に向けて埋置されており、胴部中位に 2 条の三角突帯を付す大形窓であろう。墓壙掘方・號棺挿入は北側から行なわれている。

S K19號棺墓 (Fig.30・PL.15) S K19號棺墓は S K28號棺墓の北側に隣接して痕跡的に姿をとどめていた。棺は上・下窓とともに小型窓形土器を使用する接口式合口號棺墓であり、接口部に黄灰色粘土による目詰りがみられた。主軸を N-75°-E にとっている。破片のため時期的には正確を期し難いが中期中葉の所産であろう。

S K26號棺墓 (Fig.31・PL.18) S K26號棺墓は S K27號棺墓とともに S K28號棺墓の東側に位置する。棺は小形の窓形土器を下窓に使用したものと思われる。墓壙も 80×55cm 程度しか残っていない。主軸を N-73°-E に向けて埋置されている。

S K27號棺墓 (Fig.31・PL.18) S K27號棺墓は S K28號棺墓の東に隣接している。後世の削平により胴部の半分を欠損している。棺は主軸が N-9°-E とほぼ南北方向をとり埋置されている。墓壙掘方・號棺の埋置は北側から行なわれている。

S K39號棺墓 (Fig.31) S K39號棺墓は S K3 豐棺墓と隣接する。削平により胴部の半分を失なっている。棺は主軸を N-130.5°-E にとり、40°の角度をもって埋置された人形である。棺使用窓は胴部に 2 条の三角突帯を付す。

### 小結

號棺墓地は前述の如く後世の削平・擾乱による改変があって遺構の遺存は悪く、また調査地

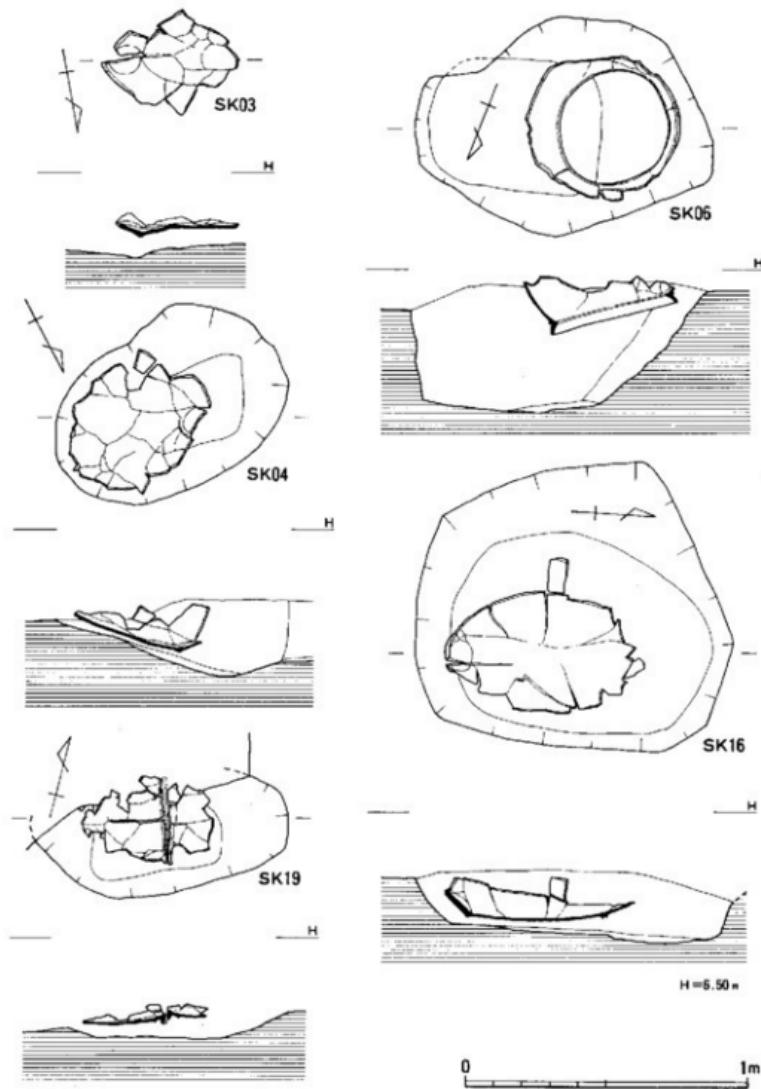


Fig.30 SK03・04・06・16・19號棺墓出土狀況實測圖 (1/20)

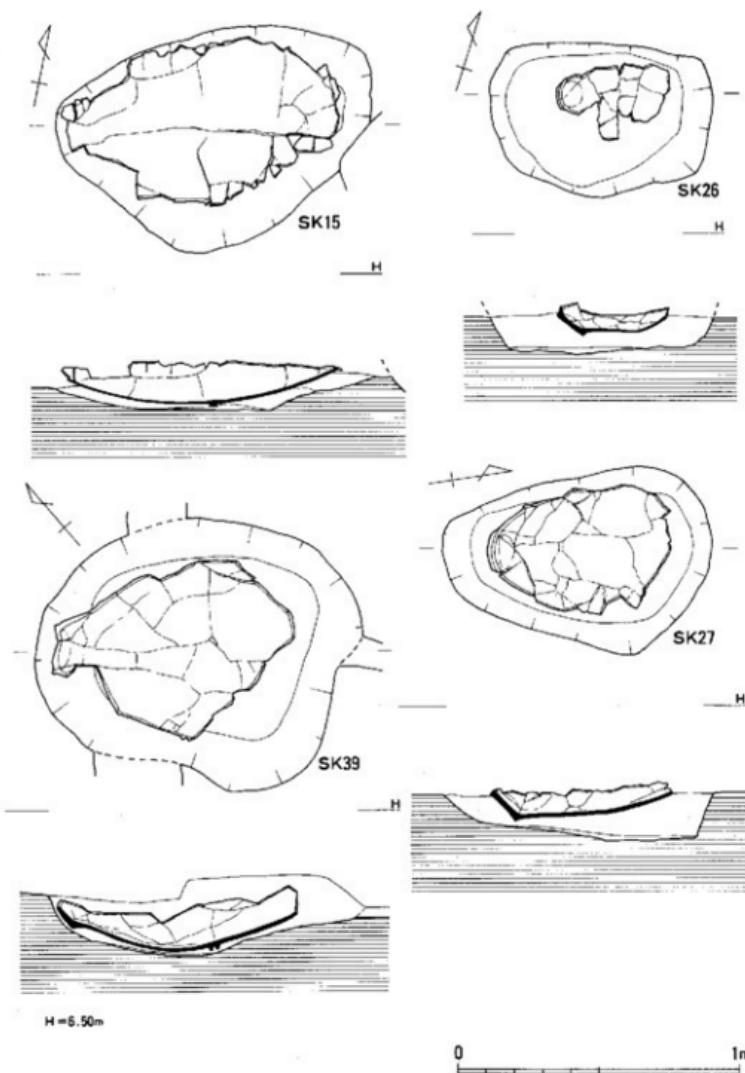


Fig.31 SK15・26・27・39墓棺墓出土状況実測図 (1/20)

SK No.	插圖番号 図版	合口型式	器 形		埋置方 位	埋置角 度	時 期	備 考
			上	下				
01	Fig.11 PL. 9	接口式	甕	甕	N-66.5° - E	9°	中期中葉	
02	Fig.11 PL.10	"	"	"	N-30.5° - W	0°	中期前葉	
03	Fig.30	?			N-82° - W	?	中期末	
04	Fig.30 PL. 9	?			N-116° - E	26°	中期末	
05	Fig.12 PL.10	接口式	鉢	甕	N-78° - E	3.5°	中期中葉	
06	Fig.30 PL.11	單 棺				76°	中期末	倒置棺？
07	Fig.12 PL.11	"			N-112° - E	34°	中期末	
08	Fig.13 PL.11	接口式	甕	甕	N-89.5° - E	21°	中期末	
09	Fig.13 PL.11	覆口式	甕	甕	N-80.5° - E	31°	中期後葉	
10	Fig.14 PL.12	單 棺			N-51° - E	37.5	中期後葉	
11	Fig.14 PL.12	?				?	?	
12	Fig.14 PL.12	單 棺			N-78.5° - E	26.5°	中期後葉	
13	Fig.15 PL.13	接口式	甕	甕	N-118° - E	36°	中期後葉	
14	Fig.15 PL.13	單 棺			N-131.5° - E	31°	中期末	
15	Fig.31 PL.14	單 棺(?)			N-78° - E	-	中期前葉？	
16	Fig.30 PL.14	?			N-3.5° - W		中期後葉	
17	Fig.16 PL.15	接口式	甕	甕	N-67° - E	3.5°	中期前葉	
18	Fig.16 PL.15	"	鉢	甕	N-95° - E	29°	中期後葉	
19	Fig.30 PL.15	"	甕	甕	N-75° - E	?		
20	Fig.16 PL.16	單 棺(?)			N-5° - W	29°	中期中葉	
21	Fig.17 PL.16	接口式	甕	甕	N-77° - E	36°	中期末	
22	Fig.17 PL.17	香口式(?)	甕	甕	N-36° - E	39°	中期末	
23	Fig.18 PL.17	接口式	甕	鉢	N-96.5° - E	28.5°	中期後葉	
24	Fig.18	接口式(?)	鉢	甕	N-52.5° - E	?	中期末葉	
25	Fig.19	接口式	甕	甕	N-74° - E	34°	中期後葉	
26	Fig.31 PL.18	?			N-73° - E	53°		
27	Fig.31 PL.18	?			N-9° - E	42°	後期初頭	
28	Fig.20 PL.19	接口式	甕	甕	N-18.5° - W	0.5°	中期前葉	細形銅劍柄葬
29	Fig.19 PL.18	?			N-53° - E	45°	後期初頭	
30	Fig.23 PL.21	單 棺			N-128.5° - E	29°	中期後葉	
31	Fig.23 PL.21	接口式	甕	甕	N-88.5° - E	7.5°	中期中葉	
32	Fig.24 PL.18	?			N-56.5° - E	26°	中期後葉	
33	Fig.24 PL.22	覆口式	甕(?)	甕	N-62.5° - E	46°	中期末	
34	Fig.25 PL.23	?			N-58° - E	44°	中期末？	
35	Fig.25 PL.21	?				?	？	墓壙のみ
36	Fig.26 PL.21	接口式	甕	甕	N-59° - E	40°	後期初頭	
37	Fig.26 PL.16	單 棺			N-32° - W	37°	中期後葉	
38	Fig.27 PL. 9	接口式	甕	甕	N-9° - W	34°	中期末	
39	Fig.31	單 棺(?)			N-130.5° - E	40°	中期後葉？	
40	Fig.27 PL.24	接口式	鉢(?)	甕	N-1.5° - W	21°	中期後葉	
41	Fig.28 PL.25	單 棺(?)			N-91.5° - W	40°	中期末	
42	Fig.28 PL.25	覆口式	甕	甕	N-83° - E	30°	中期末	
43	Fig.29 PL.26	接口式	甕	甕	N-110.5° - W	39.5°	中期中葉	
44	Fig.29 PL.26	單 棺(?)			N-127° - E	24°	中期後葉	

Tab. 1 墓棺墓一覧表

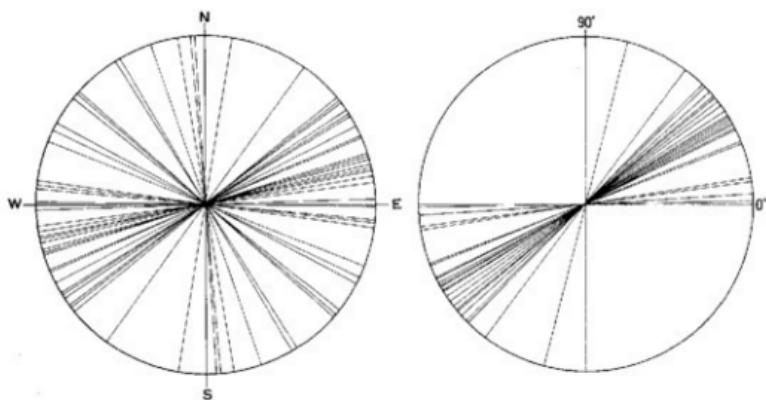


Fig.32 墓地の埋置方位と角度

区外に墓地が拡がることが第2次調査の成果などから知られるところであるがここでは調査区内で観察された若干の点をあげて葬棺墓地のまとめとしたい。

葬棺墓は棺そのものが現在修復中であり、正確な実測図をもとにすることは出来ないが葬棺墓間の切り合ひ関係および土器の各部分の特徴を観察して時期別の構成を考えた。今回調査および第2次調査の数を合計すると52基以上となるが、後述する土塚墓を除けばこの墓地の初源は弥生前期に属するものではなく、弥生中期前葉でも新しい段階（汲田式期）にあるといえる。この時期では細形銅剣を副葬したSK28葬棺墓がこの墓地ではもっとも古いタイプの葬棺と考えることができる。またこの時期は後につづく中期中葉に属する葬棺墓の分布と似て全体に散在的である。続く中期後葉から後期初頭にかけての時期が墓地形成の主要な時期である。中期後葉では明らかなもので12基があり、南北に細長くまとまる墓地の東辺に集中し、両側にも散発的にある。また続く中期末～後期初頭では先の中期後葉に属する葬棺墓の存在を意識するかのように分布が重複しており、しかも積極的に切合ひをもつものは少なく、15基が明らかにこの時期のものと考えられる。次に葬棺墓は墓壙掘方・葬棺挿入の方向が位置上で特徴をなしている。これは墓地形成時における旧地形の形状を反映していると同時に旧地形では東斜面にあたるとおもわれる墓地東辺部に中期後半～後期初頭にかけての葬棺墓が集中して営まれる点は墓地内においてより有利な場所がすでに以前の葬棺墓によって占地されていたことによるのかも知れない。

## (2) 土壙墓 (Fig.33~36・PL.27・28)

土壙墓と考えられるものは7基(S X01~07)が区別された。土壙墓は調査区西端部櫛棺墓地内に3基(S X01~03)、他に古墳時代後期溝(S D04)に切られるS X04土壙墓および調査区中央部に残るS C04竪穴住居址に重複するS X05・06・07土壙墓である。他に溝状遺構の項で述べるS X08は櫛棺墓地内にあるS X02土壙墓あるいは隣接する土壙を主体部とする墳墓施設の一部と考えたが明らかにされなかった。以下個別に出土状況について説明を加え、次いで出土遺物にもとづいて時期比定を行いたい。

### S X01土壙墓 (Fig.33)

S X01土壙墓は櫛棺墓地東辺に位置し、S K24櫛棺墓(中期末葉)に隣接するが他に遺構との切断関係はない。同墓は主軸をN-65°-Wに向け、長幅は98×60cm、深さ40cmを残す。壁面は東小口部で染付磁器を含む円形豊穴によって破壊されているが全体的に形状は垂直に近く、部分的にオーバーハングする。底面は西側小口部が若干高くなる。

### S X02土壙墓 (Fig.33)

S X02土壙墓は櫛棺墓地東辺南端に位置する。同墓は主軸をほぼ南北方向のN-24°-Wにとる木棺土壙墓である。墓壙は隅丸長方形をなす2段掘方であるが、小口部および側壁部を水道管埋設溝によって破壊されている。上部掘方は長・幅が1.9~1.95×1~1.05m、深さ0.45mを残す隅丸長方形壇で北側の小口部は直線的とならずカーブを描き丸い。また下部掘方は搅乱によって小口部の2ヶ所のコーナーを失っているが、小口部幅0.6m、側壁部1.55mの隅丸長方形壇であり、北側の掘方は上部のものと同様に直線的にならない。埋置された木棺は実際の形態を全くとどめないか下部掘方の観察から外形最大規模としても小口幅0.45~0.5m、側壁長1.45m程度と考えられた。

### S X03土壙墓 (Fig.34・PL.27)

S X03土壙墓は櫛棺墓地北辺からやや南に位置する。同墓は主軸をN-104°-Wにとり、ほぼ東西方向に向け、墓壙掘方・主体部の南辺上に弥生中期後半以降に属すると考えられる洞部下半のみをのこすS K16櫛棺墓が當まれている。墓壙掘方は東・北辺の極く全辺におよばない部分を除き明確なものは二段となっている。外側にあたる上部掘方は側壁長4~4.1m、小口幅1.8m程度の長大なものであり、深さ0.25mを残す。また内側にあたる下部掘方は側壁長が3.8~3.85m、小口幅は東・西でそれぞれ1.1m・1.3m程度となっているが下部掘方には北側壁の両端部を除く部分と南側壁西半部分にいずれも壁面下に沿って小溝状に掘られた部分が見付かった。北壁に沿うものは長さ232cm、幅9~10cmをはかる。また南壁に沿うものは3ヶ所に切れぎれとなり連なっており、東側から順に長さ51cm・幅8cm、長さ49cm・幅4~5cm、長さ44cm・幅9~10cmをはかる。もっとも西側のものは壁面の延長上より若干内側に這入っている。これ

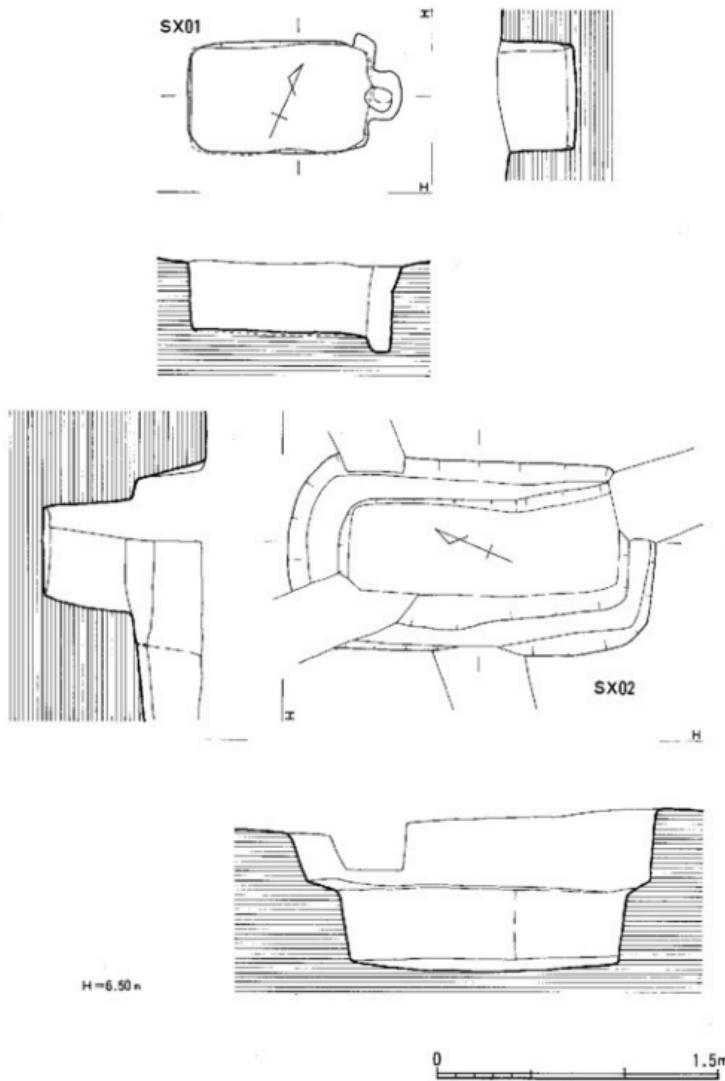


Fig.33 SX01・02土壤塞出土状況実測図 (1/30)

ら下部掘方側壁に残るのは更に内側にある主体部の外側にあることから板材をこれに並べたてて謂はば「櫛」的施設とした可能性が高いところである。なお壁面に立てた材は土層の観察によると高さは少くとも25cm以上はあると考えられた。次いで主体部は側辺長2.7m、小口幅50~60cmをはかり、横断面は半円状となる。西側小口部で少量の朱（？）痕があったが、他には何等の副葬遺物の出土はなかった。朱（？）痕部が埋葬時の頭位に近いとすれば前の「櫛」的施設が西側に片寄って全辺におよばないことも理由のない事ではないであろう。

#### S X04土壙墓（Fig.35・PL.28）

S X04土壙墓は調査区南東側に位置し、古墳時代後期と考えられるS D04溝の東端部近くでこれに切られている。遺構は主軸をN-122.5°-Wにとり、外側での長・幅が2.6~2.7×1.4~1.5mで深さ50~55cmをはかる隅丸長方形をなす。豎穴壁面は西側で検出当時オーバーハングする状態にあり、他では立あがりが緩い。また内部は西側で壁面より40~50cm幅の平坦面を有し、これより更に長円形の掘方がなされている。覆土は底面全部に黒色粘質土が厚さ2cm程度でひろがる以外は上層全て黄褐色ロームと黒色土の混在土である。

#### S X05土壙墓（Fig.36・PL.28）

S X05土壙墓はS C04豎穴住居址の床面に重複している。またS X06土壙墓を切って営まれている。遺構は主軸をN-130°-Eにとり、長・短辺が1.7×1.3mの不整な長円形をなす。豎穴は2段の掘方となり内部は1.3×0.8mの同形のものである。底面は平坦とならず、壁面は全て緩く立あがる。

#### S X06土壙墓（Fig.36・PL.28）

S X06土壙墓は前のS X05土壙墓に切られており、これより古い時期の所産である。主軸をN-80°-Wにとる木棺土壙墓である。墓壙掘方は側壁長2.4m、小口幅60~70cmをはかる隅丸長方形をなしていたと考えられる。主体部木棺は底面に残る痕跡より少くとも最大値で側壁長1.5m、小口幅50cm程度の規模を考えることができる。

#### S X07土壙墓（Fig.36）

S X07土壙墓はS C04豎穴住居址の南壁に近い床面に位置する。豎穴は東西長2.4m、南北幅1.1mをはかる不整な隅丸長方形をなし、主軸はN-76°-Wにとる。北辺は他遺構との重複であるか不明であるがこれに平行な平坦面をなしている。床面はほぼ平らで深さ35cm程度を残す。

#### 各土壙墓覆土の遺物

各土壙墓では明確に副葬状態で出土した遺物類はなかった。S X01土壙墓は覆土から弥生中期後半甕・甕棺胸部破片、中期丹塗り土器破片6点（壺・高环）、投弾等36点が出土した。S X02土壙墓覆土からは弥生中期鉢、甕・壺底部、中期後半以降の器台片などが出土した。S X03土壙墓は墓壙と木棺主体部覆土とを区別した。墓壙覆土からは上部・下部掘方を含めて分厚く、上げ底となる中期初頭の特徴をもつ甕底部、頭部が窪む蓋形土器破片、断面が逆「L」字

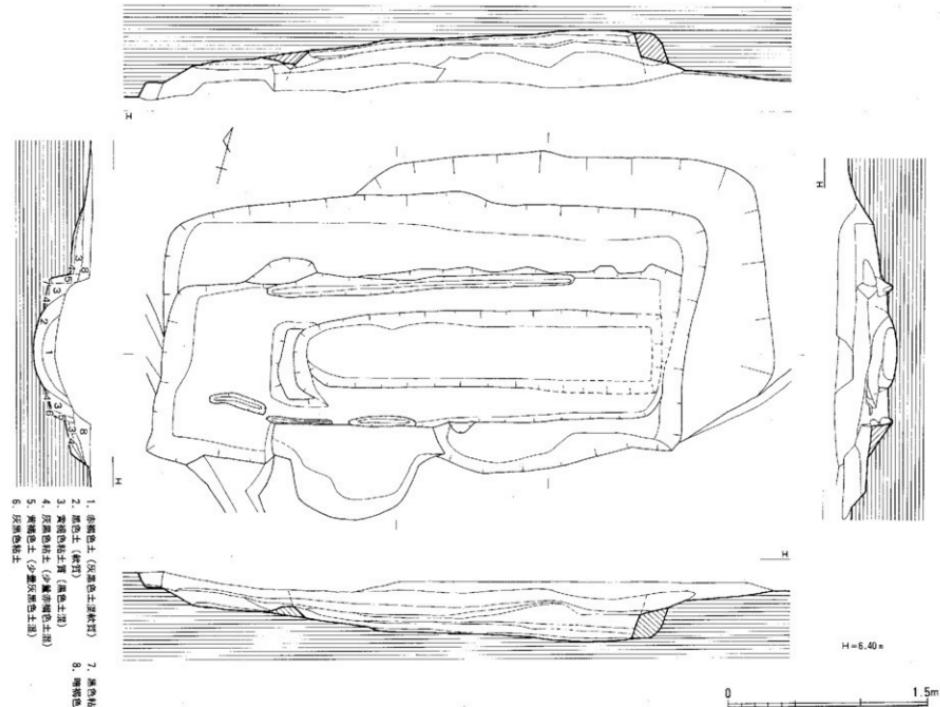


Fig34 SX03土壤层出土状况实测图 (1/30)

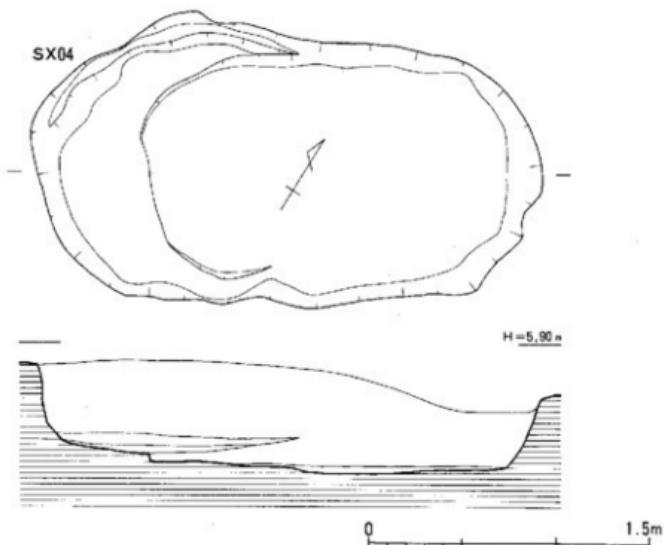


Fig.35 SX04土壤墓出土状況実測図(1/30)

形をなす直口縁、それに鉢および頸部が直立に近く、口縁部が緩く外反し、頸部下端に一条の三角欠帶を付す前期末～中期初頭にかかる壺形土器破片が出土した。また主体部覆土では口縁部が薄く、外方に発達の弱い逆「L」字形をなす壺破片など12点が出土した。SX04土壤墓の覆土では最下層の黒色粘質土から時期不詳破片および上層の黄褐色ローム上と黒色粘質土との混在土からは弥生中期後半に属する壺形土器破片、小型の丹塗り直口壺および砥石・黒曜石剝片・鉄片などがあり、他に時期不詳の土器片300点が出土した。SX05土壤墓覆土からは弥生中期壺形土器および口縁部がやや外反する長頸壺・口縁部が内傾する二重口縁壺、外反して朝顔状にひらく壺、鉢・砥石などの他に時期不詳破片36点が出土した。SX06土壤墓はSX05に切られているが覆土は上・下層に分層できた。上層(黒色土)では弥生中期壺・高环などの他に時期不詳破片76点が出土した。また下層(黄褐色ロームと黒色粘質土の混在土)では中期前葉壺形土器破片、器台片および他に時期不詳破片62点が出土した。またSX07土壤墓からは遺物の出土がなかった。以上個別に出土遺物についてはみたが、上塙墓の時期比定については出土状況・遺物の更なる検討を行なう必要があり、壺形墓地における位置と墓地形成の時期を含めて問題となろう。

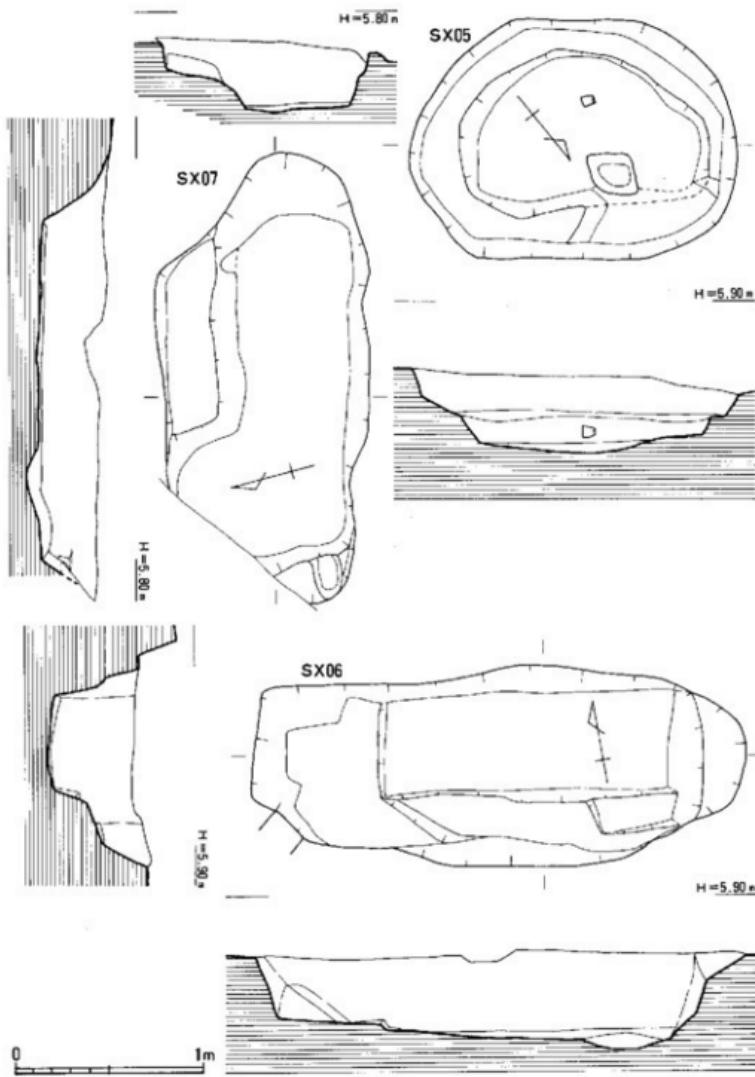


Fig.36 SX05・06・07土塘墓出土状況実測図 (1/30)

### (3) 竪穴住居址 (Fig.37・38・PL.29・30)

竪穴住居址と考えられるものは調査区内で9軒 (SC01~09) 以上検出できたが、前記の様に後世の削平工作と本来の遺構相互の重複とで十分に構造を平面的に把握できないもののが多かった。また近世以降のSD07・08溝以東にもその分布状態から住居址が存在するものと考えられた。以下各竪穴住居址について説明を加えることとする。

#### S C01住居址 (Fig.37・PL.29)

S C01住居址は調査区中央部南端に位置する。住居址は西辺・南辺が3.5m×4.0mでやや東西に長い方形を呈し、壁高10cm未溝で、床面積14m<sup>2</sup>となる。主柱穴は明らかでないが、床面中央にある60×90cmをはかる長円形の浅い掘込みに焼土が充満して炉址と考えられるところからこれを挟む南北2個のピットであろう。ベッド状施設はなく、東壁では壁面に沿って幅50cm程の浅い溝状遺構がはしる。覆土中より弥生中期中葉～後葉の蝶形土器、小型投弾、石製紡錘車が出上しており、炉址より中期壺・蝶形土器が少量出土した。

#### S C02住居址 (Fig.37・PL.29)

S C02住居址は調査区北端部に位置し、南半部のみを調査できた。住居は復原直徑が約7m前後となると考えられる円形住居址で、壁高50~60cmをはかり、壁面は西側ではほぼ垂直で東側に従って緩い傾斜をもつ。また壁直下には排水施設などはなかった。床面は柱穴が多く重複しており、床面より5~20cm程度の深さをもつものが多く、床面の調整がおこなわれたものと考えられる。また主柱穴は特定できなかった。住居址覆土および床面柱穴内から中期中葉を主とする甕・壺・無頸壺および鉢形土器破片など数10点に部分磨製の打製石鎌（黒曜石製）が出上した。上器片類は丹塗り土器破片が多い。

#### S C03住居址 (Fig.38・PL.30)

S C03住居址は調査区中央部に位置する。住居址は搅乱溝によるプランの変更が着しいが、南辺部長6.2m、東辺部長7.2mをはかり南北にやや長い方形を呈する。壁面は良好な部分で20cmを残す。プランはS C05住居址と切りあっており西壁コーナーと北辺が明らかではなく、SD04溝より切られている。床面はベッド状構造は明らかに認めることができなかった。床面積は約45m<sup>2</sup>である。また炉址と考えられるものではなく、主柱穴についても明らかにできなかった。

住居址覆土から豊富な遺物が出上したがS C05住居址との切り合いで所属を特定できないものも多い。第1区では口縁が「く」字形に屈曲する蝶形土器口縁破片・石庖丁残欠および古式土師器甕破片など、第2区では口縁部が内傾する二重口縁壺・鉢形土器、タテの削りが顕著な棒状石鍤未成品などがある。また第3区では口縁部が内傾する二重口縁壺、外面丹塗りの袋状口縁長颈壺、内傾する口縁部が上端で跳上げ状となり、口縁直下に「コ」字形突帯一束を付す

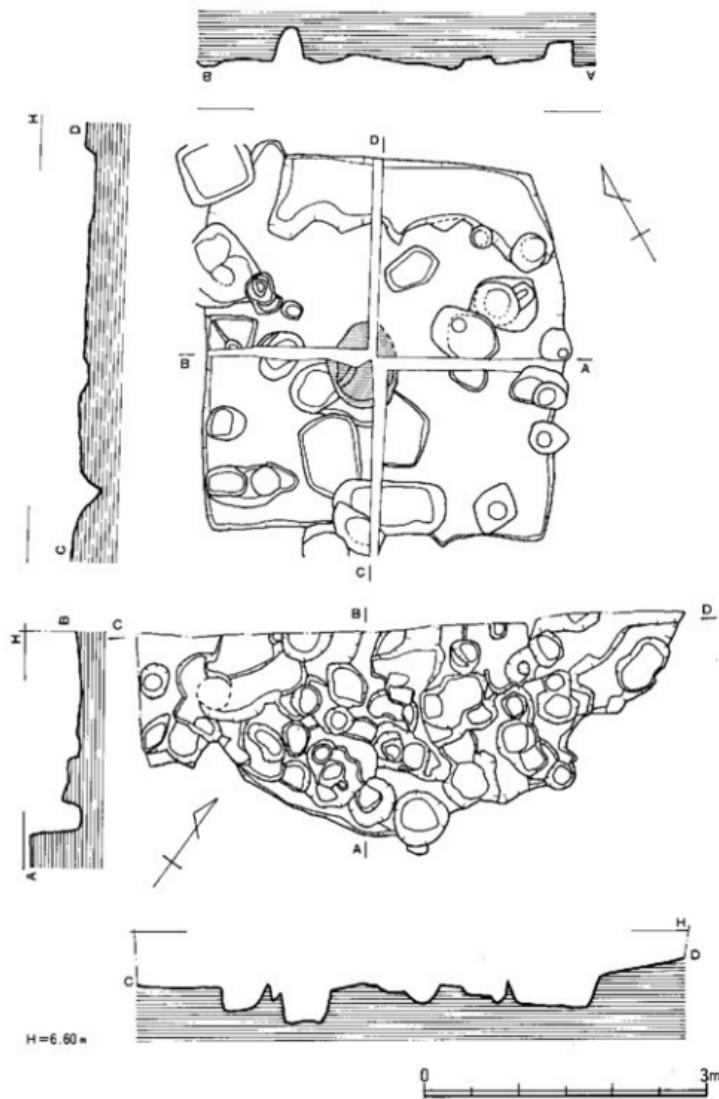


Fig.37 SC01-02整穴住居出土状況実測図 (1/60)

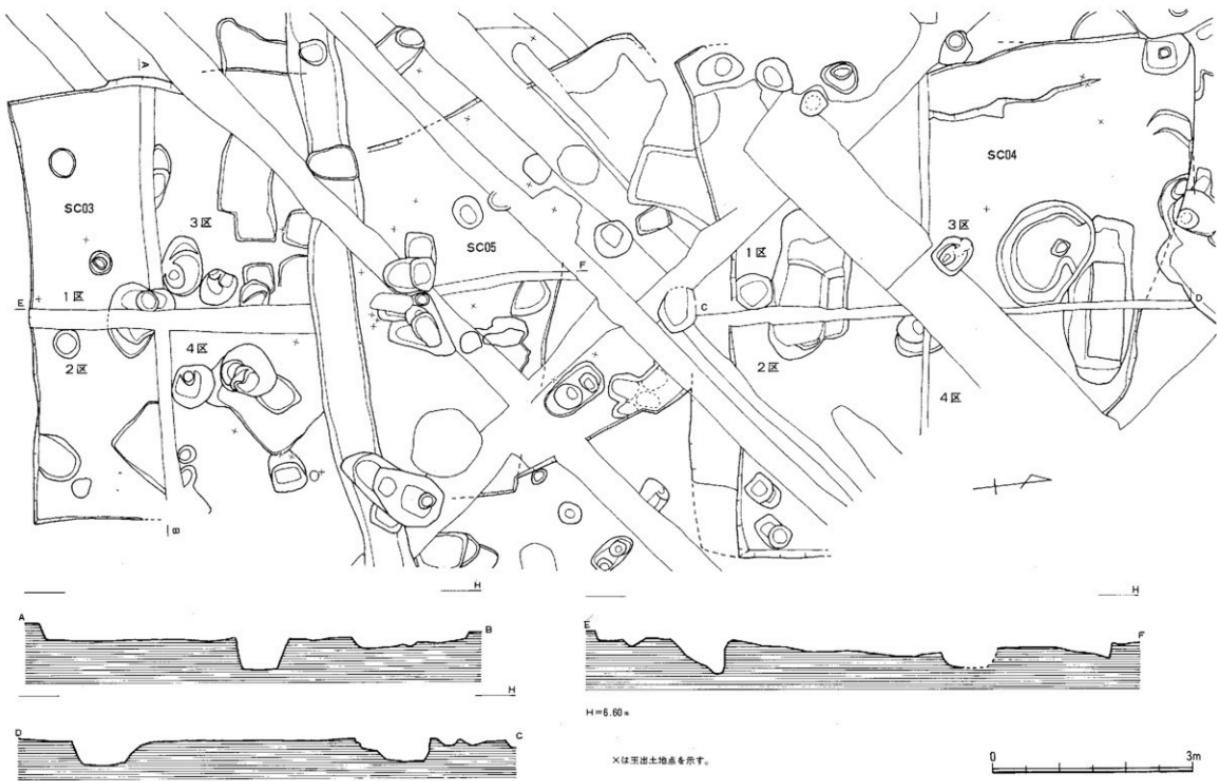


Fig.38 SC03・04・05整穴住居址出土状況実測図 (1//60)

甕形土器片および石庖丁・角棒状鉄器・鉢把手などが出土した。第4区では口縁部が直線的に外反し、胴部はふくらみが弱くヨコの荒いタタキ調整をもつ甕形土器破片・底部が丸味をもち不明瞭な甕形土器破片および石劍未成品・砥石などが出土した。またその他上面出土のものでは袋状口縁長頸壺、口縁が内傾する二重口縁壺、直立する口縁に胴部が半球状に屈曲する小型丸底壺形土器および紡錘形をなし長・短軸に溝を有する石鍤（滑石）などの出土があった。次に覆土中からはガラス小玉、碧玉製管玉が出土した。これらはスカイブルー色小玉10個、コバルトブルー色東玉・小玉各1個（小玉は直径が2mm～4mm）、丸玉1個、淡緑～緑色碧玉製管玉2個である。

#### S C04住居址（Fig.38・PL.30）

S C04は調査区中央部に位置しており、S C05住居址・S X05～07上墳墓に重複している。このうちS X06土墳墓は明らかに住居址以前に営まれており、S X07は住居址より新しい。住居址は南壁および西壁部に沿って幅80cm程の削り出しのベッド状施設をもつが他については不詳である。壁延長は西辺推定7.5m、南辺推定7.0mをはかり、平面形はほぼ方形をなすとおもわれる。

住居址覆土中からは土器・土製品・石器類・玉が出土した。第2区からは弥生中期甕形土器、胴部下半に斜めの刻目突帯を有する壺、第3区では口縁部が「く」字形に折れ、端部が跳上げとなる甕口縁破片、口縁が内傾する二重口縁壺破片および無基式打製石鍤（サヌカイト）・突錐（黒曜石製）・外弯刃石庖丁・鉄劍形鉄鎌・土器片利用の有孔円盤などがあり、スカイブルー色ガラス小玉1個も出土した。

#### S C05住居址（Fig.38・PL.30）

S C05住居址はS C03・04住居址と南・北部で切合っており、北壁・西壁を断続的に追うことが出来る。北壁推定長5.3mをはかり、平面プランは方形となろう。主柱穴・炉址およびベッド状施設は確認できなかった。

住居址覆土中から胴部下半に一条の「コ」字形突帯を付す壺形土器破片・スカイブルー色ガラス小玉（直径3.5mm～4.5mm）4個（東壁部など）などが出土した。

#### S C06・07・08・09住居址（付図1）

S C06・07・08住居址は調査区北端部に近く位置し、平面プランの一部を僅かに残すのみのものが殆どである。S C06住居址は西側コーナ部分を残す。覆土中に弥生中期前葉甕形土器、筒形器台を含む。S C07住居址は北壁の一部を残すのみである。覆土中より弥生中期甕形土器、筒形器台および青銅製鋤先・石製紡錘車が出土した。S C08住居址はS C06に隣接し、東壁の一部を残す。覆土中より弥生中～後期甕・壺形土器および四基式打製石鍤、石製紡錘車1点が出土した。S C09住居址は調査区南端に位置し、北壁にベッド状施設をもつ、これらは何れも平面形プランは方形となろう。

#### (4) 掘立柱建物 (Fig.39~43)

第6次調査では遺物を出土した柱穴と考えられる小豎穴は600個以上にのぼるが建物としてまとまると考えられるのは22棟 (S B01~22) 分である。又掘方・柱旗ともに良好な状態を残すものも他に多い。建物群は近世以後の溝S D07・08を水利施設とする水田造営がなされた際にかなりの削平がおこなわれたと考えられるが、現在の分布はこのS D07・08溝の東側・西側にある。溝の西側ではS B01~06建物があたり、柱掘方は40~50cmを残す。東側は段おちとなりS B07~22建物があり、柱掘方は20~30cm程度が残るが掘方も方形~長方形のものが目立ち、内部に礎板あるいはその痕跡を残すものが多く、地形的に本来低く、主柱の沈没が著しいためか或は建築上の特徴であるのかも知れない。建物群は規模的に柱間が1間×1間、1間×2間、2間×4間以上のものなどがあり、南北棟を主として東西棟分がこれに次ぎ造営の時期に幅があることを窺わせる。またS D07・08の東側では掘立柱建物・井戸址・土壙の分布には重複が一部みられるが特に井戸址S E36・37井戸址を除いては両遺構が各々2~3群の群を形成するように分布を異にするようと思われる。以下個別に出土状況について説明を加えることとする。また各建物の細部の計測値は表にして後にまとめた。(Tab.2)

##### S B01建物 (Fig.39)

調査区南端にある1間×1間の小規模な南北棟建物である。東西実長310cm、南北実長340cmをはかる。柱掘方は隅丸方形を呈し、70×80cmを最大とする大型のもので深さは40~50cmを残す。柱穴1は径が20cm程度の柱痕が認められる。柱穴3埋土中のみに遺物が検出された。弥生中期銚先形口縁壺・筒形器台破片および後期壺形土器頸部破片など54点の土器細片である。

##### S B02建物 (Fig.39)

調査区最南端に位置し、S C09と重複する。西側が調査区外となるが全体的に桁行に比べて梁行柱間が大きい点を考慮すると規模は不明であるが、それぞれ実長180cm・240cmをはかり東西棟の可能性が高い。掘方は径50~60cm・深さ40cmを残し、柱穴2より外面にタタキをもつ小形壺・頸部突帯に刻目を有する壺形土器破片が出土した。

##### S B03建物 (Fig.39)

東側をS D07溝で失なっている。東西柱間実長300cm、南北320cmをはかる1間×1間建物である。柱掘方は隅丸方形となり、径が60×70cmを最大として、深さ50cmを残す。柱穴1で脊形器台・中期後半の腹形土器破片など166点の破片が出土した。

##### S B04建物 (Fig.39)

調査区北側に位置し、1間×2間の東西棟建物である。桁行柱間実長は510cm、梁間実長430cmをはかる。柱掘方は径30~50cmの円形で深さ20cm程度のものが多い。東西棟建物であるがやや北に偏する。柱穴1埋土で弥生中期腹形土器が出土した。

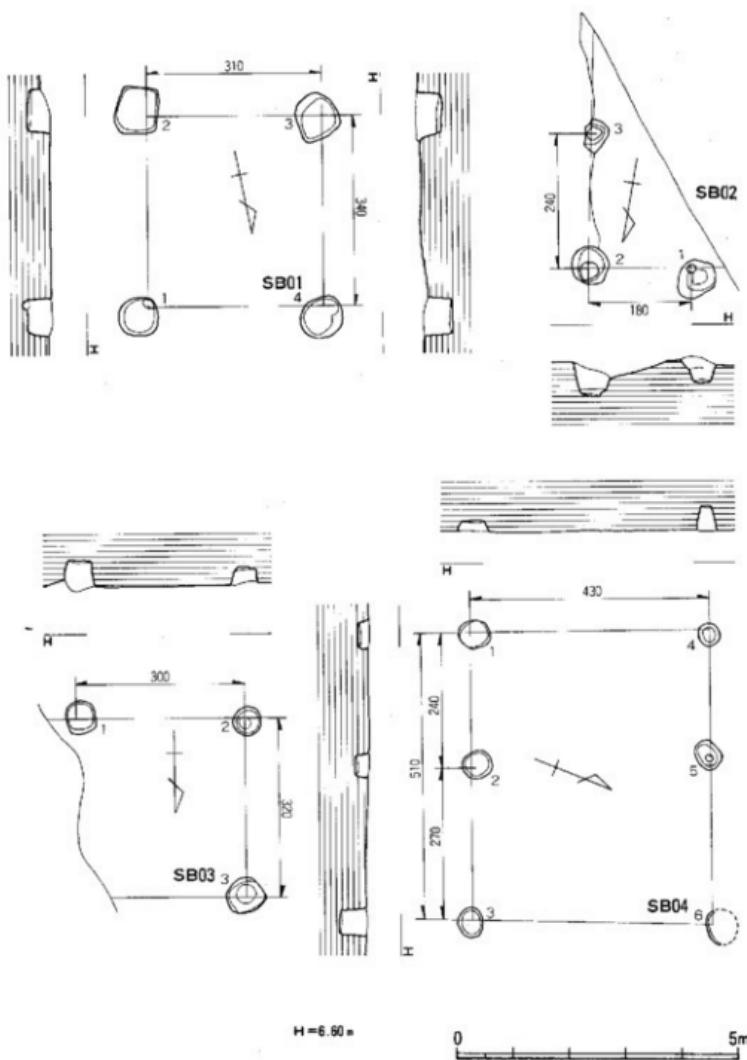


Fig.39 SB01・02・03・04櫛立柱遺物出土状況実測図 (1/100)

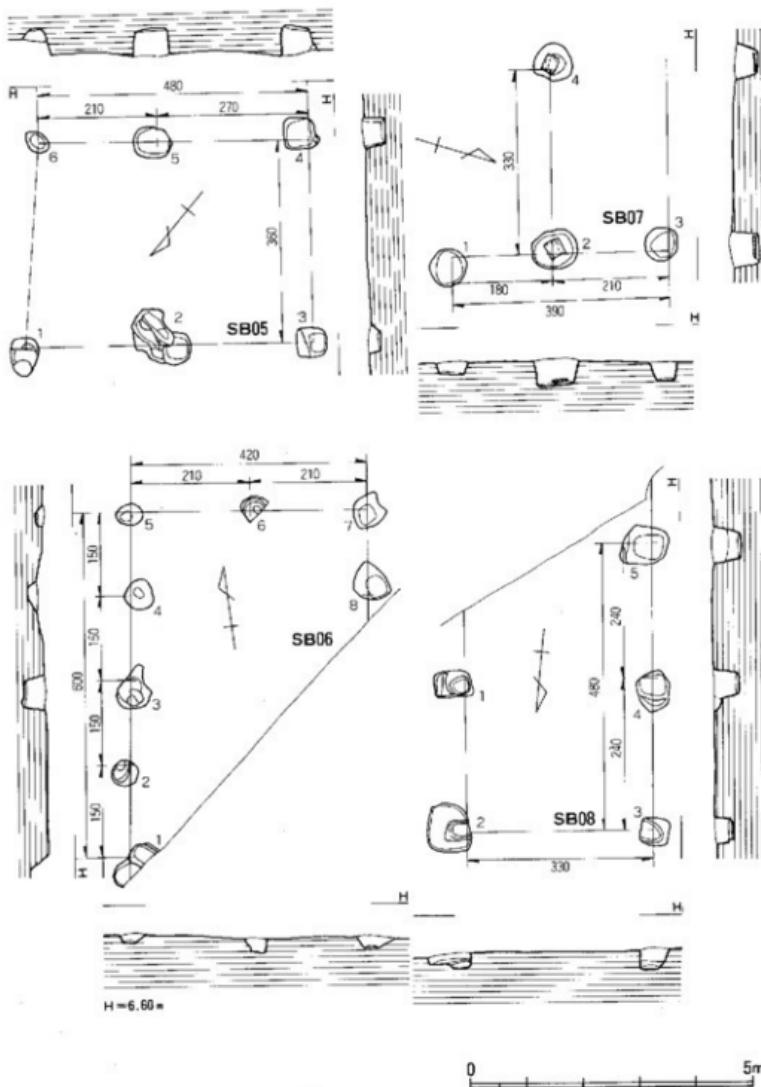


Fig.40 SB05・06・07・08据立柱建物出土状況実測図 (1/100)

#### S B05建物 (Fig. 40)

S B04西側に位置する1間×2間の東西棟建物である。桁行および梁行は不等間隔であり、桁行総実長480cm、梁行360cmをはかる。柱掘方は不揃いで円一隅丸方形をなし径50cm前後が多い。柱穴1・2・5埋土から弥生中期丹塗り彫形土器破片、跳上げ状口縁となる彫形土器破片など60点が出土した。

#### S B06建物 (Fig. 40)

S D05溝と重複する。南側は調査外となるが2間×4間の南北棟建物である。桁行総実長600cm・柱間150cm、梁行総実長420cm・柱間210cmの等間隔となる。柱掘方は円形で径が50cm前後が多い。柱穴1・2・5・6・7・8埋土で弥生中期中葉～後葉彫形土器破片・土師器破片が出土した。

#### S B07建物 (Fig. 40)

S D07溝に切られる。西側は不明な部分が多い。1間×2間の南北建物となるか。桁行総実長390cm、梁行長330cmをはかる。柱穴1～4ともに埋土より遺物が少量出土しており、柱穴2で後期彫形土器が混入する。また柱穴2・4に礎板が残る。

#### S B08建物 (Fig. 40)

S D07溝東側南端に位置する。南側で壁に這入るが2間×3間或は4間の規模となる南北棟建物である。梁行実長は330cmをはかる。柱穴1～3埋土より弥生中期後半～後期彫底部破片および石製有孔円盤が出土した。

#### S B09建物 (Fig. 41)

S B08建物の西側に隣接する1間×2間の南北棟建物である。桁行総実長は480cm、梁行実長380cmをはかり、側柱は不等間隔である。柱掘方は長・短が60×50cm程度の隅丸長方形を呈し、深さは10～20cmを残すのみである。柱穴1・2・3・4より遺物が出土した。柱穴1では弥生中期鉢形土器破片、柱穴2では胴部の膨らみが弱く、頸部から長く外方に伸びる口縁部をもつ彫形土器口縁部破片、柱穴3・4でも弥生中～後期の土器片8点が出土した。

#### S B10建物 (Fig. 41)

S B18の北側に隣接する位置にある1間×1間以上の東西棟建物で1間×2間程度の規模になる可能性が高い。梁行実長310cm、桁行柱間実長210cmをはかる。柱掘方は長・短が60×50cm程度の不整円形を呈し、深さは30～35cmを残している。柱掘方埋土からは柱穴1で弥生中期～後期に属すると思われる土器破片4点が出土した。

#### S B11建物 (Fig. 41)

S B12・13・14と重複する1間×1間の南北棟建物で主軸は西側にかなり偏する。南北柱間実長480cm、東西柱間実長400cmをはかる。柱掘方は長・短が60×40cmの長円形のものを最大としてかなり不揃いである。深さは10～20cmを残すのみである。柱穴1・2から若干の遺物が出

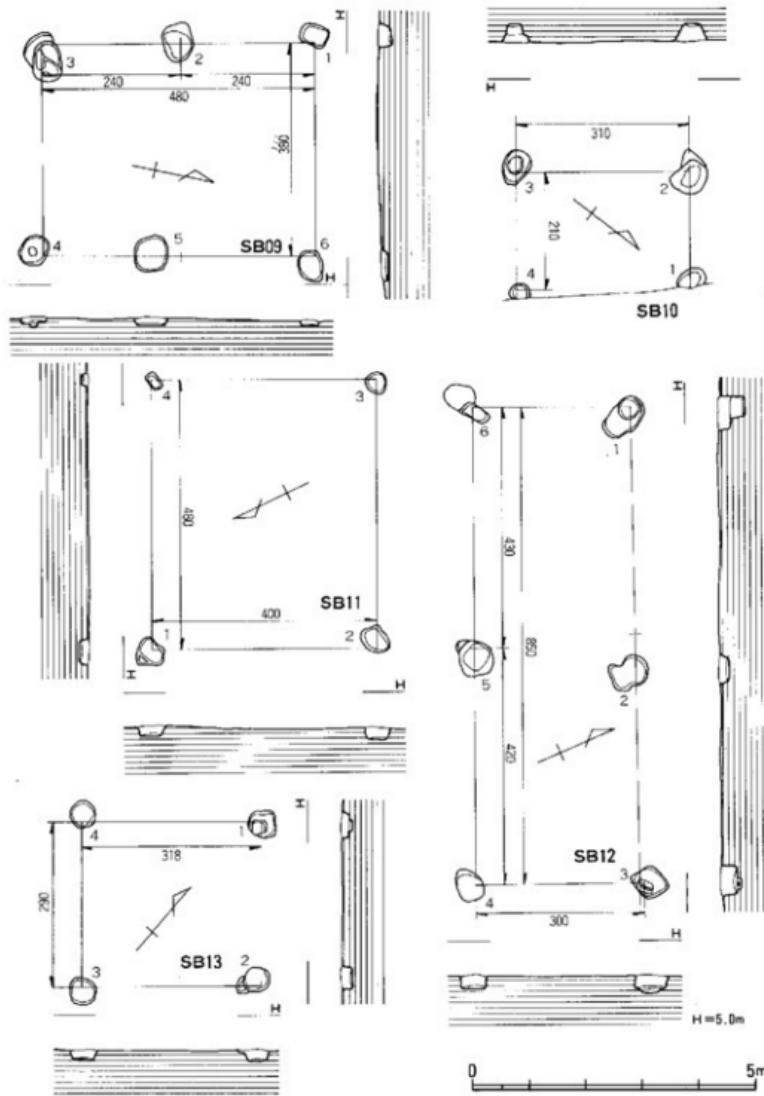


Fig.41 SB09・10・11・12・13振立柱建物出土状況実測図 (1/100)

土した。柱穴 1 では弥生後期と思われる土器破片 14 点、柱穴 2 では弥生中期中葉彫形土器破片、器台破片および時期不詳の土器片 22 点が出土した。

#### S B12建物 (Fig. 41)

S B11・13・14・15 と重複する 1 間 × 2 間の南北棟建物であり、主軸はかなり西に偏する。桁行総実長は 850cm、同柱間 430・420cm をそれぞれはかる。また梁行実長は 300cm となり、他の建物に比較して側柱柱間が長く、配置も不等間隔であって他のものと異った性格をもつ建物であるかも知れない。柱掘方は長・短が 60×40cm を最大として円・隅丸長方形を呈し、底部に礎板および礎板痕跡を残すものがある (柱穴 3、6)。柱穴埋土からは柱穴 1～5 で遺物が出土した。柱穴 1 では弥生中期彫形土器片など 4 点、柱穴 2 では中期後半彫形土器片など 8 点、柱穴 3 では弥生中期後半甕・筒形器台片それに内面ヘラ削りを施した彫形土器破片など 14 点、柱穴 4 では頭部に一条の三角突帯を付した弥生後期とおもわれる壺形土器片など 10 点、柱穴 5 では弥生中期後半甕・壺形土器片および内面ヘラ削りを施した薄手の土器片など 24 点が出土した。

#### S B13建物 (Fig. 41)

S B11・12・14・15・16 建物と重複する 1 間 × 1 間の小規模な建物である。南北・東西とも実長が 300cm をはかる。柱掘方は長・短が 50×40cm 程度の隅丸長方形を呈し、齊一性があり、深さ 20cm 程を残す。柱穴は 4 個とも遺物が出土した。柱穴 1・2・3 で弥生中～後期と思われる彫形土器片など 11 点、柱穴 4 では弥生後期上器片 3 点と内寄気味に外反する口縁を有する小型の丸底壺破片が出土した。

#### S B14建物 (Fig. 42)

S B12・13・16 と重複する 1 間 × 1 間の小規模な南北棟建物である。南北柱間実長 330cm、東西柱間実長 240cm をはかる。柱掘方は円形で径 30～40cm 程度である。柱穴 1～3 より弥生中期後半彫形土器破片および柱穴 3 では他に弥生後期とおもわれる甕破片が出土した。

#### S B15建物 (Fig. 42)

S B12・13 建物と重複する 1 間 × 1 間以上の東西棟であり主軸はかなり北に偏する。梁行実長は 480cm をはかり、桁行柱間実長は 300cm となる。柱掘方は径 50cm 程の円形をなし、深さ 10～30cm をはかる。柱穴は 1～3 ともに弥生中期～後期と考えられる上器細片を含む。

#### S B16建物 (Fig. 42)

S B14・16 と重複する 2 間 × 3 間程の規模となるものと思われる南北棟建物である。桁行総実長 580cm、同柱間実長 180・210・190cm をはかる。また梁行柱間実長は 210cm であり全体に柱間寸法にも齊一性があるといえる。柱掘方は長・短が 60×45cm の隅丸長方形のものを最大とし、全体的に角張ったものが多い。柱穴は 1～5 ともに弥生中期後半～後期と考えられる土器片が少量出土した。

#### S B17建物 (Fig. 42)

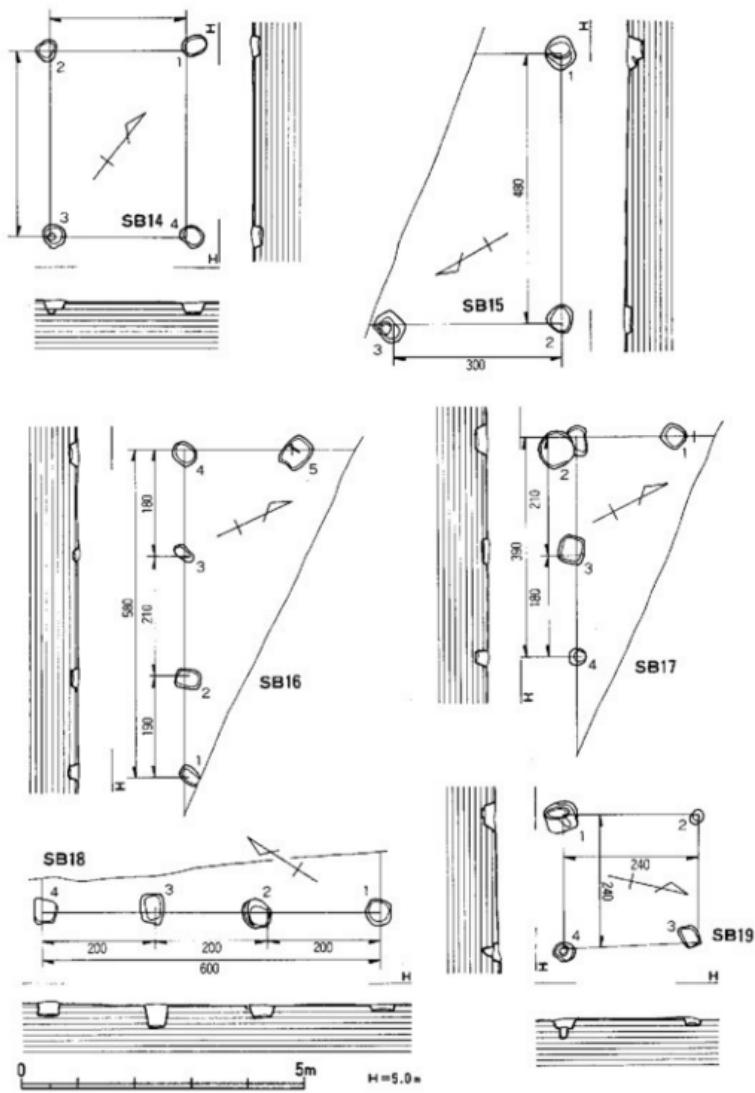


Fig.42 SB14・15・16・17・18・19 振立柱建物出土状況実測図 (1/100)

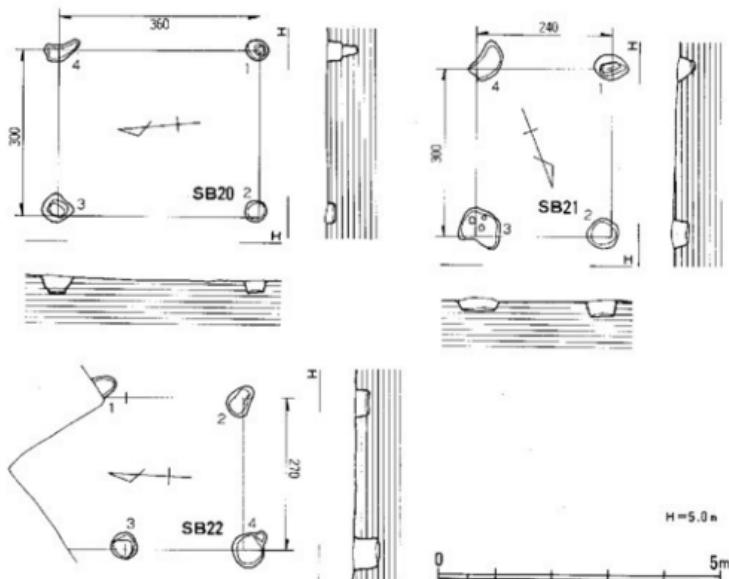


Fig.43 SB20・21・22掘立柱建物出土状況実測図 (1/100)

S B16・18と重複する梁1間以上、桁2間以上となる南北棟建物となろう。梁・桁柱間実長は170~180cm程度である。柱掘方は隅丸方形をなし、長・短が50×45cmのものを最大とし、深さは10~20cmを残している。柱穴では1~3について弥生中~後期に属すると考えられる甕・鉢形土器破片が少量出土した。

#### S B18建物 (Fig. 42)

S B16・17と重複する建物で桁行3間を検出できた。建物は主軸を北よりやや北に振る南北棟である。桁行純実長600cm・柱間実長200cmをはかる。柱掘方は長・短が50×40cm程度の隅丸長方形を呈し、深さ25~40cmを残す。柱穴1~4から弥生中期~後期と考えられる器台・脚付鉢形土器破片など少量が出土した。

#### S B19建物 (Fig. 42)

他建物と重複しない1間×1間の小規模建物である。東西・南北柱間実長は240cmをはかる。柱掘方は不整であり、大きさもまちまちであるが一応建物としてまとめた。柱穴1・3で弥生中~後期に属すると考えられる甕形土器破片など少量が出土した。

#### S B20建物 (Fig. 43)

建物番号	規模	方向	桁行		梁行		方位(磁北)	床面積
			実長	柱間尺	実長	柱間尺		
SB 01	1×1	EW	340 (11.3)	11.3	310 (10.3)	10.3	N- 11° -E	10.54m <sup>2</sup>
SB 02			—	6	—	8	N- 9° -W	2.16+ αm <sup>2</sup>
SB 03	1×1+α	EW	—	10	320 (10.6)	10.6	N- 90° -W	9.6+ αm <sup>2</sup>
SB 04	2×1	EW	510 (17)	9・8	430 (14.3)	14.3	N- 67° -E	21.93m <sup>2</sup>
SB 05	2×1	EW	—	9・7	360 (12)	12	N- 50° -W	17.3m <sup>2</sup>
SB 06	4×2	NS	600 (20)	5.5・5.5	420 (14)	7・7	N- 7.5° -E	16.2m <sup>2</sup>
SB 07	2×1	NS	390 (13)	7・6	330 (11)	11	N- 72.5° -E	12.9m <sup>2</sup>
SB 08	2×1	NS	510 (18)	9・8	330 (11)	11	N- 5° -W	16.8m <sup>2</sup>
SB 09	2×1	NS	480 (16)	8・8	380 (12.6)	12.6	N- 13.5° -E	18.24m <sup>2</sup>
SB 10	1+α×1	EW	—	7	310 (10.3)	10.3	N- 51.5° -E	6.51+ αm <sup>2</sup>
SB 11	1×1	NS	480 (16.0)	16	400 (13.3)	13.3	N- 65° -W	19.2m <sup>2</sup>
SB 12	2×1	EW	850 (28.3)	14・14.3	300 (10)	10	N- 67° -W	25.5m <sup>2</sup>
SB 13	1×1	NS	318 (10.6)	10	290 (9.6)	10	N- 50° -W	9m <sup>2</sup>
SB 14	1×1	NS	330 (11)	11	240 (8)	8	N- 35.5° -W	7.92m <sup>2</sup>
SB 15	1+α×1	EW	—	10	480 (16)	16	N- 29.5° -W	14.9+ αm <sup>2</sup>
SB 16	3×1+α	NS	580 (19.3)	6.3・7・6	—	7	N- 60° -W	9.6+ αm <sup>2</sup>
SB 17	2+α×1-α	NS	—	7・6	—	6	N- 62.5° -W	6.8+ αm <sup>2</sup>
SB 18	3×1+α	NS	600 (20)	6.6・6.6・6.6	—	—	N- 33.5° -W	7+ αm <sup>2</sup>
SB 19	1×1	NS	240 (8)	8	240 (8)	8	N- 75° -E	5.9m <sup>2</sup>
SB 20	1×1	NS	360 (12)	12	300 (10)	10	N- 5° -E	10.8m <sup>2</sup>
SB 21	1×1	NS	300 (10)	10	240 (8)	8	N- 21° -E	11.75+ αm <sup>2</sup>
SB 22	1+α×1	NS	—	7	270 (9)	9	N- 3° -W	7.1m <sup>2</sup>

Tab.2 摂立柱建物計測表

桁・梁の実長単位cm。( )内は1尺を30cmとして除した数値

S B 21建物に重複している1間×1間規模の南北棟建物である。桁行・梁行実長が360×300cmをはかる。柱掘方は径30~40cmをはかる円形のもので、深さ20~30cmを残す。柱穴1・3で弥生中期後半~後期にかけての甕形土器口縁・底部・甕形土器破片などが出土した。

#### S B 21建物 (Fig.43)

S B 20・22と重複する1間×1間の小規模な南北棟建物である。桁行・梁行実長は300×240cmをはかる。柱掘方は円~長円形で径50~60cm、深さ30cm程度を残す。柱穴1~4で弥生中期後半~後期にかけての器台・甕形土器破片が出土した。

#### S B 22建物 (Fig.43)

S B 21と重複する1間×2間以上の南北棟建物である。梁行実長270cm、桁行柱間実長210cmをはかる。柱掘方は円~長円形で径50cm程度のものを最大とし、20~50cmを残す。柱穴1~4から弥生中期後葉襲・蓋形上器片など多数が出上した。

またこの他にはS B 08建物の北妻に近い複合する小堅穴(P 509, 510)の覆土中に「水銀」の堆積が認められた。以上摂立柱建物について個別に記したが、S D 07・08溝をともなう水田化工作によってかなりの削平を受けたと考えた同溝東側部分では柱掘方が最低10cm程度の深さを有する点で削平は50cm内外と考えられ、旧地形ではS D 07以東においてかなりの地形変換があったものと考えられる。これら建物群の時期決定については出土遺物類と配置の規則性の検討にまちたい。

(5) 井戸址 (Fig. 44~62, PL. 31~37, Tab. 3)

井戸址は調査区内で50基 (S E01~50) 検出した。

これらの井戸址は S E01が調査区西端近くに単独で位置していたのを除けば、S D07溝の辺縁以東に分布するものがほとんどであった (Fig. 44)。この S D07溝以東は近世以降の水田化にともない削平されており、溝の西侧から 1.5 mほど段落ちした状態になっている。この段落ち

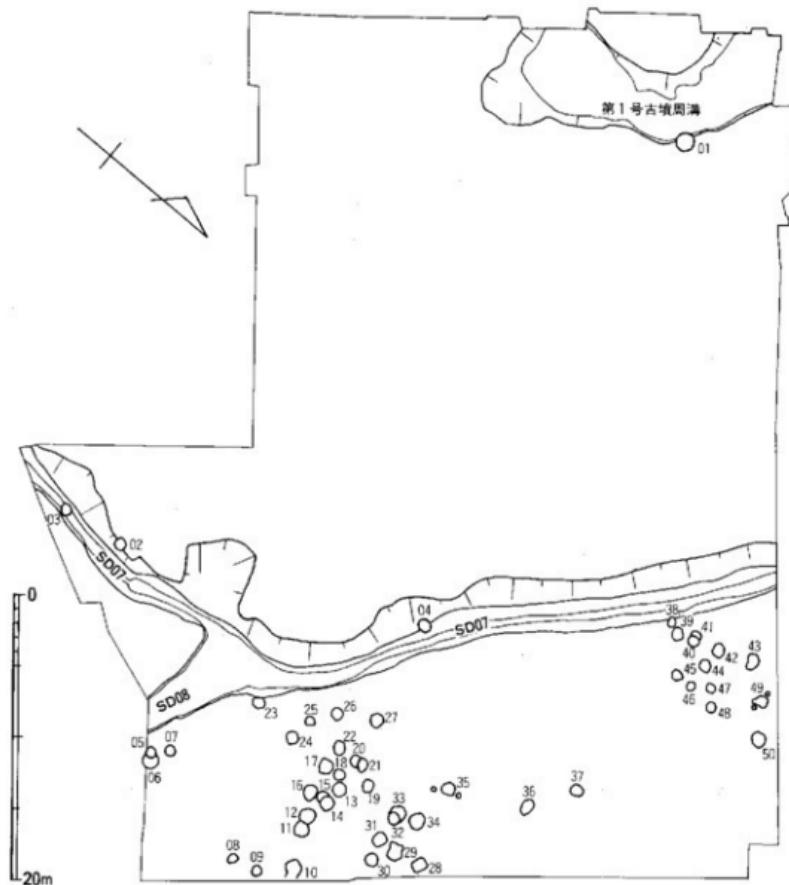


Fig.44 井戸址分布図 (1/400)

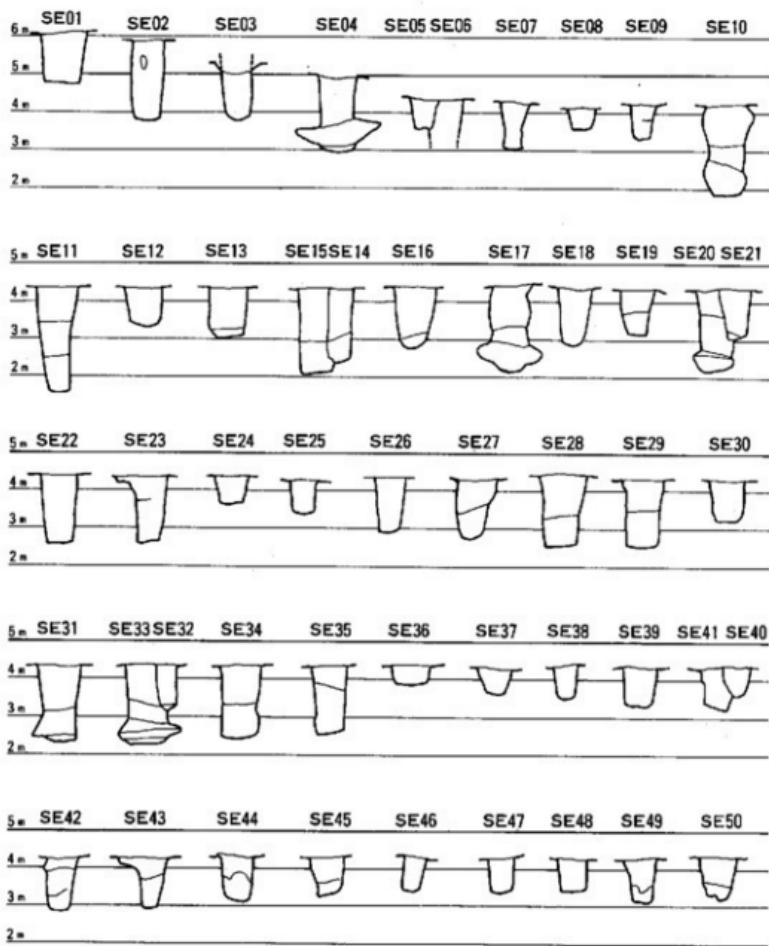
部分に S E02・03・04があり、S D07溝の東肩以東の削平平坦部に S E05~50の46基がある。この46基の井戸址も大まかには S E05・06・07、S E08~35、S E36・37、S E38~50の4群に分別でき、さらに S E08~35の群は分布の細分が可能である。また井戸址はこれで完結しているわけではなく、その分布は東南の調査区外に延びそうな気配である。

当然のことながら以上述べた井戸址の分布はあくまでも平面的なものにすぎず、井戸どうしの切り合い関係が6組（S E05・06、S E14・15、S E21・20、S E32・33、S E40・41、以上は前者が新しい。他に S E11と12が切り合うが先後関係不明）あり、また出土遺物からもかなりの時間幅をもつことが判明している。本報告では遺物を除外したため、明確な時期決定などの詳細については次報告に譲るが、現在のところでは S E04・17の弥生時代中期末頃に本遺跡の井戸の初源を、また S E46の古墳時代前期（布留式併行期）にその終焉を求めることができるようである。出土遺物が少なく時期決定が困難なものもあるが、残りはほとんど弥生時代後期におさまるものと考えられる。そのうち後期前半～中頃の井戸は S E08~35の群に、また後期後半のものは S E38~50の群に集中する傾向がみられる。

検出した井戸はすべて素掘りで（ただ S E17だけは井戸側に用いたと考えられる大型甕形土器が底面近くから出土）、遺構検出面からの深さは S E11の2.78mが最も深く、S E36の0.5mが最も浅い。穿井時期が古いものほど深く、新らしいものが浅い傾向がうかがわれる。しかしいずれの井戸址も削平を受けており、また分布位置によって検出面の標高が異なっている。Fig.45は井戸址の断面と標高の関係を表したもので、涌水点との関係をみていくと次のようになる。第1涌水点である鳥栖ロームと八女粘土の境は、場所により多少の相違はあるものの、標高3.5~3.9mの所に求められる。S E01以外の井戸底はすべてこの涌水点に達している。実際、発掘中においても湧水が認められたことから、浅い豊穴遺構も井戸として取り扱った次第である。第2涌水点は八女粘土が青灰色シルトに変る部分に認められ、その標高は2.5m前後で、湧水量も第1涌水点に比べてはるかに多い。ここまで穿井されたものは弥生時代中期末～後期前半の時期がほとんどで、第2涌水点付近から下が大きく抉れた状態を呈するものが多い。これは涌水点以下に水を汲みあげた際に側壁が剥落するもので、発掘中にもたびたびみられた。検出時にすでにこの状態を呈していることは、この種の井戸がその使用時に何度も底部の清掃を行なっていることをうかがわせる。S E17にみられる大型甕の井戸側はこの第2涌水点側壁の崩壊防止のため設けられたものであろう。

井戸内からは多数の土器とともに、石器・木器・獸骨・果核などが出土した。土器は完形で井戸底に置かれたものが多く、井戸祭祀に関係するものであろう。井戸の時期を問わず袋状口縁や複合口縁の甕形土器が多いことが特徴的である。これら遺物については前述したように次報告に譲り、本報告ではその概要を記すにとどめたい。

以下、各々の井戸址について詳述する。



0                          5m

Fig.45 井戸址断面図 (1/150)

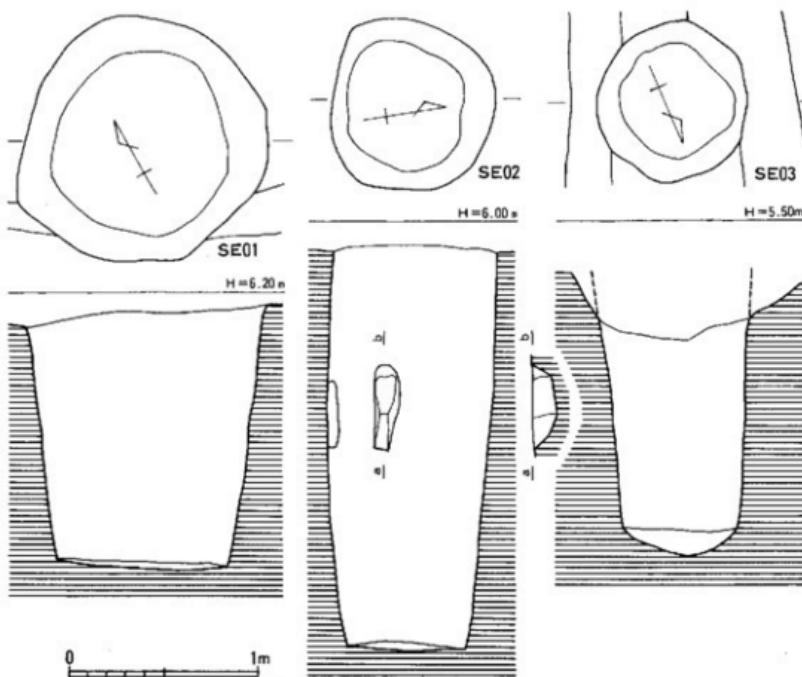


Fig.46 SE01・02・03井戸址実測図 (1/30)

**S E 01** (Fig. 46, PL.31) 調査区の西北で検出した。残りの井戸址が調査区の東側に集中するのに対し単独出土である。第1号古墳の周溝によって西南部を切られる。上面は径122～134cmのほぼ円形を呈し、底部にむかってすばまる。深さは140cmであるが、遺構底の標高は4.73mしかなく第1湧水点に達していない。覆土上層から弥生時代中期中頃までの土器片に混り、後期の複合口縁壺口縁が一片のみ出土した。底部付近からの出土遺物はなかった。位置および湧水の関係から井戸址としては問題を残す。

**S E 02** (Fig. 46) S D07溝南側西府の段落ち際に位置する。上面は径90cm弱のほぼ円形をなし、底面はすばまり不整円形を呈する。深さは213cmで、八女粘土に達している。底面より上約110cm付近の西側壁に1ヶ所、南側壁に3ヶ所の縫40cm、横15cm、奥行13cmほどの、足掛けに使用したと推察される凹みを設けている。覆土からは弥生時代後期土器片、木器、木片などの出土をみたが、量的には少ない。

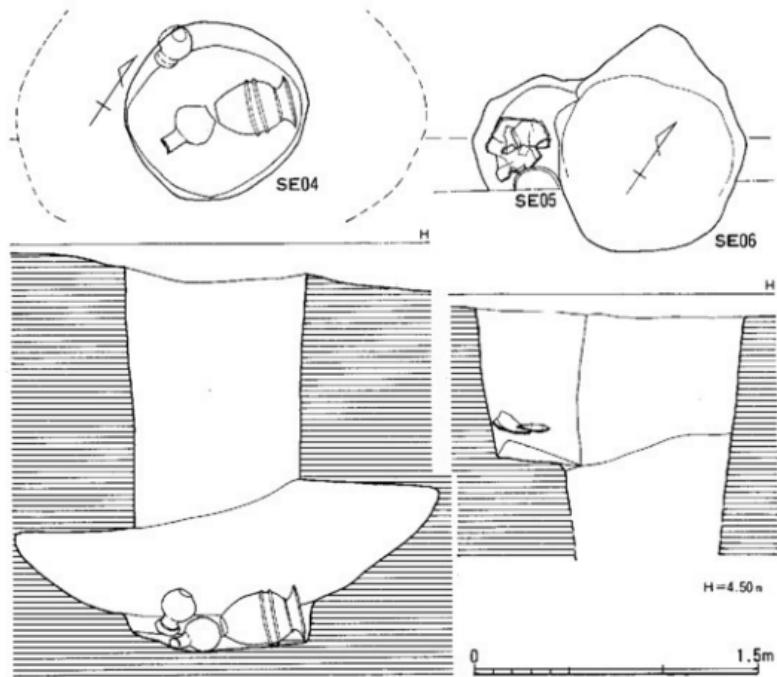


Fig.47 SE04・05・06井戸址実測図 (1/30)

S E03 (Fig. 46) S E02の西南に位置するが、すでにS D07溝によって切られていた。上面は径80~84cmのほぼ円形をなし、隅丸方形の底面にむかってすばまる。深さ113cmで、底面標高はS E02とはほぼ同じの3.72mである。出土遺物は弥生時代後期土器片少量のみである。

S E04 (Fig. 47, PL.31) S D07溝中央西肩で検出した。上面は径90~96cmのほぼ円形を呈し、深さ120cm前後まで垂直に掘削される。この地点が鳥栖ロームと八女粘土上の境にあたり、ここより側壁は奥に向い水平に60~70cm程度抉れる。底面はさらに約75cm下にあり、抉れた部分から底面にかけては八女粘土と黒色粘土が混ざった状態であった。底面に接して、弥生時代中期末の袋状口縁壺2、瓢形土器1のほぼ完成品の出土をみた他、同時期の甕・壺形土器片、石庖丁、木片などを検出した。袋状口縁壺のうち西壁側で倒立して出土した1個体は、口縁下凸部の直下に細縫状のものを巻き込んでおり、釣瓶として使用されたものではないかと推察される。本遺跡の井戸址としてはS E17とともに最も古い時期のものである。

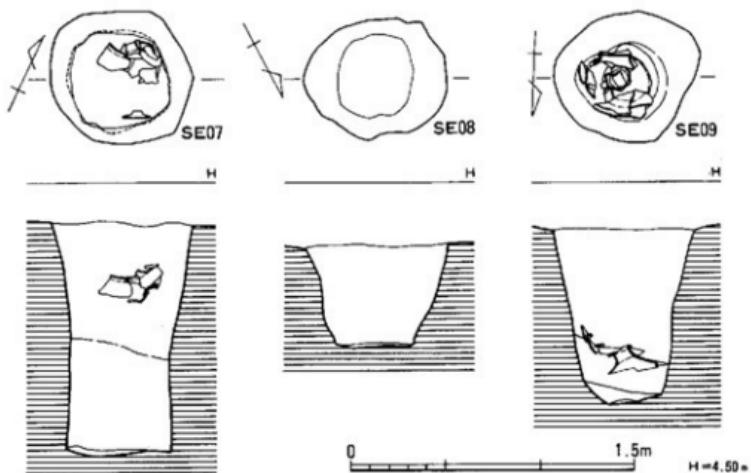


Fig.48 SE07・08・09井戸址実測図 (1/30)

S E 05 (Fig.47, PL.31) S D08溝の東側、発掘区南境で検出した。上面は径80cmの円形で、東側のS E06を切っている。深さ74cmと浅いが、第1湧水点には達している。底面よりわずかに浮いた状態で、弥生時代後期複合口縁壺1個体分が出土した。他の出土遺物はない。

S E 06 (Fig.47, PL.31) S E05の東側で切られる。南半分が調査区外にかかるものの、上面は径105cm前後のほぼ円形をなすと考えられる。上面から徐々にすばまり、深さ180cm前後で底面に至ったが、湧水と崩壊のため実測図作成は断念した。遺物は弥生時代後期の土器片を十数点覆土上部から検出した他、底面近くから木片を見出ただけである。

S E 07 (Fig.48, PL.31) S E05の北0.7mに位置する。上面は径70~75cmの円形をなす。深さ60cm前後の鳥栖ロームと八女粘土の境まではぼまり、そこから底部に向いわずかに拡がりをみせる。底面までの深さ123cm。上面から深さ20cmあたりから土器がまとまって出土はじめ、底面近くでは弥生時代末頃と考えられる壺1、直口壺2、注口土器1を完形に近い状態で検出した。土器以外の出土遺物はない。

S E 08 (Fig.48) 調査区の東南部近くで検出した。上面は61×76cmの楕円形をなし、深さ56cmで一辺40cm前後の隅丸方形の底面に達する。井戸址の中では浅い部類であるが、底面は八女粘土を切り込んでいる。出土遺物はいずれも弥生式土器の小破片である。

S E 09 (Fig.48, PL.32) S E08の北約1.2mに位置する。67×77cmの楕円形の上面から、深さ94cmで径36cmの円形の底面に達する。底面より15~20cmほど浮いた状態で、弥生時代末頃

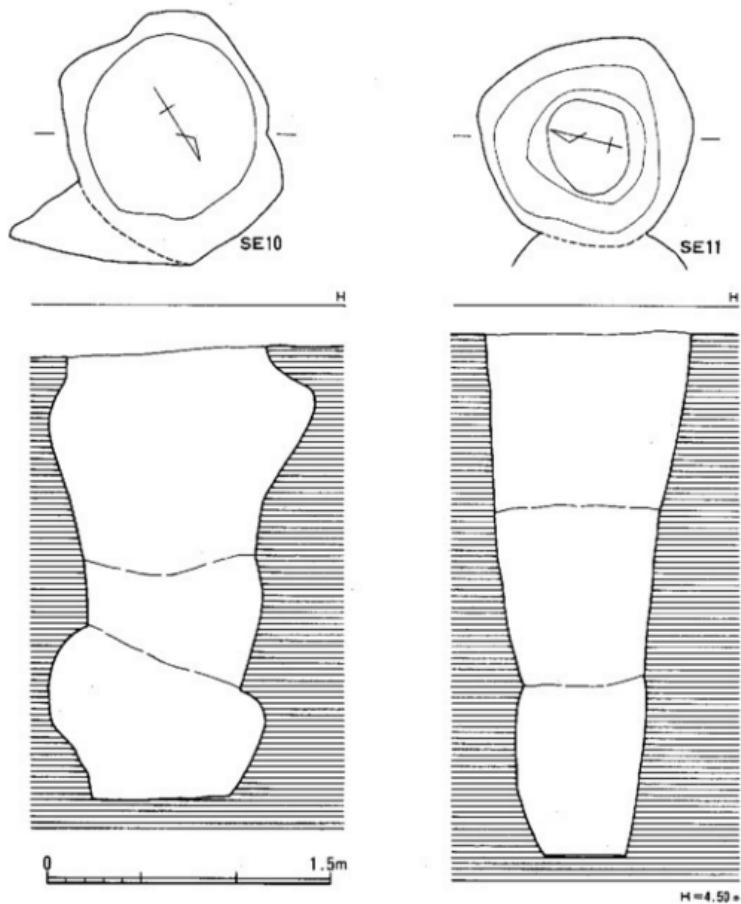


Fig.49 SE10・11井戸址実測図(1/30)

と考えられる複合口縁壺1と広口壺1を検出(とともに出土状態は破碎、接合完形)した他、覆上から弥生時代中・後期土器細片が多数出土した。

S E10 (Fig.49, PL.32) S E09の北約1.7mに位置する。東側を搅乱で一部破壊され、また西側の調査区段では別構造と切り合っている。上面は108×120cmの隅丸長方形に近く、深さ241cmで径90cm強の円形底面に達する。上面から深さ40cm前後で一度小さな抉れをみせ、深さ

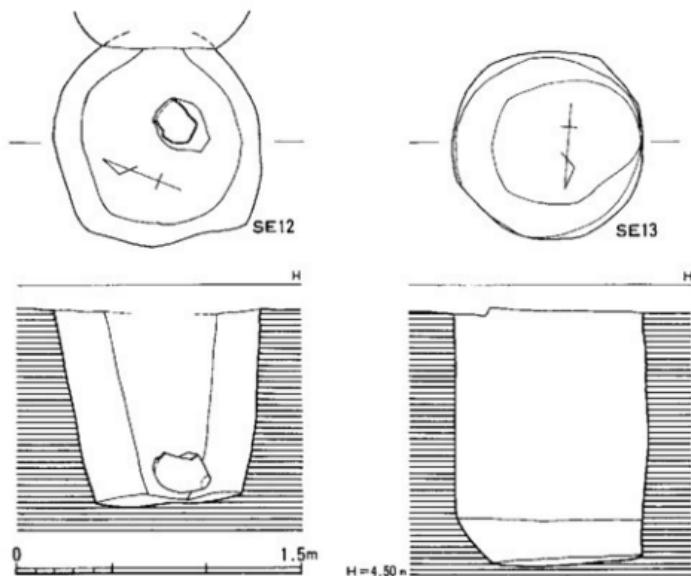


Fig.50 SE12・13井戸址実測図(1/30)

150cm前後の八女粘土と青灰色シルトの境でまた20cm前後の抉れがある。出土遺物は弥生時代後期前半頃までにおさまる土器片（完形出土は小型甕1のみ）および叉鍬・諸手鋤・つちのこ・柄材などの木器である。

S E11 (Fig.49, PL.32) S E10の西約1.7mに位置する。上面は径112cmのほぼ円形をなし、西側でS E12と切り合うが、遺構検出時の先後関係は確認できなかった。上面から次第にすばり、深さ278cmで底面に達する。途中、深さ185cm（標高2.50m前後）で八女粘土と青灰色シルトの境があるが、抉れた状態は認められなかった。覆土はほぼ同じもので、出土遺物も弥生時代中期～後期土器の破片が少なからずあるだけである。これらの状況は、本井戸址が比較的の短期間しか使用されず、またその埋戻しが一氣に行なわれたことを推察させる。

S E12 (Fig.50, PL.32) S E11の西にあり切り合い関係をもつが、前述したように検出時に先後関係を確認できなかった。上面は径110cm前後の円形を呈し、深さ100cmで径80～90cmの円形の底面に達する。底面よりわずかに浮き、横置の状態で弥生時代後期甕1個がほぼ完形のまま出土しただけで、他の遺物は全く認められなかった。

S E13 (Fig.50) S E12から西へS E14・15をはさみ約1.9mの所で検出した。上面は径約100cmの円形で、側壁はほぼ垂直である。深さ137cmで、底面は62×79cmの稍円形を呈する。

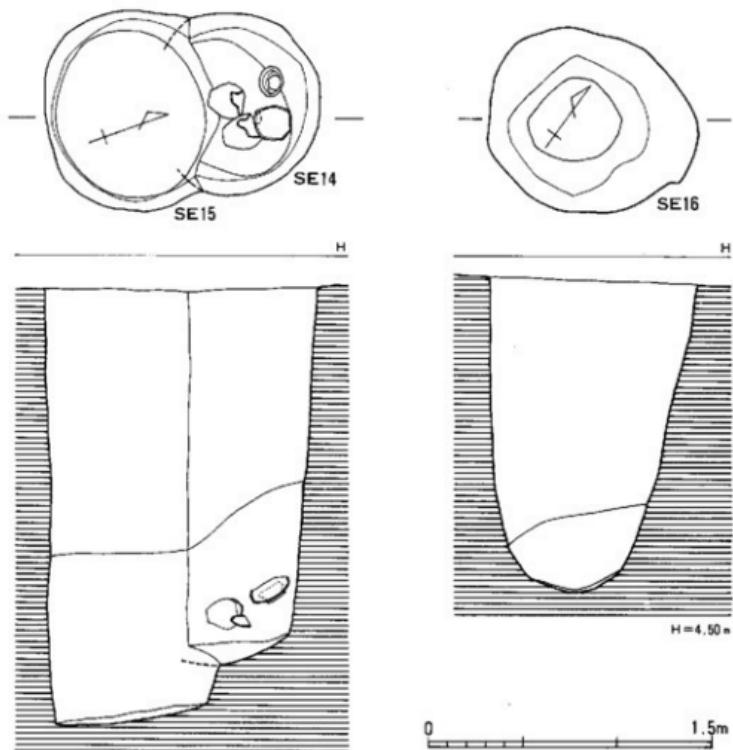


Fig.51 SE14・15・16井戸址実測図 (1/30)

覆土からの出土遺物は極めて少なく、弥生時代中・後期土器片、黒曜石片にすぎない。

S E14 (Fig. 69, PL.33) S E12の西0.7mに位置する。南側でS E15を切っている。上面は径96cmの円形をなし、深さ200cm。径70cm前後の平面不整圓形の底面は、八女粘土と青灰色シルトの境まで達している。底面よりわずかに浮いた状態で、弥生時代後期前半の縦・複合口縁壺・甕など5個体分ほどが横置で出土した。その他弥生時代中・後期の土器片を多量に覆土中より検出した。

S E15 (Fig. 51, PL.33) S E14の南側で切られる。上面は東西幅105cmを計る円形を呈する。側壁は底面まではほぼ垂直に掘削され、深さは231cm。底面はすでに青灰色シルトになって湧水が湛しかったが、側壁が抉れた状態は見られなかった。覆土からは弥生時代中期末頃の土

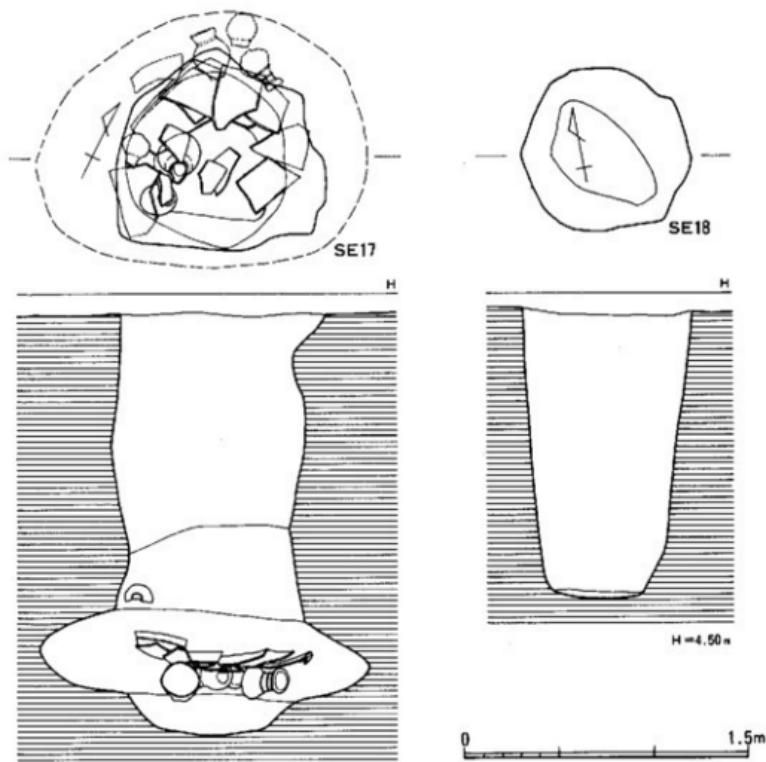


Fig.52 SE17・18井戸址実測図 (1/30)

器片が少量出土しただけである。あるいは使用期間が短く、埋戻しも一氣に行なわれたものであろうか。

S E 16 (Fig.51) S E 15の南に接するように位置する。上面は  $96 \times 113\text{ cm}$  の楕円形を呈し、底部に向ってすぼまる。深さは  $166\text{ cm}$  で、底面は径  $44\text{ cm}$  ほどの不整円形である。覆土からは弥生時代中・後期土器片80点余と木製杓子（全長  $33.5\text{ cm}$ ）および木片が出土した。

S E 17 (Fig.52, PL.33) S E 16の西  $1\text{ m}$  の所で検出した。上面は多少の出入りがあるものの径  $100\text{ cm}$  余のほぼ円形として捉えることができる。側壁は八女粘土と青灰色シルトの境である深さ約  $160\text{ cm}$  あたりまで、垂直あるいは小さなオーバー・ハンギングの状態を呈し、そしてそこ

から奥へ40cmほど抉れる。上面から径60cmの円形底面までの深さは224cmを計る。側壁が大きく抉れる深さあたりから多量の土器片が出土し始め、八女粘土の混った黒色泥土とともに取りあげてゆくと、一面に大型甕を數きつめた状態にあたった。甕はいずれも内面を上に向けており、側壁にそうように口縁部がめぐっていた。これを取り上げ接合すると、普通甕棺として用いられる大型甕の口縁部から胸部凸帯下までの一一片

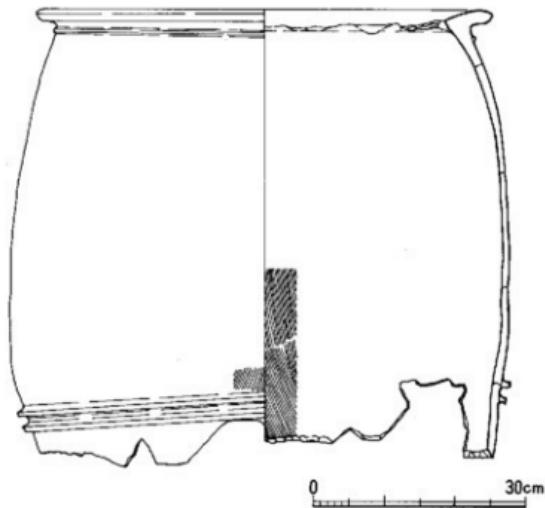


Fig.53 SE17井戸側大型甕実測図(1/8)

の欠けもないものとなった(Fig. 53)。大型甕は口径64cm、残高64cmで、胸部凸帯下は明らかに打ち欠きによるものであり、また口縁部内面のわずかな出っぱりも打ち欠いていた。出土位置・状態、および遺物のあり方からすれば、この大型甕は八女粘土と青灰色シルトの境付近に据置かれた井戸側(土器側)であった可能性が極めて強い。この甕の下から袋状口縁壺2(ほぼ正置)、さらに甕の外にあたる抉れ部分から袋状口縁壺1と壺2(いずれも横置)を検出した。後者の土器の出土状況は、大型甕が井戸側とすれば、それは穿井当初から置かれたものではないことをうかがわせる。遺物は他にこの甕の上部から出土した土器や木製鉢、木片などがある。土器はほとんどが弥生時代中期末までにおさまるものと考えられる。

S E 18 (Fig. 52) S E 17の0.2m北で検出した。上面は径90cmのほぼ円形を呈し、側壁は不整格円形の底面に向ってすばまる。深さ153cm。覆土はほとんど同一の土質で、その中から弥生時代中・後期土器片少量と木片が出土したにすぎない。

S E 19 (Fig. 53) S E 18の北1.2mに位置する。上面は東側がやや広がるもの、径88cmほどの円形をなす。底面は径50cm余の円形を呈し、深さは119cmを計る。断面中位の稜線が鳥柄ロームと八女粘土の境になる。覆土からは弥生時代中・後期の土器片だけが出土した。

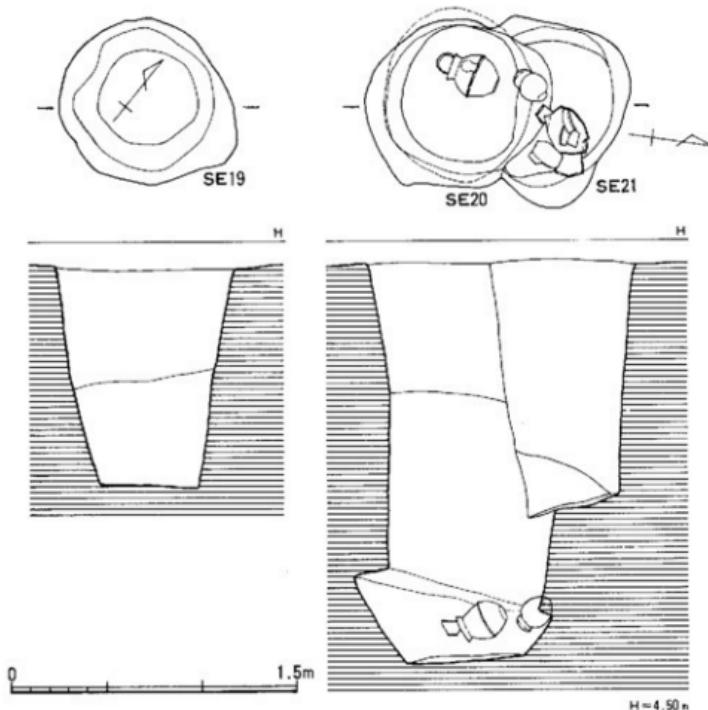


Fig.54 SE19・20・21井戸址実測図 (1/30)

SE20 (Fig.54, PL.33) SE18の西0.6mに位置する。北側をSE21によって切られる。上面は径90~100cmの円形をなし、深さ70cm付近(鳥栖ロームと八女粘土の境)までほぼみ、八女粘土と青灰色シルトの境である深さ160~80cmまではほぼ垂直になる。そこより奥に10~15cmほど抉れる。上面から60×70cmの楕円形底面までの深さは213cmを計る。底面より10数cm上で、横置または正置の状態で弥生時代後期前半の袋状口縁壺2、壺1、甕1、甕1を検出した。他に覆土から弥生時代中・後期の土器片が多量に出土した。

SE21 (Fig.54, PL.33) SE21の北側を切る。上面は80×97cmと東西に幅広い楕円形を呈し、深さ137cmで径70cmの底面に達する。深さ70cmの東側壁近くで、弥生時代後期甕1個体分を検出したのみで、他の出土遺物は全く認められなかった。

SE22 (Fig.55, PL.34) SE20の南0.7mに位置する。上面は85×100cmの東西に幅広

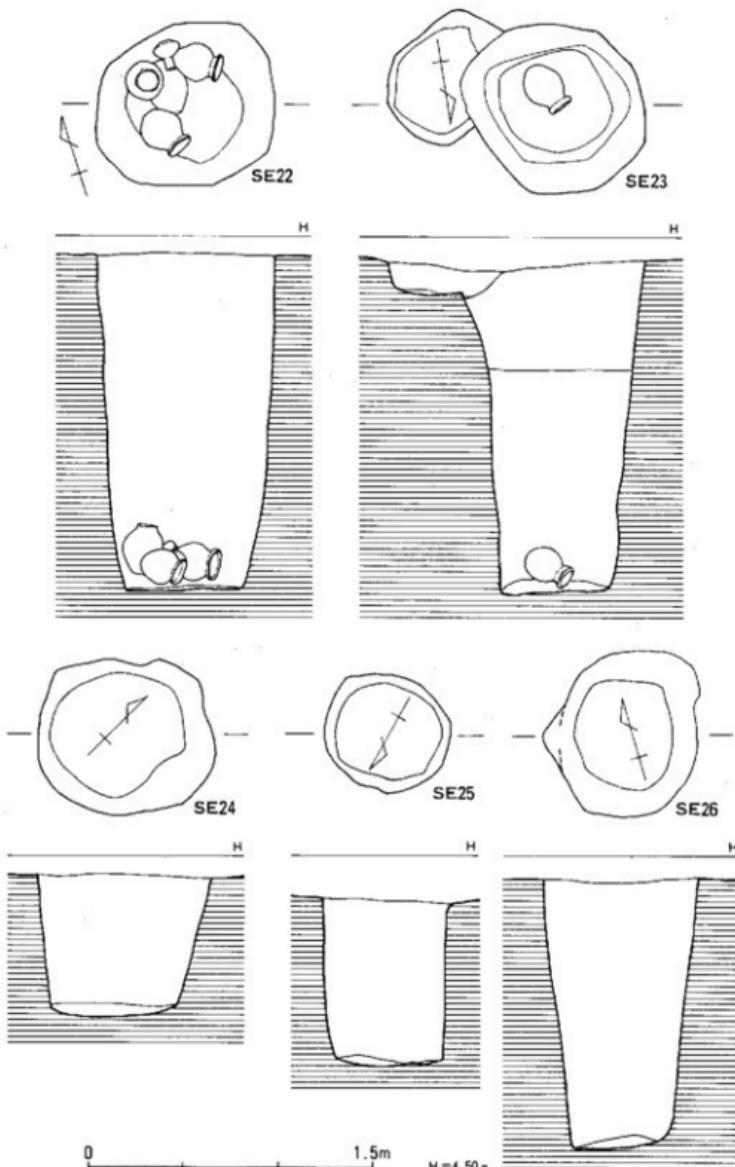


Fig.55 SE22・23・24・25・26井戸址実測図 (1/30)

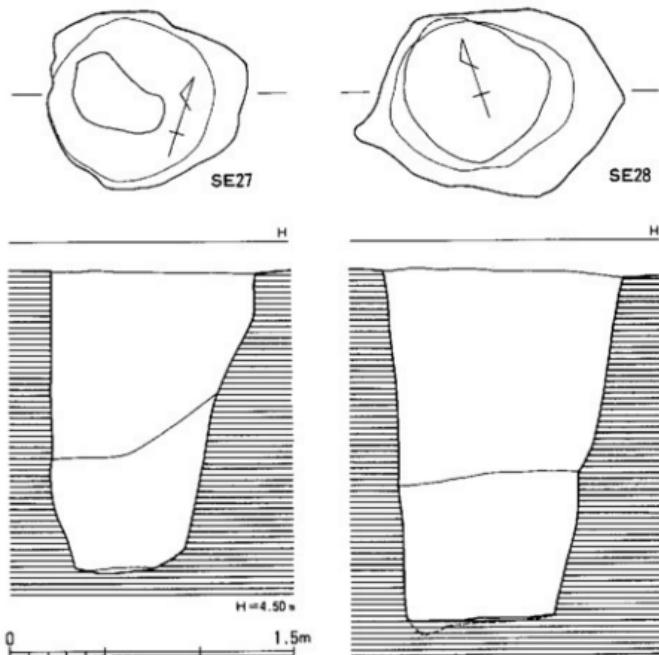


Fig.56 SE27・28井戸址実測図 (1/30)

い梢円形をなし、深さ179cmを計る。底面も東西に幅広い梢円形をなし、その西側半分に横置および正置の状態で、甕3、直頸壺1、短頸壺1がほぼ完形で出土した。このうち甕はいずれも同じ器形で、北部九州では出土例をみない。この他覆土上部から弥生式土器片が出土しており、上述の5個体もあわせ後期中頃までの時期におさまるものと考えられる。

S E23 (Fig. 55) S D07溝がS D08溝と分岐する東肩部分で検出した。東南部分を柱穴と切り合うが、先後関係は明瞭にしえなかった。上面は85×95cmの梢円形で、深さ178cmで1辺53cmの方形に近い底面に達する。底面から弥生時代後期前半の袋状口縁壺1が完形で出土し、また覆土中から同時期の土器片少量と木材・枝などが出土した。

S E24 (Fig. 55, PL.34) S E23の北約2.5mに位置する。上面は83~92cmの南北にやや幅広い梢円形をなす。深さ77cmで八女粘土を切り込んだ径65cmの不整円形の底面に達する。覆土は單一のもので、出土遺物は一切なかった。

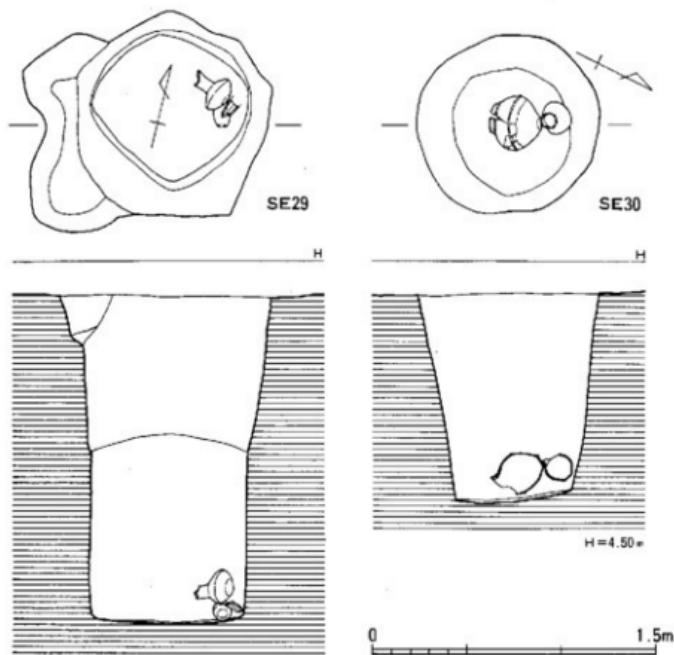


Fig.57 SE29・30井戸址実測図 (1/30)

S E 25 (Fig. 55) S E 24の西約0.8mに位置する。上面は60×66cmの東西にやや幅広い橢円形を呈し、やや丸みをもった長方形の底面に向ってすばまる。深さ90cm。覆土からは弥生時代中・後期の土器片が少なからず出土しただけである。

S E 26 (Fig. 55) S E 27の西北1.2mに位置する。上面は73×87cmの隅丸長方形に近く、52×57cmの長方形に近い底面に向ってすばまる。深さ144cm。覆土から出土した遺物は土器片のみで、およそ弥生時代後期前半の時期までにおさまるものである。

S E 27 (Fig. 56, PL.34) S E 26の北寄り約2mに位置する。上面は93×105cmの不整橢円形をなす。深さは160cmで、底面は31×50cmの不整形を呈する。覆土からは弥生時代中・後期の土器片と木杭・枝などが出土した。

S E 28 (Fig. 56, PL.34) S E 28~35は調査区西側中央部で検出したもので、S E 28はそのうち調査区境内に最も近い。上面は95×130cmと東西に幅広く橢円形に近い。深さ194cmで、不整円形の底面は青灰色シルトに達する。出土遺物は弥生時代中・後期の土器片と木片である。

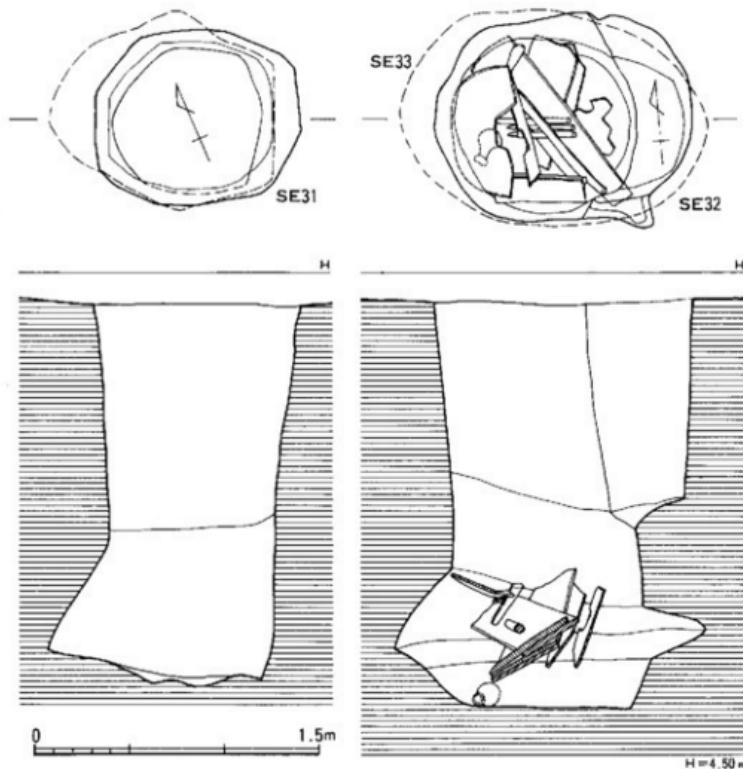


Fig.58 SE31・32・33井戸址実測図 (1/30)

S E 29 (Fig.57, PL.35) S E 28の南0.8mに位置する。上面は西側を柱穴に切られ、一部丸みをおびる所もあるが、ほぼ一辺100cm余の方形に近い。深さ175cmでやはり1辺70cm前後の方形底面に至る。その東北隅で小型袋状口縁壺と直口壺を1個体ずつ横置の状態で検出した。他に覆土から土器片多数と木片などが出土したが、土器は底面のも含め弥生時代後期におさまるものである。

S E 30 (Fig.57) S E 29の東南0.6mに位置する。上面は径95cm余の円形をなし、しだいにすばまり深さ113cmで径60cm余の円形底面に達する。この底面から、ほぼ横置の状態で複合口縁壺1、直口壺1が出土した他、覆土から多数の土器片に混り陶質土器胴部片1点を見出した。いずれも弥生時代後期に属するものと考えられる。

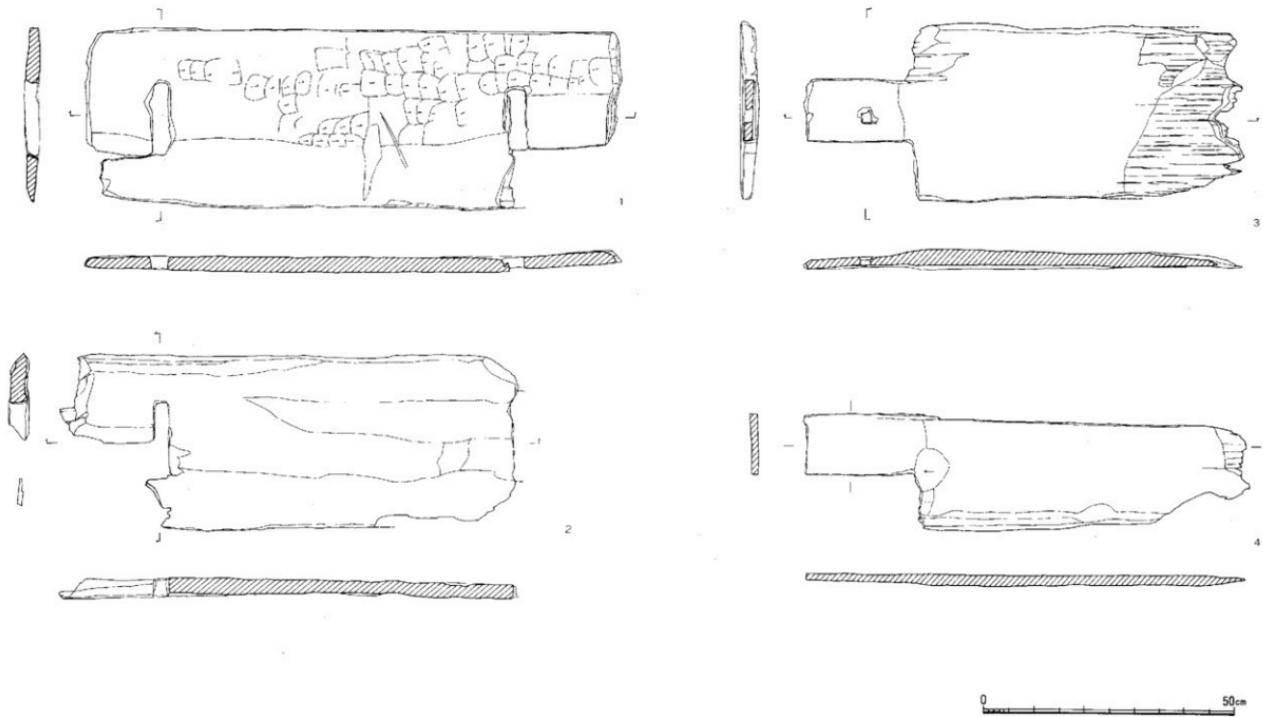


Fig.59 SE33出土井柵実測図 (1/8)

S E31 (Fig. 58) S E30の西0.5mに位置する。上面は93×108cmの東西に幅広いほぼ楕円形を呈する。上面から深さ120cmまですばり、そこから東北部分が奥に20~30cmほど抉れる。最も大きく抉れた深さ180cm付近が八女粘土と青灰色シルトの境にある。上面から径75cm余の円形底面までの深さは209cmを計る。覆土からは小型の壺形土器1個体の他、複合口縁壺を主体とした土器片が多数と磨製片刃石斧が1点出土した。その時期は弥生時代後期中頃までにおさまるものと考えられる。

S E32 (Fig. 58, PL.35) S E31の西0.9mに位置し、西側でS E33を切る。上面は径99cmの円形をなし、深さ123cmで径70cmの円形底面に達する。覆土からは弥生時代中・後期の土器片が少なからず出土したのみである。

S E33 (Fig. 58, PL.35) S E32に東側を切られる。上面は径106cm前後のほぼ円形で、深さ140cmまではほぼ垂直に掘削されている。そこより奥へ30cmほど抉れる。この抉れ部分が八女粘土と青灰色シルトの境にあたり、発掘時にも湧水が著しく、また覆土も黒色泥質土であった。上面から径83cmの円形の底面までの深さは215cmを計る。覆土上部から多数の土器片が出土したが、抉れ部分に達するあたりから、加工材か一面に認められた。これは本井戸内で構築されたものが壊れた状態ではなく、明らかに上から投棄された出土状況を呈していた。その内訳は半円形の直線部分に抉りを設けた板材2、枘穴を左右両端に穿った板材2、枘をもつ板材2の他、杭状丸木が數本である。このうち枘および枘穴をもつ板材(Fig. 59)は組み合って「井」状の形態をなすものと考えられる。最も残存状態の良好な枘穴をもつ1の板材は、全長106.4cm・幅36.2cm・厚さ3cm、枘穴は縦14cm・横幅3cmを計る。両枘穴間は内法で約68cm、外法で約74cmであり、同じ種類の2も同じ計測値をもつ。枘をもつ3・4は残存状態が悪く全体を確認できないが、幅・厚さは1・2とほとんど同じである。枘部は長さ20cm・幅12cm・厚さ1.5cmほどで、1・2の枘穴にすんなりとおさまる。また3の枘部中央には方形の穿孔がみられる。これを井戸側あるいは井桁のどちらかと考えるかについては問題が残るが、現在の所後者の可能性をあげておきたい。というのは一辺が106cm・幅36cmほどの井戸側を構築しうる底面規模をもつ井戸は検出したS E01~50の中にただの1基も認められないからである。またこれらの板材はいずれも下辺部の傷みが著しく、その部分が埋められていたのではないかと推察される。井桁としても本井戸に伴うものではない可能性が強い。前述したように本井戸の上面は径約106cmであり、井桁が単純に据え置かれ人畜の転落または泥水の流入防止の役割を果すものとすれば、全く用をなきないものであるからである。少なくとも1の両枘穴の関係から求めれば、この用をなすには上面径が74cm前後以下のものと考えねばなるまい。一応ここでは井桁として扱い、細い検討は次報告で行ないたい。井戸底面からは横置の状態で袋状口縁壺1個体が出土した。他に覆土から土器片多数と二又鋤、獸骨などが出土した。土器はすべて弥生時代後期前半の時期までにおさまるものである。

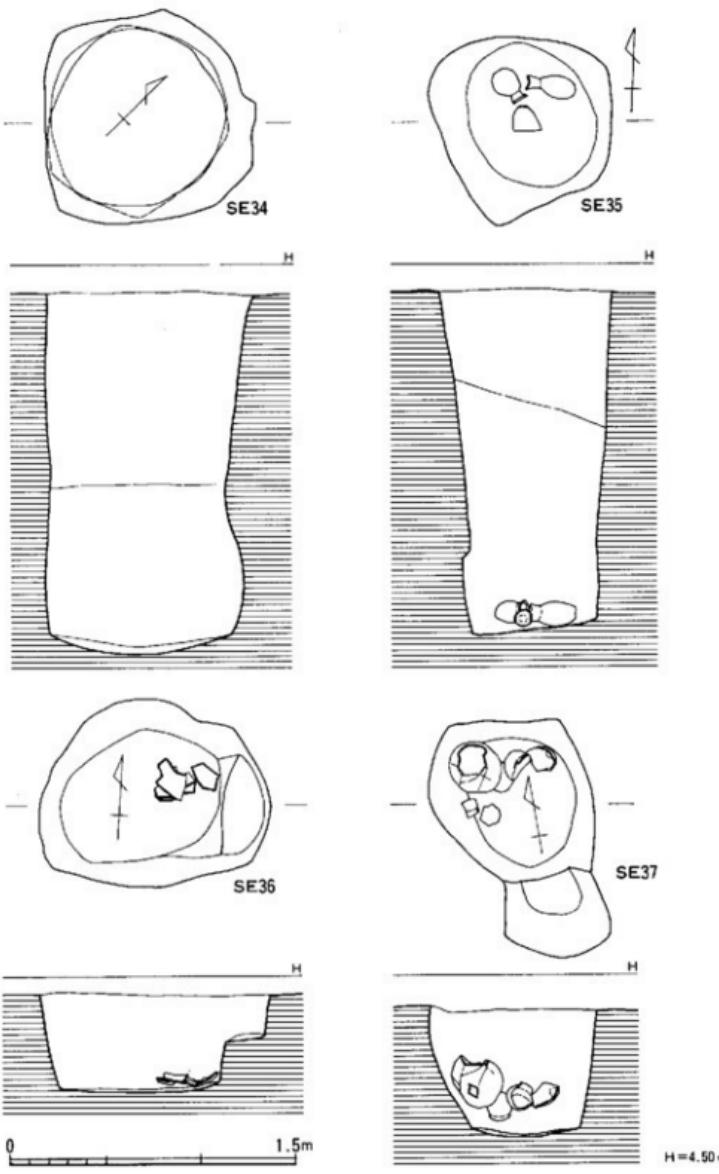


Fig.60 SE34・35・36・37井戸址実測図 (1/30)

S E 34 (Fig. 60) S E 33の北0.3mに位置する。上面は径110cmのほぼ円形を呈する。深さ約100cmまで垂直近くに掘削され、それ以下は南半側壁を中心にややオーバー・ハンギングの状態を呈する。上面から径95~100cmのほぼ円形の底面までの深さは193cmを計り、青灰色シルトに達している。覆土からは弥生時代中・後期の土器片が少量出土しただけである。

S E 35 (Fig. 60, PL.35) S E 34の西2.1mに位置する。上面は径95cmほどの不整円形で、しだいにすばまり深さ183cmで青灰色シルトに達した65×78cmの楕円形底面となる。深さ140cm付近で東側壁がややオーバー・ハンギングになっている。底面南半から袋状口縁壺2と甕1が横置の状態で出土した。他に把手付容器・又鉢・柄材・丸材・割材などの木器・木材と多量の土器片が覆土から出土した。土器は弥生時代後期前半の時期におさまるものであろう。この井戸址に付随して注意を引くのは、上面の南北に0.2~0.3m離れて径40cmほどのピットが各々あることである。このピットは調査区東側で検出した掘立柱建物群からはずれしており、この井戸に伴なった地上施設のためのものであった可能性が高い。S E 49にもこのピットが見られる。

S E 36 (Fig. 60, PL.36) S E 36・17は先述してきたS E 28~35の一群とその西17~24mに分布するS E 38~50の一群との間に位置する。ともに浅く、また掘立柱建物と重複する。このS E 36はS E 35のほぼ北4.8mに位置し、上面は東西に幅広い100×122cmの楕円形を呈する。深さ52cmで65×90cmの楕円形底面に達する。深さ25cmの東側壁にテラスを設けている。底面および覆土から弥生時代末頃の土器片が少量出土した。

S E 37 (Fig. 60, PL.36) S E 36の西北寄り2.7mに位置する。南側を柱穴によって切られる。上面は南北に幅広い80×90cmの楕円形に近く、しだいにすばまり深さ70cmで55×70cmの楕円形底面に至る。底面は八女粘土に達し湧水がみられた。底面北側には横置・正置・倒置の状態で小型および大型の壺3がやや浮いて出土した他、覆土より土器片多数を検出した。これらの土器は弥生時代末の時期と考えられる。

S E 38 (Fig. 61, PL.36) S E 38~50は調査区東北で一群をなす。本井戸はこのうち一番南に位置するもので、南側をS D 07溝に切られる。上面は径65cm余の円形を呈し、深さは92cmを計る。底面は不整形で、深さ40cmの東北部には小さなテラスがある。この種のテラスは先述したS E 37、後述するS E 39・50にも共通して認められるものである。土層は底面から10cmが灰色粗砂層であった他はすべて同一土層（黄白色ローム土と黒色粘土の混土層）であった。底面から約10cmほど浮いて複合口縁壺1と直口壺1を横置状態で検出した。他には土器片が少量出土したが、いずれも弥生時代末までにおさまるものと考えられる。

S E 39 (Fig. 61) S E 38の東北に接するように位置する。上面は90×110cmの南北に長い瓢形をなす。北側は別遺構の切り合いではないかとも考えたが、平面的にも断面的にもそれを確認できなかった。覆土は上面から40~50cmまでの黒色粘質土と黄褐色ロームの混り層、75cmまでの黒色粘質土、それ以下深さ100cmの底面までの灰色粘質土の三層に分別できた。底面は八

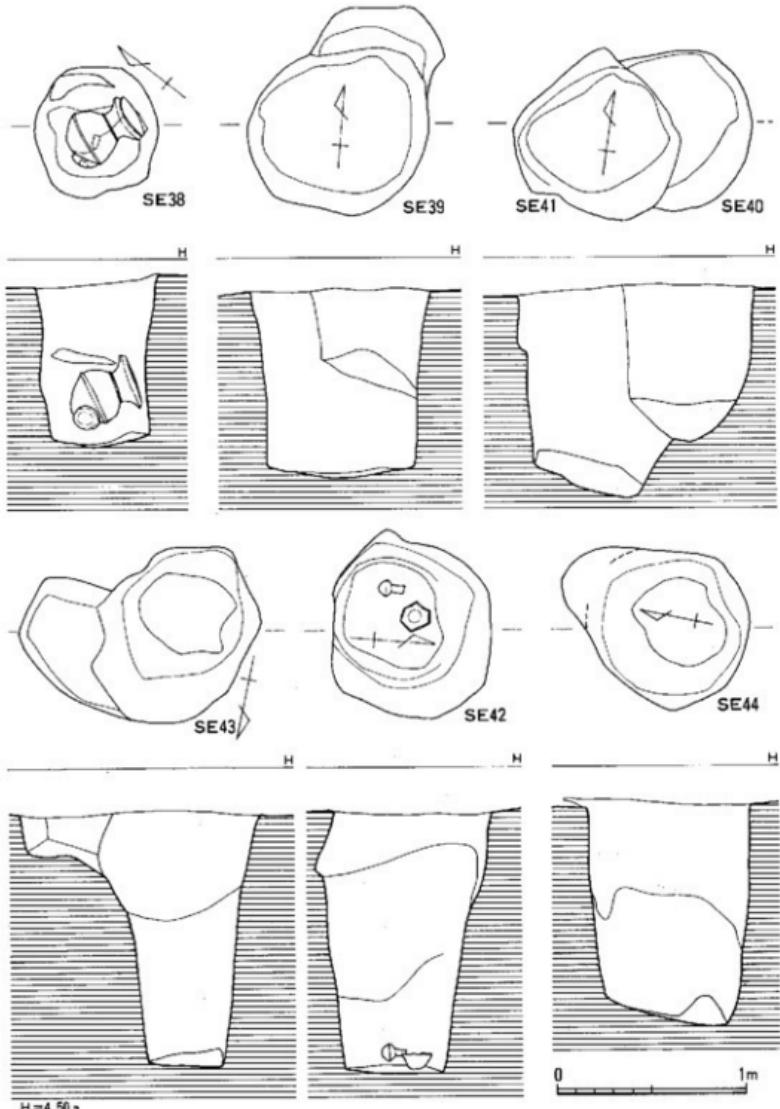


Fig.61 SE38・39・40・41・42・43・44井戸址実測図 (1/30)

女粘土を切り込んだ不整形をなす。深さ約40cmの東北側壁にテラスを設ける。覆土からは複合口縁壺2個体を中心とした土器片および木材片が出土し、土器は弥生時代末頃の所産と考えられる。

S E 40 (Fig. 62) S E 39の北0.3mに位置し、西側でS E 41を切る。上面は径84cmの円形をなし、深さは83cmを計る。径65cmの円形底面から10cm弱の厚さで灰色粗砂が堆積していた他は、黒色粘質土と黄褐色ロームが混った覆土であった。出土したのは弥生時代中・後期の土器片少量のみである。

S E 41 (Fig. 62) S E 40に東側を切られる。上面は75×83cmの不整形をなし、深さ112cmで51×67cmの近長方形の底面に達する。覆土は上下2層に分れ、上面から深さ80cm前後までが黒色粘質土と黄褐色ロームの混り、それ以下底面までが灰色粗砂である。出土遺物は弥生時代後期土器片少量のみである。

S E 42 (Fig. 61, PL.36) S E 38の北1mに位置する。上面は東西にやや幅広い隅丸方形をなし、その規模は84×94cmを計る。下面は不整形を呈し、上面からの深さは139cmを計る。底面からわずかに浮いて、長頸壺1と壺底部1が、横置および正置の状態で出土した。他に覆土から砾石1および土器片が多数出土した。出土土器はいずれも弥生時代後期後半頃に属するものと考えられる。

S E 43 (Fig. 61) S E 42の西北寄り1.6mに位置する。東北側で柱穴で切られるが、上面は南北に幅広い80×105cmの楕円形を呈する。深さ136cmで40×50cmの不整形の底面に達する。底面近くから複合口縁壺1、壺1が完形で出土した他、壺・壺の口縁部を欠損したものがまとまって出土した。また覆土から投弾1点と土器片が出土している。土器の時期は弥生時代後期中～後半頃のものであろう。

S E 44 (Fig. 61) S E 42の東約0.5mに位置する。上面は東北側がやや崩れて広がるが、全体的には径85cm前後の円形をなす。深さ121cmで、底面は38×48cmの楕円形に近い。深さ約85cmの東北側壁に、約35cm離れて丸杭が2本打ち込まれていた。覆土からは弥生時代中・後期の土器片が少量出土しただけである。

S E 45 (Fig. 62, PL.37) S E 44の東南寄り約1.3mに位置する。上面は南北に幅広い77×90cmの楕円形をなし、そこからしたいにすばまり、深さ106cmで径53cmの円形底面に達する。底面近くで複合口縁壺1、短頸壺1が完形で出土した。この組み合せは先述したS E 38および後述するS E 48・49とはほぼ同一で興味深い。他に覆土から土器片が出土したのみで、いずれも弥生時代後期後半頃と考えられる。

S E 46 (Fig. 62, PL.37) S E 45の北0.5mに位置する。上面は東西にやや幅広い57×62cmの楕円形をなし、ほぼ垂直に径40cm弱の円形底面に達する。深さ97cm。遺物は土器のみであるが、上・下2層の出土状態を示していた。上層は深さ20～30cmにおける土器群で、壺・壺・高

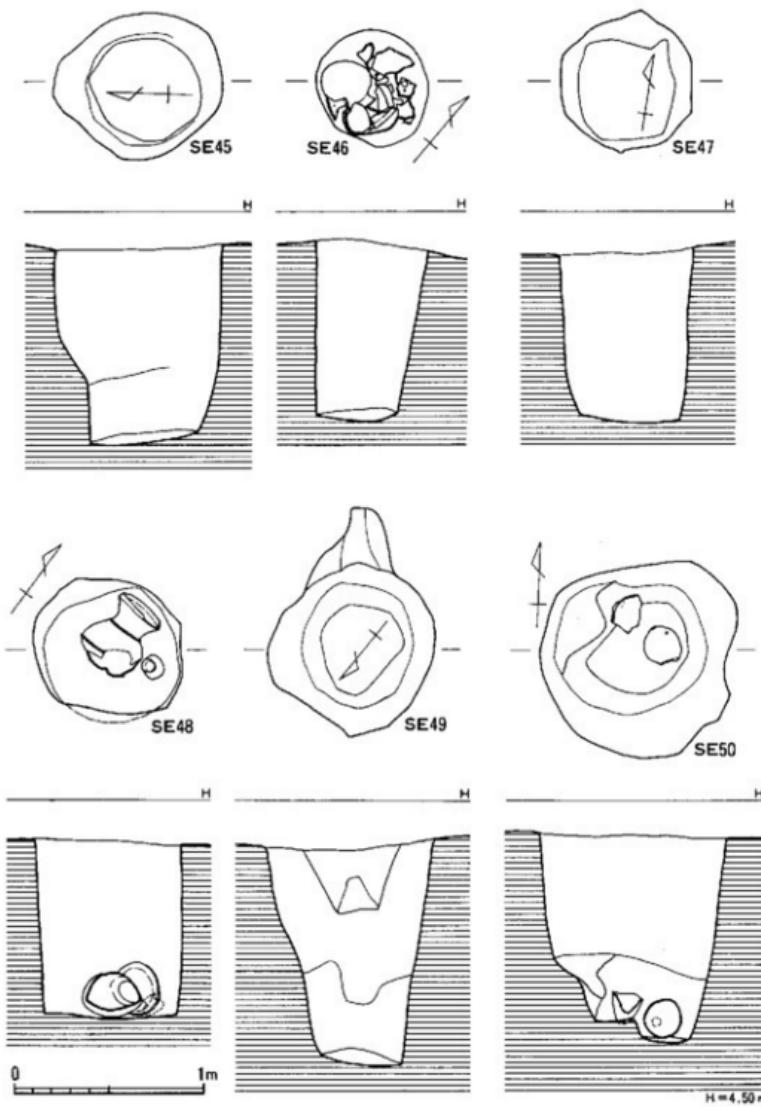


Fig.62 SE45・46・47・48・49・50井戸址実測図 (1/30)

壺などの破片がまとめて出土した。その下に無遺物の黒色粘質土が30cmほど堆積し、深さ65cmから底面部分にかけて布留式併行の甕1、広口壺1を検出した。上・下層の遺物とも時期的に大差ではなく、古墳時代前期のものと考えられ、本遺跡の井戸址の中では最も新しいものである。

S E47 (Fig. 62) S E46の西北寄り0.7mに位置する。上面は径70cmのはば円形をなし、深さ94cmで一辺約51cmの正方形に近い底面に達する。覆土からは短頸壺が1個体完形で出土した他、多数の土器片を検出した。その時期は弥生時代後期中頃までにおさまるであろう。

S E48 (Fig. 62, PL.37) S E48の東北0.6mに位置する。上面は東西に幅広い75×85cmの楕円形を呈し、側壁はほぼ垂直に掘削され、東南側はわずかにオーバー・ハンギングする。深さ95cmで、底面は径70cmの円形をなす。底面から複合口縁壺1、直口壺1が横置と正置の状態で出土した。覆土からは土器片・木片が出土しており、土器は底面のものもあわせ弥生時代末頃までにおさまるものであろう。

S E49 (Fig. 62) S E48の西北約2.5mに位置する。上面は径90cmのはば円形を呈するが、東南側に約30cmほど張り出した部分がある。これは深さ約30cmの所でテラスを作つて終るが、土層その他から他遺構とは考えられず、この井戸に伴う施設であると考えられる。また上面の東西には径30cm、深さ10cmほどのピットが、井戸をはさむように1個づつあり、S E35と同様に本井戸の地上施設であった可能性が強い。側壁は不整円形の底面に向つてすばまり、上面からの深さは120cmを計る。底面近くから複合口縁壺1と短頸壺1が出土した。他に覆土から土器片および木片が出土し、土器は底面出土のものもあわせ、弥生時代末頃におさまるものと考えられる。

S E50 (Fig. 62, PL.37) S E49の東北1.7mに位置する。上面は径100cmのはば円形を呈し、深さ112cmで底面に達する。深さ70cmの西北側壁にテラスを設ける。底面から穿孔をした壺胴部と底部片が出土した他、覆土から多数の土器片が出土しており、その時期は弥生時代末頃と考えられる。

以上S E01~50の各々の井戸址の位置・形状・出土遺物について述べてきた。そのうちS E05~50の位置する調査区東側は、当初調査予定に入つておらず、拡張して初めて遺構の所在がわかつたため急掘調査に切り換えた所にあたる。そして発掘調査期間の関係から、遺構の完掘を目指おいたため、井戸址も十分な観察が行なえず、不備な点が多々ある。それにもかかわらず、この50基の井戸址（問題が残るものもあるか）の調査成果は大きなものといえる。

これまで比恵遺跡群では、1次調査で2基、5次調査で1基の井戸址が検出されている。いずれも素掘りの井戸で、前者は環濠住居址内に設けられていた。今回の調査では総数50基で、そのほとんどが調査区の東側にあたる。検出面はかなりの削平を受けてはいるが、その遺存状態は極めて良好で、多量の遺物が出土したとともに、井戸の形態についてもかなりの知見を得

SE番号	上面規格 (cm)	下面規格 (cm)	深さ (cm)	井戸底 標高(m)	備考	SE番号	上面規格 (cm)	下面規格 (cm)	深さ (cm)	井戸底 標高(m)	備考
01	122×134	92×99	140	4.73	1. 砂質埴跡溝に埋 入する	26	73×87	52×57	144	2.95	
02	86×99	61×68	213	3.73	2. 鉄質に塗漆の痕 跡等に塗漆の痕 跡等に塗漆の痕	27	53×105	31×50	160	2.75	
03	80×84	54×50	113	3.72	S E07に切られる	28	95×130	74×76	194	2.51	
04	90×86	77×88	203	2.93	S E07に切られる	29	102×108	69×73	175	2.57	
05	(80)	(70)	74	3.69	S E06を切る	30	94×97	61×66	113	3.21	
06	105	崩壊	190+α	—	6. E05に切られる 7. 塗漆10mmの跡等	31	93×108	75×79	209	2.30	
07	70×75	50×52	123	3.06		32	99	70	123	3.13	S E33を切る
08	61×76	40×42	56	3.62		33	106	83	215	2.20	S E32に切られる
09	67×77	36	94	3.32		34	110	95×100	198	2.43	
10	108×120	91×93	241	1.87		35	95	65×78	183	2.54	
11	112	41×51	278	1.59	S E12と切り合う	36	100×122	65×90	52	3.88	
12	109×116	80×90	100	3.37	S E11と切り合う	37	80×90	55×70	70	3.54	
13	100×102	62×79	137	3.01		38	65×67	35×47	92	3.50	
14	96	70	200	2.34	S E15を切る	39	90×110	65×78	100	3.37	
15	95×105	80×88	231	2.02	S E14に切られる	40	84	65	83	3.52	S E41を切る
16	96×113	44	166	2.73		41	75×83	51×67	112	3.23	S E42に切られる
17	100×105	60	224	2.15	大型甕を井戸側と して使用	42	84×94	50×61	139	2.88	
18	68×90	38×67	153	2.89		43	80×105	50×50	136	2.92	
19	88	50×53	119	3.18		44	82×85	38×48	121	3.12	
20	59×(100)	60×70	213	2.26	S E21に切られる	45	77×90	53	106	3.27	
21	80×97	70	137	3.03	S E20を切る	46	57×62	38×40	97	3.39	
22	85×100	52×58	179	2.62		47	70	51	95	3.37	
23	85×95	53	178	2.60		48	75×85	70	95	3.35	
24	83×92	65	77	3.64		49	90	43×48	120	3.10	
25	60×66	47×55	90	3.38		50	100	43×53	112	3.22	

Tab.3 井戸址一覧表

た。ひとつはS E17にみられた大型甕による井戸側の可能性である。井戸底付近から大型甕がまとまって出土する例は板付遺跡でもあり、再検討を要する問題である。他の井戸は素掘りであるが、その側壁に凹みやテラスを設ける井戸がみられた。これは足掛けまたは足置きの役割を果したものと考えられ、井戸内の清掃等の際に用をなした可能性がある。上部構造としては、井桁と考えられる柄材が4枚セットでS E33から出土したことがまず挙げられる。井戸側である可能性もあるが、検出した井戸址でこれを設置できるものはなかった。井桁とすれば弥生時代のものとしては九州で初見である。またS E27・49のように上面の両側にピットを持つ井戸も注意すべきであろう。この例は佐賀県川寄吉原遺跡のS E001にもみられる。

多量に出土した遺物については整理がほとんど進んでいない。そのため今回の報告では井戸址の時期を大まかにしか述べられず、その時期ごとの分布・形態などについても追及できていない。また各々の井戸底出土の土器に基本的な組み合せが見られたが、これも判然としないままになっている。次報告で遺物を検討すると同時に、井戸址そのものについても再度考察を加えたい。

## (6) 土壙 (Fig.63~65, PL.38・39)

土壙は調査区のほぼ全域で15基 (S H01~15) 検出した。

これらの土壙は、S H01~03が比較的平面形態が同様で、位置も近接するのを除けば、残りは形態もまちまちで、また検出位置もかけ離れている。出土遺物もS H14が比較的まとまっている以外は少なく、各土壙の性格づけを困難なものとしている。遺物からみる限り弥生時代中期土壙を上限とし、古墳時代前期（布留式併行）を下限とした遺構であることがうかがわれる。

以下、各々の土壙について詳述する。

S H01 (Fig.63, PL.38) 調査区西南寄りのS D02の北端近くに位置する。長さ118cm、幅50cmの隅丸長方形をなし、東南側を別遺構に切られる。長軸方位はN-60°-Eである。深さは45cmであるが、底面は平坦さを欠く。覆土は上・下2層に分れ、深さ30cmまでが①暗褐色土、それ以下が②赤褐色土である。出土遺物は弥生式土器細片数点のみである。

S H02 (Fig.63) S H01の東寄り2.1mに位置する。長軸をN-60°-Eにとった長さ143cm、幅60cmの長方形の平面を呈する。西隅をピットに切られ、また北側壁は一部崩れている。底面は西側が深さ20cmで、やや段落ちした東側では37cmの深さを計る。覆土は①黒色土+赤褐色粘質土②くすんだ赤褐色土の上・下2層に分かれる。出土遺物は弥生式土器の細片が数点出土しただけで、明確な時期を示すものはない。

S H03 (Fig.63, PL.38) S H02の北2.5mに位置する。上面は長軸をN-66°-Eにとった長さ136cm、幅48cmの隅丸長方形を呈する。東北部分をピットによって切られている。削平によって遺構上面の高さも、東と西では15cmほど異なる。底面の東西には段がつき、中央部に向って深くなる。中央やや西寄りには径約25cmのピットがある。底面中央部での上面からの深さは25cmを計る。覆土からは弥生式土器の細片が数点出土したのみである。

S H04 (Fig.63) S H03の北2.2mに位置する。上面は東西130cm、南北110cmの方形をなすが、中央部分を現代埋設管溝に切られ遺構は不明瞭なものとなっている。長軸方向はN-67°-Eである。底面南側は北側に比べやや深い長方形をなす。上面からの深さは北側で25cm、南側で40cmである。底面西北隅には径22cm、深さ12cmのピットがある。出土遺物は弥生式土器細片だけである。

S H05 (Fig.63, PL.38) S H04の西2.1mに位置する。東北隅をS D04溝に切られやや不整形をなすが、本来的には長さ205cm、幅125cmの長方形の平面を呈していたものと考えられる。主軸方向はN-58°-Eである。底面は深さ約20cmで、中央部に向ってわずかに深くなり、中央北側はさらに10cmほど深い。南側壁にへばりつくようにして土器片が一括で出土した。いずれも弥生時代中期のもので、他に石鏃片・黒曜石フレイクなどが出土した。

S H06 (Fig.63, PL.38) 調査区の中央南側、S C01住居址に近接して位置する。上面

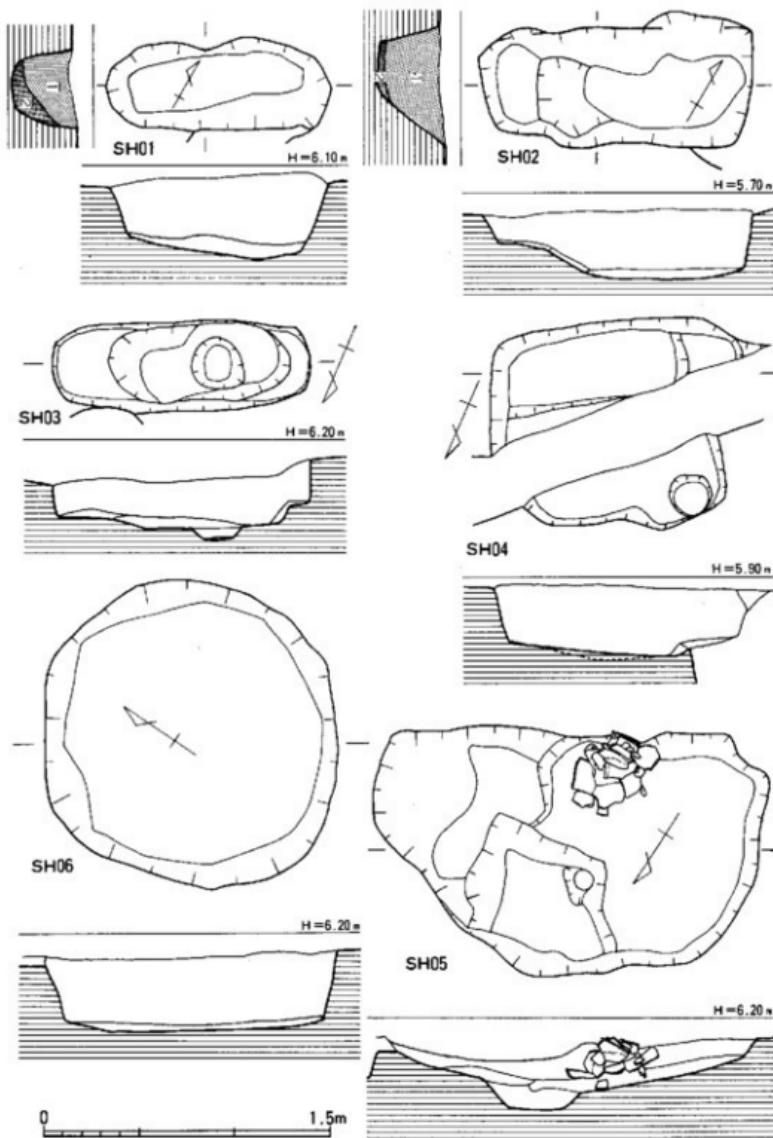


Fig.63 SH01・02・03・04・05・06土壤実測図 (1 / 30)

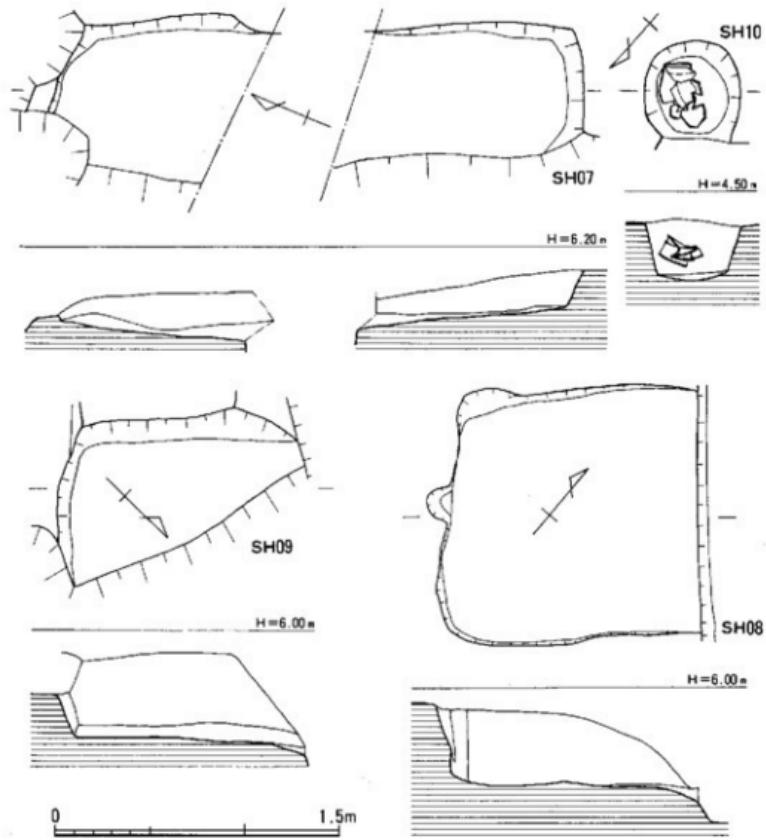


Fig.64 SH07・08・09・10土壌実測図(1/30)

は径約155cmの円形を呈し、西北隅を別造構に切られる。深さは40cm前後で、底面も円形をなし、径約135cmを計る。覆土は黒褐色土の単一層で、投弾1および弥生式土器片が少量出土した。土器は弥生時代中期中頃のものと考えられる。

S H07 (Fig. 64) 調査区の西北隅付近に位置し、西南側を第1号古墳周溝に切られ、またS C02住居址と北側で近接する。南北は古墳周溝に切られ不明であるが、東西長は292cmを計る。断面軸の方針はN-60°-Wである。深さは約20cmを計る。覆土からの出土遺物はない。底

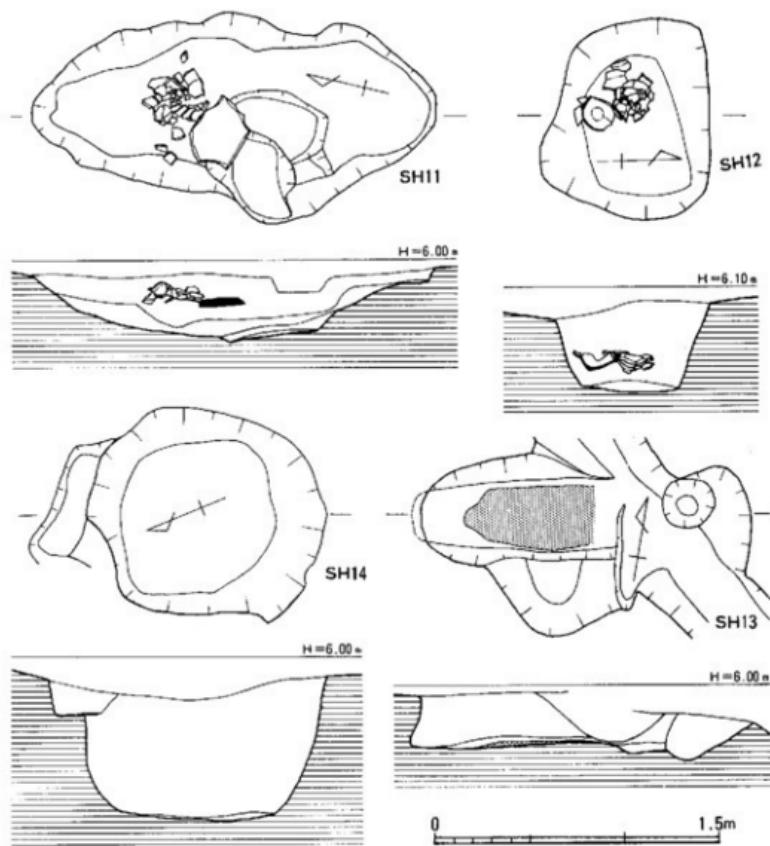


Fig.65 SH11・12・13・14土壤実測図 (1/30)

面東南隅のカーブからいえば長方形の遺構である可能性が強いが、断定はできない。

**SH08** (Fig.63, PL.39) 調査区の中央西寄り部分に位置する。西侧を搅乱坑によって切られ、南北幅および東西現存幅も133cmを計る。遺構の状態からすれば、東西に幅広い長方形を呈していたものと考えられる。断面軸はN-50°-Eの方位をとる。側壁は垂直に近く、底面までの深さは西側で43cmである。上面は東に向うにつれ削平が著しく、底面との差が小さくなる。覆土の上部から長方形の鉄製品1と弥生式土器細片が出土した。

S H09 (Fig. 63) 調査区の中央北寄りの位置で検出した。北側を現代埋設管溝に、また東側を S D07溝に伴う段落ちで破壊されており、残存するのは西辺115cm、南辺85cmのみである。本来的には長方形の平面を呈していたものと考えられる。断面軸の方位はN-44.5°-Wである。深さは西側で38cmを計り、底面はわずかに東側に向って低くなる。覆土からの出土遺物は弥生式土器の細片だけであった。

S H10 (Fig. 63) S D07溝以東で検出した唯一の土壙で、S E37の西1.2mに位置する。西北側を柱穴に切られるが、上面は径50cm余の円形をなす。上面からしだいにすぼまり、深さ32cmで36×42cmの楕円形底面に達する。底面標高は4.03mで、八女粘土には達しておらず、湧水もみられなかった。底面よりわずかに浮いた状態で、甕・壺などの破片がまとまって出土した。その一部は古墳時代前期まで下る可能性がある。この遺構は掘立柱建物群中にあり、あるいはその柱穴であるかもしれないが、他の柱穴でこれほどのまとまった土器を底面近くに持つものがないことから、一応土壙として分離した。

S H11 (Fig. 64, PL.39) 調査区の南側、S C09住居址の北1.5mの所に位置する。上面は長軸方向をN-13°-Wにとった長さ215cm、最大幅110cmの楕円形に近い。東側を一部現代搅乱坑によって破壊されている。側壁は比較的緩く傾斜し、東側での底面までの深さは12~23cm程度である。底面は中央部に向って低くなり、さらに西側では10~15cmの深さの不整形の凹みがみられる。この凹みの北に、底面から15cmほど浮いた状態で、砥石・石庖丁片および弥生時代後期前半の複合口縁壺1個体分の破片を検出した。砥石は幅30cm前後、厚さ約4cmの大型のもので、研ぎ面を上にして水平状態で出土した。あたかも上墳中央部に砥石（工作台を兼ねるもの）を置き、そこで石器の研磨などの作業を行なったかの状況を想像させる。他に覆土から弥生時代中・後期の土器片が少量出土した。

S H12 (Fig. 64, PL.39) 調査区の西南、S X08方形周溝遺構の北側周溝を切った状態で検出した。またS D01溝とも接するが、先後関係は明確にできなかった。上面は東南部がやや広がるもの、長軸方向をほぼ南北にとった長さ107cm、幅90cmの隅丸長方形を呈する。底面に向ってすぼまり、深さは50cmである。底面よりわずかに浮いた状態で、台付壺・甕などの破片がまとまって出土した。これらの土器は弥生時代末頃のものと考えられる。

S H13 (Fig. 13) 調査区中央部やや北寄りの位置で検出した。東にはS C04住居址が近接してある。上面は東側を現代埋設管溝によって大きく破壊されており、その規模を明確にしえないが、その溝の東肩にみられる線が生きるとすれば、長さ116cm、幅約40cmの隅丸長方形とすることができる。長軸方位はN-80°-Wで、南側にも別遺構による切り合いがみられる。深さ30cmで、底面幅は約40cmを計る。西側壁はややオーバー・ハンギングになる。底面中央部の長さ52cm、幅35cmの範囲に赤色顔料（未鑑定）が、最大3cmの厚さで敷きつめてあった。あるいは土壙墓の類であるのかもしれない。覆土からは弥生式土器の細片が数点出土したのみである。

S H14 (Fig.64, PL.39) 調査区の中央やや東寄りの位置で検出した。西2mにはS C 03住居址がある。遺構の上を現代埋設管溝が通っているため、上面はかなり破壊されていたが、およそ径120cmの円形のプランを見出すことができた。覆土は大きく三層に分けられた。上面から深さ約40cmが黒色粘質土と赤褐色粘質土が混った層で、その下に厚さ10~15cmの灰層がみられた。この中から支脚状土製品3と土師器甕（3個体分の破片）などがまとまって出土した。その下底面までは黒色粘質土が約10cm堆積していた。上面から不整方形の底面までの深さは、最も残りの良い所で75cmを計る。覆土から出土した遺物は先述したものの他に、投弾5、有溝土鍤1・石劍切先1・鉢壺1・杓子状土製品1などとともに黒曜石フレイク、土器片などがある。このうち土器は灰層出土のものも含め古墳時代前期の布留式併行期か、それをやや遡るものと考えられる。当初この遺構は、その形態等から井戸址と考えていたが、発掘過程で灰層が支脚状土製品とともに出土したことから、その考えは捨てなければならなくなつた。実際、発掘後においても底面は鳥栖ロームであり、湧水もみられなかつた。灰層および3個体の支脚状土製品と甕の組み合わせは、この土壤が煮炊きの場に用いられたものではないかと推測させる。また鉢壺・有溝土鍤の出土は、この時期の漁業を考える上で重要な資料であろう。

S H15 (Fig.68) 第1号古墳周溝の東南に位置するものである。覆土が周溝とほぼ同じであったためその検出は困難を極めたが、西北部を周溝に切られていることが判明した。また本遺構はS K 5・41號棺墓を切って設けられている。現存長約520cm、幅約220cmと規模が大きく、本来的には西北に長軸をとった長方形をなしたものと考えられる。側壁の傾斜は緩やかで、底面までの深さは最も残りの良い所で約80cmを計る。覆土からは弥生時代中・後期の土器が少なからず出土した。

以上S H01~15土壤の各々の検出状態・形態・出土遺物をみてきた。一応土壤として括したもの、その用途・性格はそれぞれによって大きく異なるものである。S H01・03・13は土壤墓としてとらえていいのかもしれないが、積極的な資料に欠ける。S H10は柱穴の可能性がないともいえない。S H15の大型の土壤に至っては、その用途を知るすべがない。そんな中にあってS H14は煮炊きの場所として利用された遺構であった可能性が強い。またS H11も工作場的な意味をもった遺構ではなかったかと推察される。類例を求めてみたいと考えている。

現在の所、土壤の遺物もほとんど整理が進んでおらず、土壤の時期決定も大まかなものとなつた。今後の整理の進捗状況によってはさらに細い時期区分ができるとともに、また反面時期の修正を行なわねばならないものでてくることが考えられる。次報告の遺物篇で再度、遺構の用途および時期について考えてみたい。

## (7) 溝状遺構 (Fig.66、付図1)

溝状遺構としたものは8条 (SD01~08) が検出された。これらは一部を除いて他の遺構との関連および性格を十分に明らかにし得るものは少ない。以下個別溝について説明を加えることとする。

**SD01溝** 本溝は長さ5.5m、幅60cmを測り東西方向に伸びる溝で両端部が立あがる。横断面は底面が平坦な逆台形状をなす。SX08周溝遺構を切る。覆土中より弥生中期中業~後期に亘る甕・壺形土器破片多数とともに丁字頭の土製勾玉が出土した。

**SD02溝** 本溝はSD01の北側に位置し、長さ4.6m以上、幅80~60cm、深さ50cmを測る両端部が立あがる溝である。埋土中には多量の土器破片が堆積していた。弥生中期大形甕、口縁部が強く内傾する後期甕および胴部が半球状をなし、直立する頸部にゆるく外反する口縁を有し、中位が段をなす古式土師器壺形土器などが出土した。

**SD03溝** 本溝はSC01住居址北辺に平行して走る溝で長さ6.5m幅70cm、深さ60cm前後を測る。横断面は「コ」字形をなし、溝両端部が立あがる。覆土上層で弥生中期後半の甕・壺形土器破片、中・下層で外面にタタキを施した直口甕、下唇部に斜めの刻目を付した筒形器台、袋状口縁長頸壺形土器破片が出土した。

**SD04溝** 本溝はSH05・SC03・SX04を切る小溝である。ほぼ東西方向に34m走り、西側で立あがる。また東側ではSD07溝に切られて延長を失なう。溝幅は西部で60cm、東部で1m前後をはかり、溝底は西より東へ20cm程の比高で傾斜する。覆土中から土師器瓶把手、須恵器横瓶・甕形土器が多量に出土し、時期的には古墳時代後期に位置づけられよう。

**SD05溝** SB06建物と重複する溝でコーナーを有し西側で立あがる。幅60cm、深さ10cmをはかり、SX08周溝遺構と同様の性格を持つものかも知れない。覆土中より弥生中期以降の土器破片が少量出土した。

**SD06溝** 本溝はSD07溝に位置し、北西から南東に走る小溝で、長さ11.5mを確認でき、幅50~70cmをはかる。深さは10cmに満たない。覆土中より蛇目高台をもつ越州窯産青磁碗などが出土し、少くとも古代末期の時期に比定されよう。

**SD07・08溝** 調査区北西から南東に走り、南端部で東・西に分かれ2条となる溝で、近世以降の水利溝である。溝幅は1.5~3mをはかる。

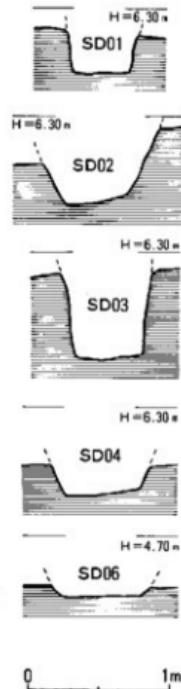


Fig.66 SD01~04・06  
溝断面実測図 (1/40)

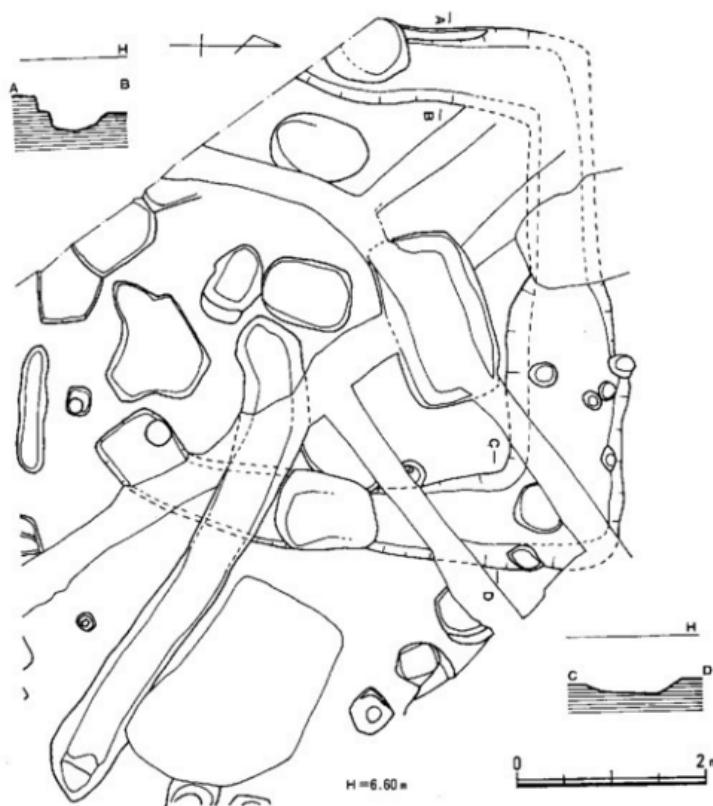


Fig.57 方形周溝遺構実測図 (1/60)

覆土中より弥生終末期變形土器・黒釉陶器・染付などの他に玻璃滓とも呼ぶべきコバルトブルー色のガラス塊片が出土した。

#### (8) 方形周溝遺構 (Fig. 67)

本遺構は S D01溝に切られる周溝遺構で北辺5.5m、西辺推定5.5mの規模で東辺の北コーナー近くに陸橋部をもつ。溝幅80~100cm、深さ10cmを残す。周溝内部には北辺に片寄って S X02 土壙墓やその他の比較的大型の浅い竪穴があるが、周溝遺構と積極的に関連をもつと考えられるものについては不詳である。周溝内覆土から弥生後期の二重口縁壺、時期不詳の變形土器破

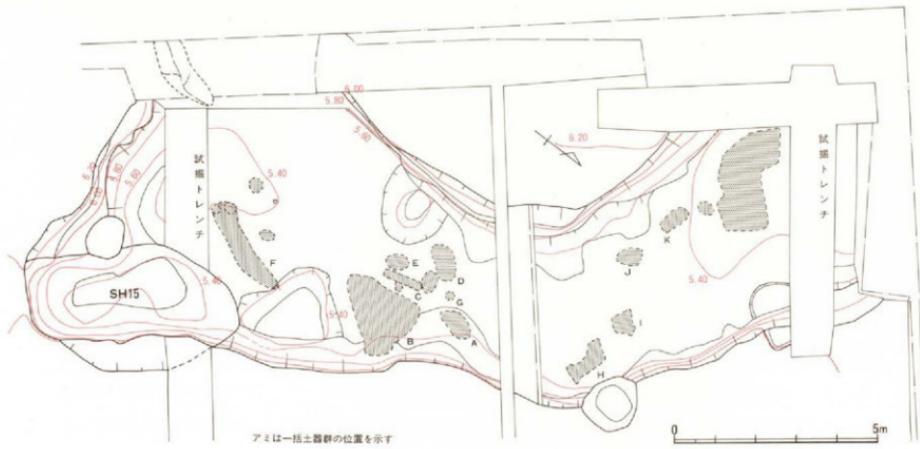


Fig.68 第1号古墳実測図 (1/100)

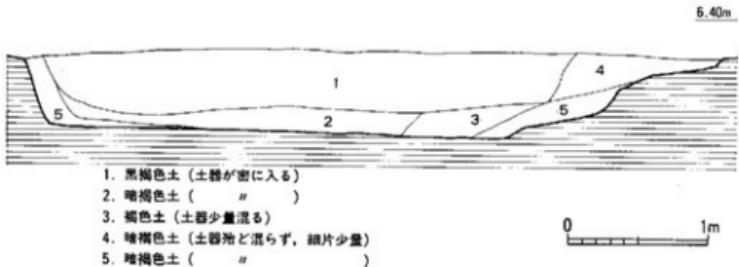


Fig.69 第1号古墳周溝土層断面実測図（1/40）

片など少量の遺物が出土したが副葬品に関連するものは全く出土しなかった。

### (9) 第1号古墳 (Fig.68・69, PL.40)

第1号古墳は調査区西端部に位置し、周溝部のほぼ半分を調査できたが、埋葬主体部施設については全く痕跡をとどめなかった。周溝は幅5mをはかる半円形であり、外周部は立あがりが急で壁面50cmをとどめる。そして平坦な底面につづく内部の壁面は非常に緩やかな立あがりをもっている。周溝は円形であれば外周で直径25mを越える規模となろう。内部主体については不詳であるが周溝南西壁に近く花崗岩大石が周溝に落込んだ状態であり、これが石室構築材の一部をなしたものであるかも知れない。また一方SD07溝上の擾乱上下層中には片面に朱塗りをとどめる石棺々材と考えられる板石が2枚見付かっておりこちらも可能性を全く否定できない。

周溝内覆土はFig.69にみる埋積状況であるが、このうち上部40cm程の黒褐色土中には弥生時代中期中葉～古墳時代後期に亘る非常に膨大な遺物類を含んでおりこれを上層と呼ぶ。またこれ以下20cm足らずの暗褐色土は上層程遺物包含量は多くはないがFig.68に示した様に周溝内にブロック状に遺物が分布することが知られ、これを下層と呼ぶ。下層には須恵器は全く含まれない。上層では全体でパンケース200箱程度分の種々の遺物類が出土した。その主なものは弥生中期中葉以降の日常土器、甕棺破片、弥生中期以降の石庵丁（小豆色凝灰岩製のもの多し）、石鍬・玄武岩製太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧、特殊磨石があり、土師器には小型丸底壺が特徴的である。また須恵器はII～III期の壺類・罐・大甕などがあり、他に滑石製平玉、鉄製刀子・鉄斧・スラッグが出土した。下層は古式土師器類で殆ど占められる。

本古墳の造営時期についてはこれら遺物類の検討によって明らかにすることとしたい。

## IV おわりに

比恵遺跡群第6次調査は以上に述べた様に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落、墓地遺構等を検出することができ多大な成果をあげたが、今回の報告ではこれらの遺構に伴出した諸遺物類の十分な検討をすることができず、従って各遺構の詳細な時期比定およびこれらの作業に基いて各遺構間のつながりを十分に把握することができていない。ここでは検出した各遺構別にその特徴を述べて一応のまとめとしたい。

弥生時代墓地では中期前葉～後期初頭の覆棺墓44基、木棺土塙墓7基が見付かったが、覆棺墓のうち主体を占めるのは中期後葉～後期初頭にかけてのものであり、小児覆棺の遺存が少ない。また現在のところ覆棺墓地の構成で初派的となるものは中期前葉後半にあたる覆棺墓（SK28覆棺墓など4基）である。弥生中期前葉に属する覆棺墓のうちSK28覆棺墓は同時期の他の3基と比較して墓壇形態、規模において非常に特徴的で、実用的な武器である細形銅劍を副葬された被葬者はこの時期の比恵ムラの盟主の人物であることが考えられる。また副葬された細形銅劍は福岡平野内でも板付田端、須玖岡本、飯倉唐木遺跡などで同型式のものが出土している。これらは時期的に弥生前期～中期中葉の覆棺墓に副葬されるものが多いところである。同銅劍には剣身・茎に2種類の絹織物が付着し、我が国の弥生中期前葉における紺布の存在が明らかとなったが同時期の我国における紺布生産技術の存否については不明な点が多く将来の課題であろう。なお有田遺跡第2号覆棺墓（弥生前期終末）から薄肉の彷彿らしい銅戈が出土しており、この銅戈の間に近い部分に布痕が付着するが内容については紺布であるか不明である。

また土塙墓のうちSK02・03・06土塙墓は明らかに木棺を使用したものと考えてよい。このうちSX03土塙墓は前期の様に側壁長、小口幅が4~4.1×1.8mを測る長大な墓壇をもつ木棺墓であり、二段をなす墓壇の内側壁に沿って溝状施設を配し、謂はば木椁墓的構造をもつものと思われる。類似する形態を有するものは春日市伯玄社遺跡および嘉穂郡穗波町スダレ遺跡などで知られている。スダレ遺跡例は弥生前期～中期前半に亘る木棺、土塙墓55基中の1基D-35号であり、墓壇の長、幅が447×425cmを測り、方形をなす。木棺は内法で長さ175cm、東端幅60cm、西端幅33cmとなるが、この木棺をとり囲むように内法長、幅が210×98cm、幅約10cm、深さ5cm内外の長方形掘込みがあった。調査者は木槧墳の可能性もあるとしている。SX03土塙墓には前記の様に墓壇南壁上にSK16覆棺墓（中期後葉）が営まれており、少くともこれより古い造営時期にあたり、また覆土中からも中期中葉に亘る土器類の発見はなく、中期前葉覆棺墓との切り合い関係もなく、SK17・28覆棺墓と並列する位置にある点でこれらよりやや古いか或は同時期に位置づけられる可能性が高い。

次に生活遺構については竪穴住居址9軒、掘立柱建物22棟、井戸および井戸状遺構50基、溝状遺構9条、その他の土器15基が確認されたが、このうち竪穴住居址は時期的にS C01・02住居址が弥生中期に属する以外は全て弥生後期～古墳時代前期（S C03～09住居址）にあたると考えてよく、何れも平面形が方形を呈し、一部にベッド状施設をもつものがある。この弥生時代中期から古墳時代前期にかけての住居址群は今回調査地点より100m西側に位置する第5次調査で中期4軒、後期28軒、古墳時代前期10軒などが重複して見付かっており、かなり安定した集落形成がこの時期におこなわれたものと考えられる。竪穴住居址ではS C03、04、05住居址を主として覆土内よりガラス小玉（コバルトブルー、スカイブルー色のもの）、丸玉および碧玉製管玉が出土しており、他の住居址S C06、07、08、09には見当らず、またS C07住居址では青銅製飾片が検出された。これらのガラス製玉類、青銅器類は同様に第5次調査でも出土しており、S D07溝内より見付かった玻璃滓から考えると集落内でガラス玉生産がおこなわれた可能性が高く、集落遺構としての同時性を窺わせる。また掘立柱建物は近世以降の溝S D07、08の東、西側に22棟をまとめることが出来た。規模的には1間×1間のものが7棟、1間×2間のもの6棟、2間×4間のもの1棟その他の構成であり、竪穴住居址に伴う倉庫群の建物と考えられるが、柱据方覆土中からは弥生中期後半から古墳時代前期の土器破片類が出土して、時期的には弥生後期以降の所産であろう。S B01建物掘方内ではS C03住居址発見のものと同様の碧玉製管玉が出土した。

井戸および井戸状遺構は時期的に弥生後期を主体として弥生中期、古墳時代前期（布留期）に亘って営まれたもので50基が確認された。これらのうちにはS E17井戸址で打欠いた大型甕を井戸側とするもの、S E33井戸址で上端部に井戸手を設けたと考えられる例があつて興味深いが、住居と生活組成をなす井戸址がこれ程多數に而も小範囲に密集する在り方は他の集落址に類例をみることがなく今後は各井戸址の伴出遺物の検討に基いて他遺構との詳細な時期的構成を把握することにつとめたい。次に末尾には今回の出土遺構の半面的分布に建設予定建物の配置を重ねて今後の検討に供した（Fig.70）。

## 註

- 1 中山平次郎「鋼錠・鉛錠の新資料」「考古学雑誌第7号」1917年
- 2 沢田耕作「筑前須恵史前遺跡の研究」「京都帝國大学文学部考古学研究報告第11冊」1930年
- 3 難波正久「福岡県飯塚・西本遺跡調査報告」「福岡県文化財調査報告第1集」1972年
- 4 藤白次郎「無倉の墓棺と細形銅鏡」「有田遺跡」1968年
- 5 松浦史・龜井勇「福岡県佐賀郡遺跡調査報告」「福岡県文化財調査報告第36集」1968年
- 6 桂口達也他「スケレ遺跡」「徳島町文化財調査報告書第1集」1976年

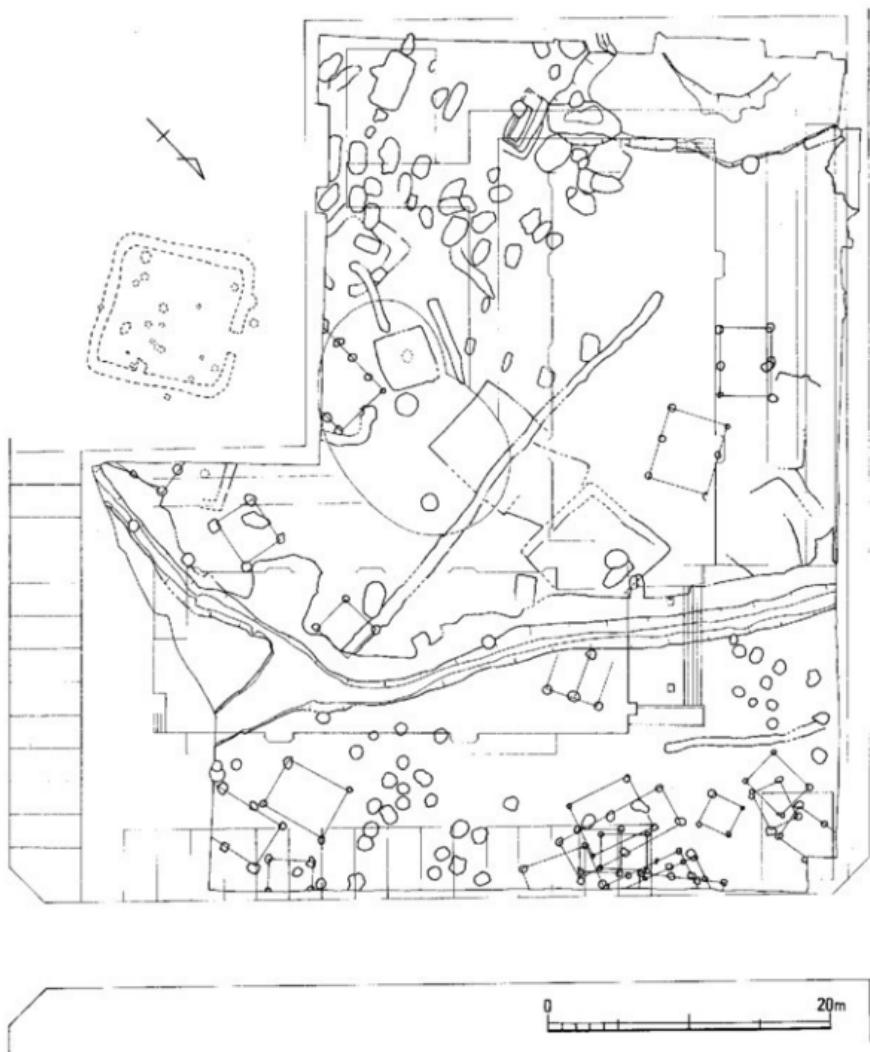


Fig.70 完成予定建物と遺構との関連図

# 図 版





比恵遺跡群付近航空写真(1/15,000昭和55年11月撮影)



1. 第2次調査風景（昭和26年） 2. 環溝遺構全景



1



2

1. 環溝遺構内堆積狀況 2. 第3号土塘出土狀況



2



2

1. 第1号腰棺墓出土状况

2. 第2号腰棺墓出土状况



1. 第4号腰棺墓出土状况

2. 第6号腰棺墓出土状况



1. 第8号腰棺墓出土状况 2. 第12号腰棺墓出土状况



1



2

1. 裸棺墓出土状況（東より）

2. 裸棺墓出土状況（北より）



1



2

1. 調査区南東部遺構出土状況 2. 調査区東部遺構出土状況



1. SK01 甕棺墓出土状况

2. SK04·38 甕棺墓出土状况



1. SK02號窖龕出土狀況



2. SK05號窖龕出土狀況



1



2

1. S K06號棺墓出土狀況 2. S K07・08・09號棺墓出土狀況

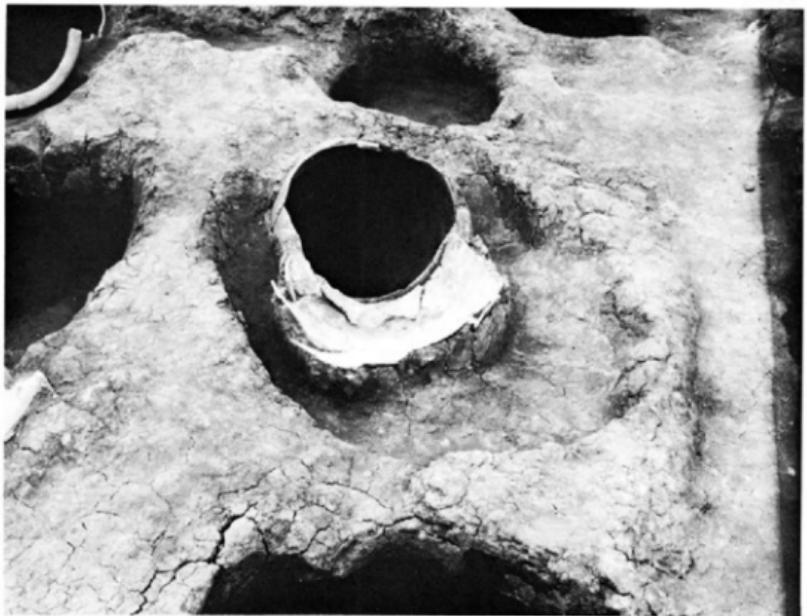


1



2

1. SK10號棺墓出土狀況 2. SK11・12號棺墓出土狀況

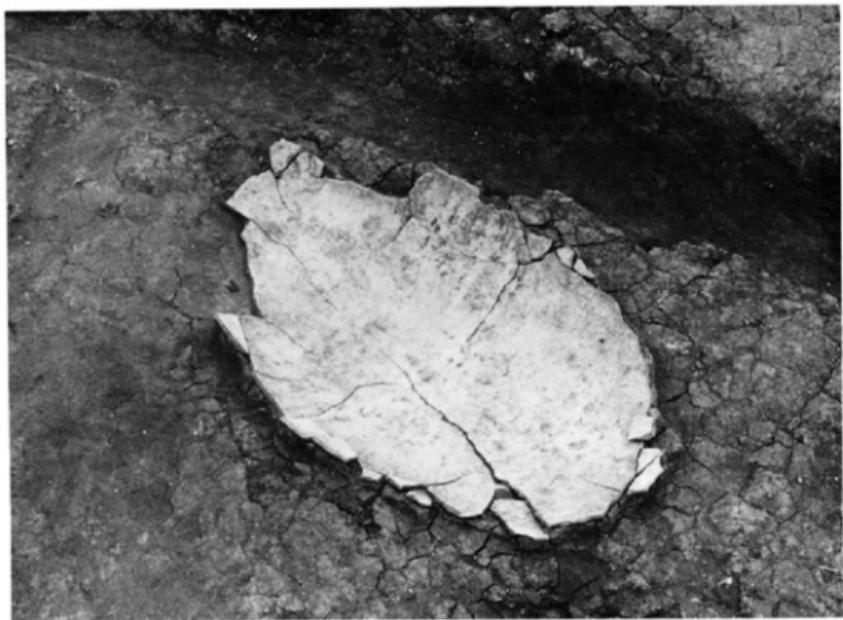


1

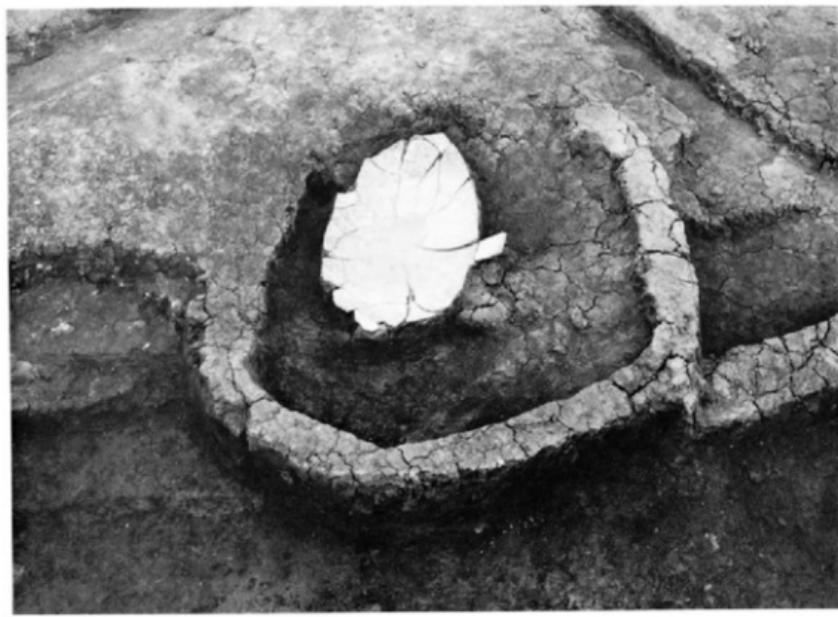


2

1. SK13腰棺墓出土状况 2. SK14腰棺墓出土状况



1



2

1. SK15號棺墓出土狀況 2. SK16號棺墓出土狀況



1



2

1. SK17·18號墓出土狀況 2. SK19號墓出土狀況



1



2

1. SK20號棺墓出土狀況 2. SK21·37號棺墓出土狀況



1



2

1. S K22 瓷棺墓出土狀況      2. S K23 瓷棺墓出土狀況



1



2

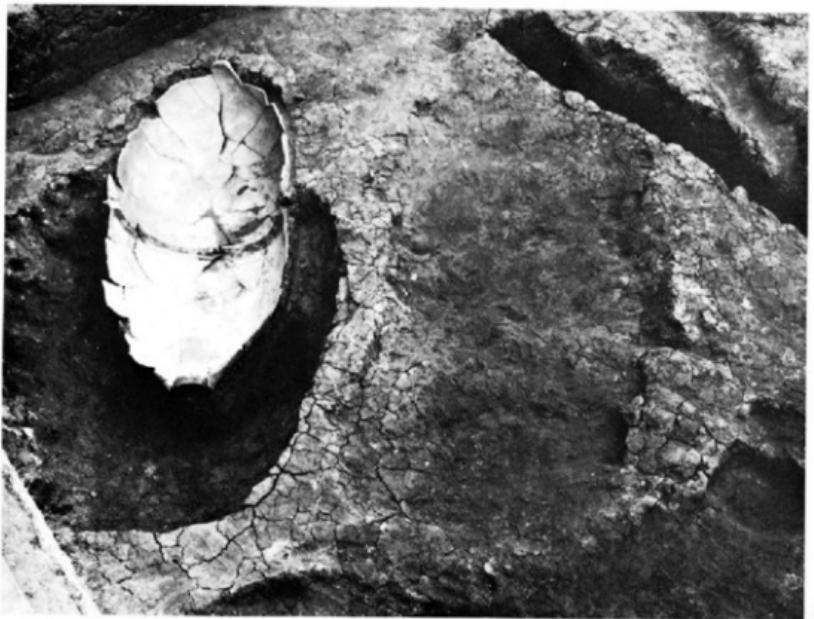
1. SK26・27腰棺墓出土狀況 2. SK29・32腰棺墓出土狀況



S K28襄棺墓出土狀況



1. SK28號棺墓出土狀況 2. 同號棺墓出土銅針



1. S K30・36號棺墓出土狀況 2. S K31・35號棺墓出土狀況



1. S K32 蔡棺墓出土状况 2. S K33, 30, 36 蔡棺墓出土状况

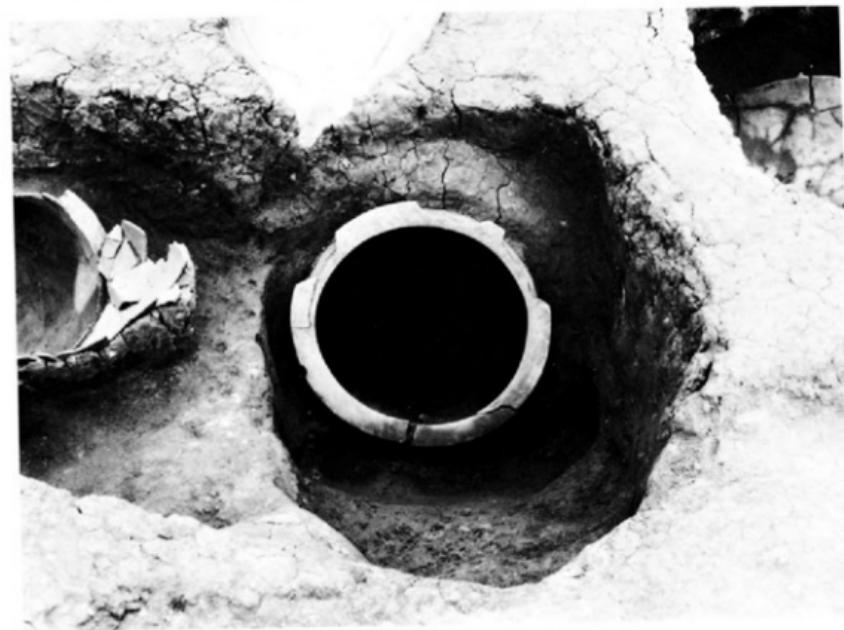


1



2

1. SK 36·33·30葬棺墓出土状况 2. SK 34葬棺墓出土状况



1. SK40号墓出土状况 2. SK37号墓出土状况



1



2

1. SK42號棺墓出土狀況 2. SK41號棺墓出土狀況



1



2

1. SK43腰棺墓出土状况

2. SK44腰棺墓出土状况



1



2

1. S X03土壤幕出土状況（西より） 2. 同土壤幕主体部土層



1



2

1. S X04土壤墓出土状況（北より）

2. S X05・06出土状況（西より）



1



2

1. SC01住居址出土状况 2. SC02住居址出土状况



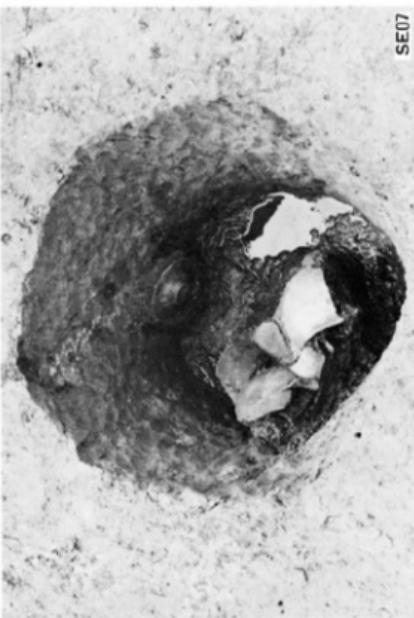
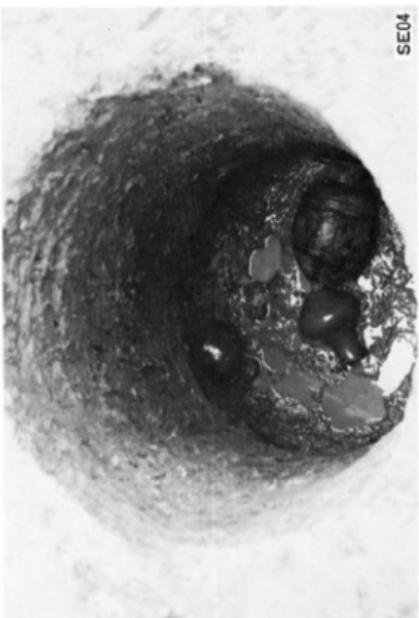
1



2

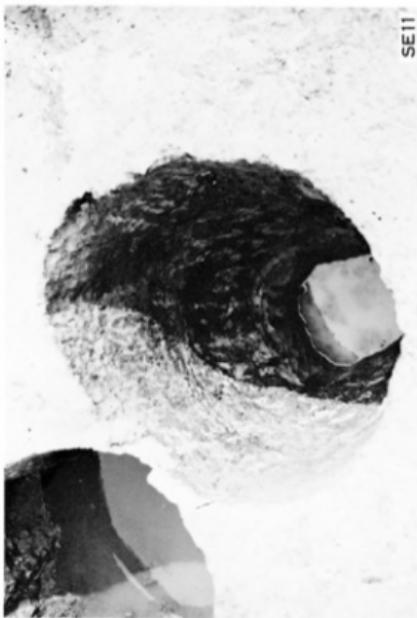
1. S C03・04・05住居址出土状况 2. S C08住居址出土状况

SE07



井戸址出土状況I  
SE05・06







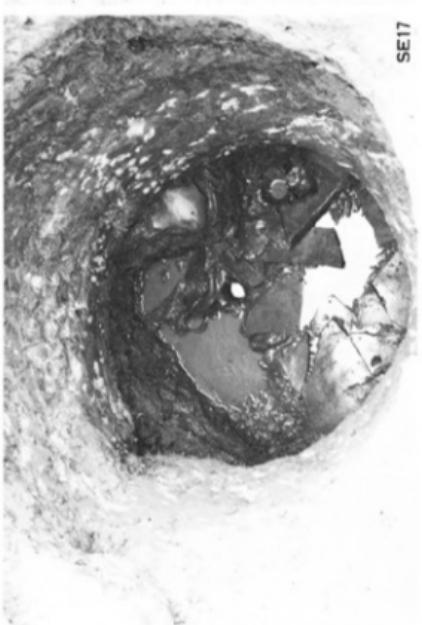
SE14・15



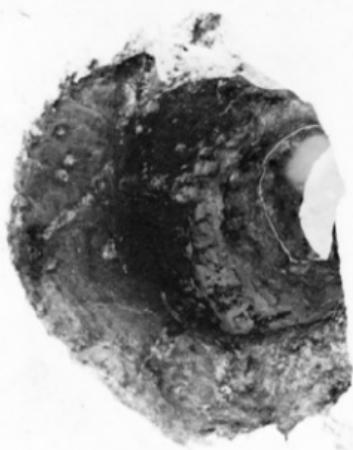
SE20・21



SE16



SE17



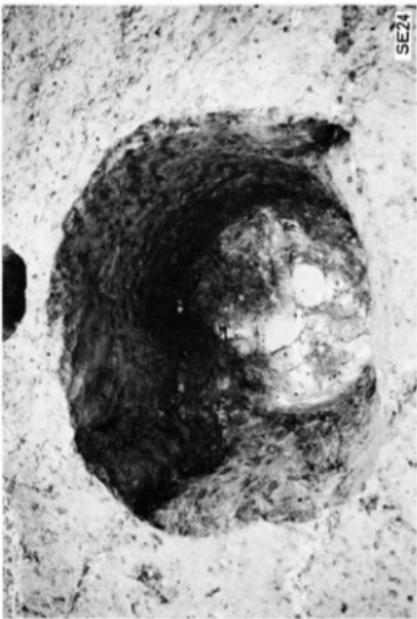
SE27



SE28



SE22



SE24

井戸址出土状況Ⅳ

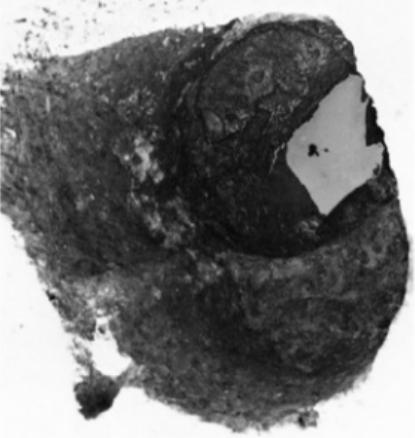


SE32



SE29

SE33

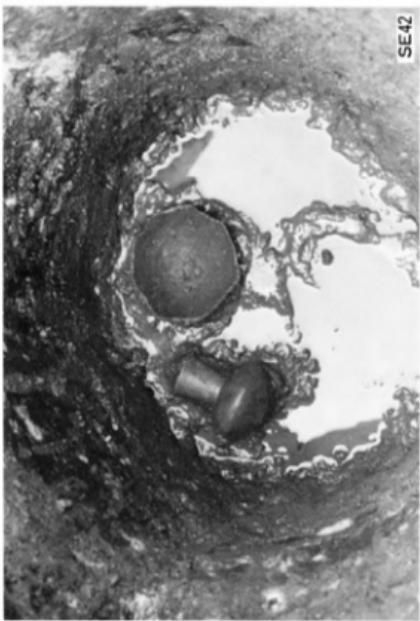


井戸川山 + 猿谷 V

PL.36



SE37



SE32



SE36



SE38

井戸址出土状況VI

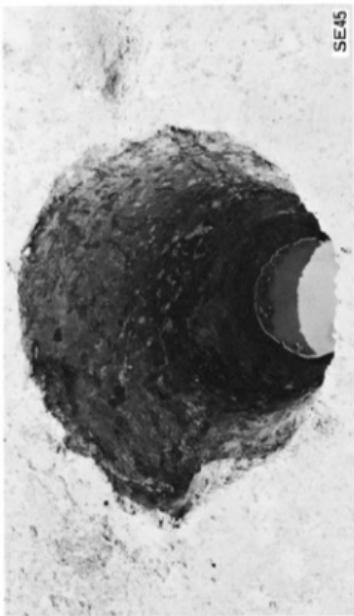
SE46



SE50

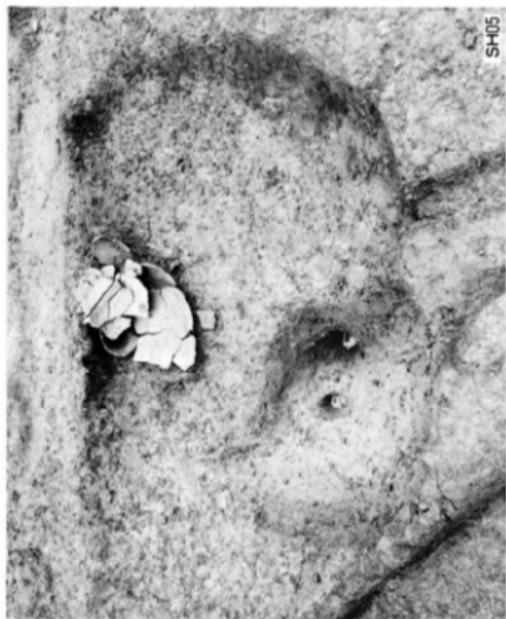


SE45

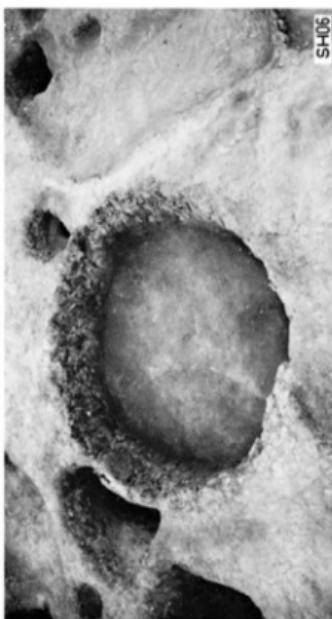


SE48





SH05



SH06



SH01



SH03

土壤出土狀況 I

SH11



SH08



SH12



土壤出土状况 II



1



2

1. 第1号古墳出土状況 2. 同古墳周溝内遺物出土状況

# 付 論

I 比恵遺跡の細形銅剣に付着する織物・織維について

布 目 順 郎

II 比恵遺跡出土の紡織物の走査型電子顕微鏡による観察

小 西 孝



## 付論 I 比恵遺跡出土の細形銅剣に附着する織物・繊維について

京都工芸織維大学名誉教授 布 日 順 郎

### (1) 表面観察

比恵遺跡群第6次調査の際に、弥生時代中期前半に属する第28号墳棺蓋（接合口）の下蓋から出土した細形銅剣（長さ30.35cm）に織物が附着していたことから、その調査を依頼されたのは1982年の6月に入って間もない頃である。早速現地に赴き、実体顕微鏡を用いて観察したところ、剣身の片面、柄に近い方の約半分にかなりの範囲にわたって織物が附着している。さらにその裏側をみると、これも柄に近い方の約半分に織物の痕跡がかなりの範囲にみられる。そしてさらに、柄（長さ2.38cm）の部分にはほぼ全面に繊維が巻かれている。

剣身の織物は普通の平織で併糸は認められない。したがって、これがもし紺であるとすれば、それはただの平紺で、縦ではないということになる。織密度は1cm当たり経が40~44本（平均42本）、緯が16本である（第1表参照）。この密度は部分により（裏面においても）殆ど差がなく、かつ織目方向が柄に近い部分を除きほぼ同じであるところから、一連の織物でもって剣身を巻いたものとみられる。巻き方は右下がりで、見方によっては恰も幅の狭い（約7mm）帯状の織物が右下がりに巻かれているかのようにも見える。その帯の縦方向は経糸方向と大体一致している。

この織物の表面には緑青と粘土が附着していて、色は部分によって緑青色、褐色、青白色等様々である。

織糸は絹糸とも右撚であり、その撚数は経糸については算定困難であるが、緯糸については1cm当たり最高5回を算える。

剣柄の繊維は幅2~3mmの扁平化した纖維束を全面に巻いてあるように見えるが、その巻き方は不揃いである。纖維束は撚られてはいない、色は純白に近い。おそらく纖維自体が白色で、その上から何か白い物質がまぶされているような感じである。

### (2) 材質調査

材質の調査は従来と同様纖維断面形によった。断面作成はパラフィン切片法による。

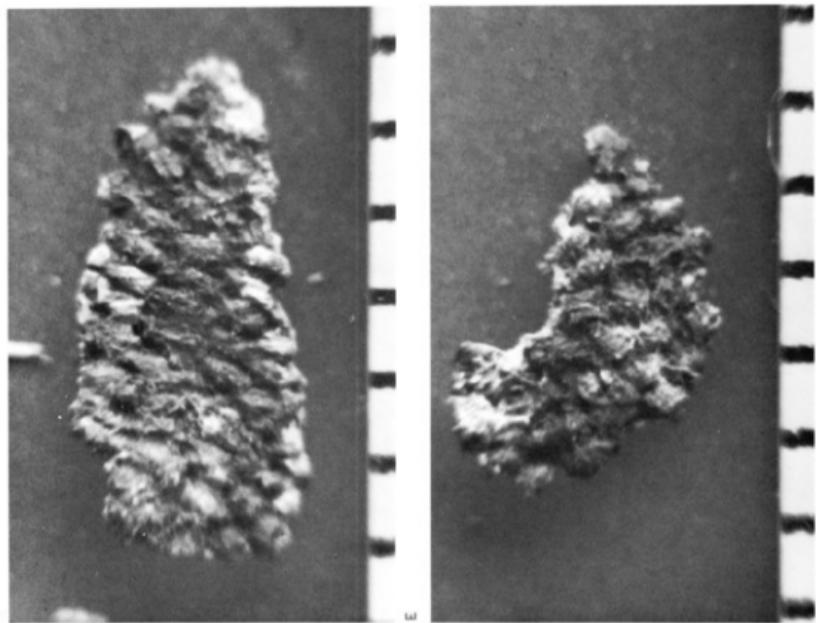
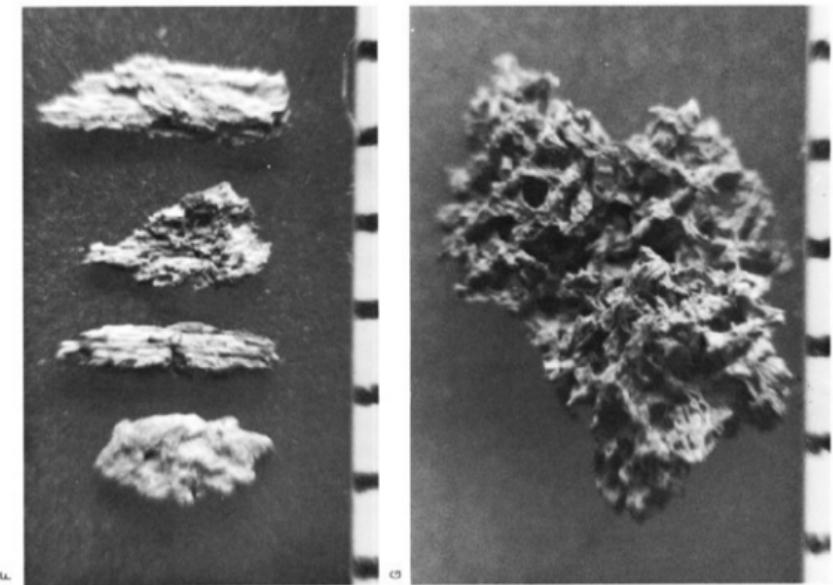
調査の結果は第2、3図に示す通りであって、これら图形と第1表の断面計測値からみて、剣身の織物、剣柄の繊維はともに家蚕のものに相違ない。

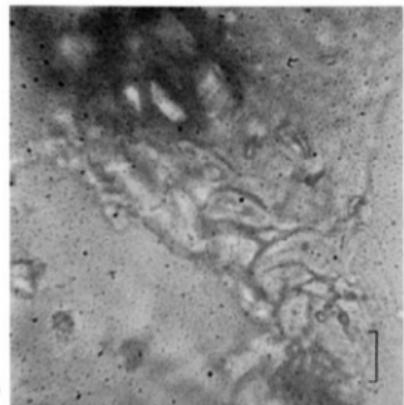
京都工芸織維大学の小西 孝助教授は、剣身の織物を走査型電子顕微鏡によって調査し、家蚕の糸に間違いないことを追認された（付論II参照）。なお、以下において「比恵紺」と称するものは、この糸をさす。



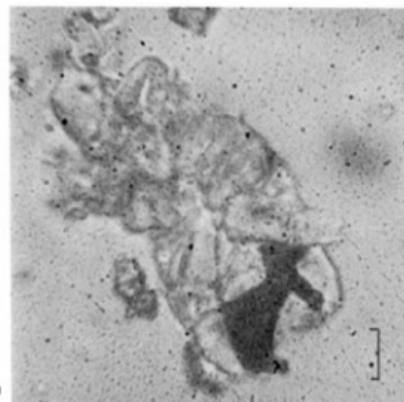
第1図 入巻形鋼網に織物の付着している面。B 織物付着部分の拡大。C 織物付着部分の1部をさらに拡大したもの  
Scale: A:1000, C:100

D, E 塗物の1部を鏡面鏡で拡大したもの、F 塗物の別に墨かれていた繊維を鏡面鏡で拡大したもの、G 畠山謹財(曾木)出の塗物 第38号塗物(内人管に付着していたもの)  
Scale D-G:1mm

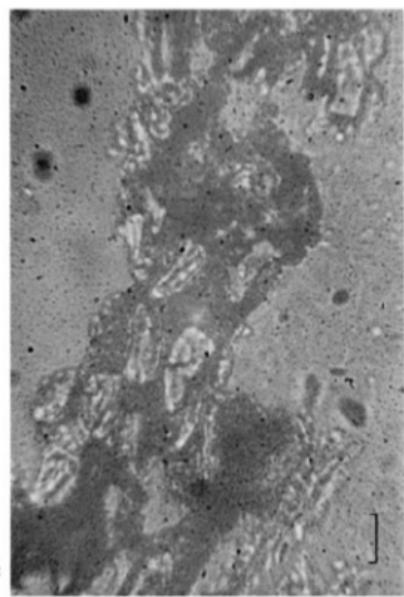




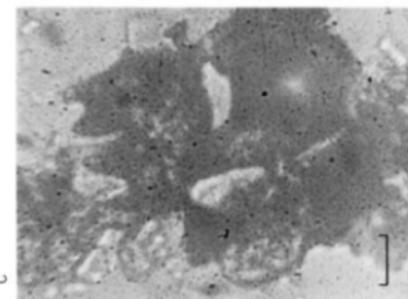
D



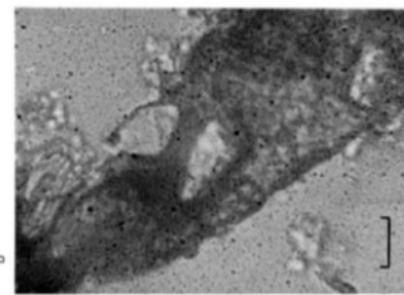
E



A



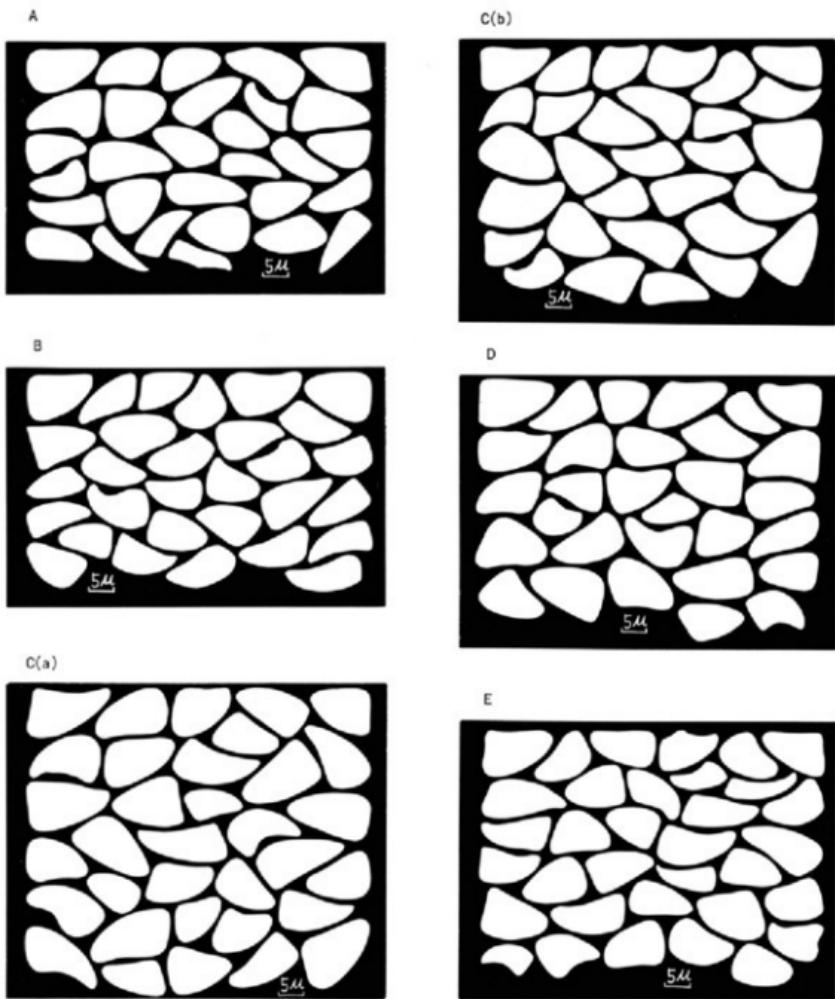
C



B

細胞膜固着部位における癌細胞の構造断面図  
A～C 組織、D、E 脱落。 Scale 10μ  
(脱落の時に分かれていた組織の断面については長い折曲下部が現れなかつた)

第2図



第3回

編維断面拡大板写図(顯微鏡視野にあらわれた個々の繊維の断面板写図を無秩序に並べたもの。板写はABE式板写器による)

A 細形網状々身に付着する植物の絨毛、B 同じ植物の絨毛、C 同前の柄に巻かれた繊維(a, bは同じ柄の任意の2箇所でのもの)

D 美山道跡(甘本市)出土の植物(第38号號桟内人骨に付着していたもの)の絨毛、E 同じ植物の繊維

Scal. 5μ

## (3) 繊維断面計測

比恵遺跡出土の銅剣の身に附着する平綱と、柄に附着する紺織維についての繊維断面計測値は第1表に示す通りであって、断面完全度については剣身の綱での値と剣柄の紺織維での値とは大きく違っていないが、断面積においては剣柄の繊維の方がかなり大きな値を示した。

弥生時代中期前半の織物としては比恵遺跡のもののはかに甘木市栗山遺跡<sup>2)</sup>のものがある。昭和56年に第38号調査から人骨に附着して出たもので、調査の結果これも綱であることが判明したから、序にその調査値をも同表に併記しておいた。

第1表 比恵遺跡出土の綱製品とその繊維についての調査成績

原 料	経緯 の別	色	繊維横断面についての計測値	織糸数 完全度(%)	面積( $\mu^2$ )	供試繊 維の数	織糸数 面積の比 (対1cm)	燃 り	調査 番号	時 代
剣身に附着している平綱	経	緑青	45.6±4.38	61.1±6.33	30	42	2.62	右	28	弥生中期前半
"	緯	"	50.8±3.22	63.0±4.56	30	16	"	"	"	"
剣柄巻紺織維(a)	白	50.0±2.55	78.9±5.65	34	—	—	無	"	"	"
"(b)	"	48.2±2.70	75.2±6.49	30	—	—	"	"	"	"
栗山遺跡の人骨に附着する平綱	経	黄橡	54.4±3.17	74.4±5.84	30	40	1.67	"	38	"
"	緯	"	53.1±3.72	65.3±5.00	34	24	右	"	"	"

備考 剣柄巻紺織維におけるa、bは同じ資料の任意の2ヶ所をあらわし、a、bと複数にしたのは差の有意性検定のための措置である。これにより、同一資料でも部分によって計測値にどの程度の違いがあるかを知ることもできる。

## (4) 比恵綱とその繊維の性格

比恵綱とその繊維が日本産かそれとも渡来品であるのか。もし渡来品であるとすれば、何処から渡來したか。また、その繊維を生産した蚕はどのような系統のものか。それらのことが、日本と外国における当時の綱出土品についての調査値を互いに比較することによってある程度推定できるかもしれないところから、弥生中期前半に属する比恵、栗山両遺跡出土の綱を1グループとし、これと漢代綱及び弥生中期後半の綱における調査値を互いに比較してみたいと思う。それには多変量解析法を適用しなければならない。

## (a) 織密度からの推測

まず織密度について、弥生中期前半の値と漢代5墓での値(第2表)とを比較すれば第3表のようになる。すなわち、弥生中期前半での経糸数は漢代5墓のいずれよりも小さく、殊に陽高、ノイン・ウラ及びバルミラとの間に有意な差が認められる。栗浪及び馬王堆との間には有意差がなく、どちらかといえば馬王堆の方に近い。緯糸数においては、漢代4墓(ノイン・ウラの数値を欠く)のいずれよりも小さく、この場合は陽高、栗浪及びバルミラとの間に有意差を認めるが馬

王堆との間には有意差がない。経糸数と緯糸数の比では、漢代4基のいずれよりも大きい。ただし、そのいずれも有意な差ではない。

漢代5墓（又は4墓）を1グループとした場合にも同様の傾向が認められる。

以上から、弥生中期前半の綿は機織法において漢代綿と異なるものがあり、中国産とは考え難い。織密度において漢代綿よりも小さいということは、織技において漢よりも劣っていたことをあらわしているとみてよいであろう。

さらに、弥生中期前半の値を弥生中期後半での値と比較すれば第4表のようになり、経糸数、緯糸数、経糸数と緯糸数の比のいずれにおいても弥生中期前半の方が大きい。特に経糸数において明らかに有意差を認める。このことからすれば、弥生中期の前半における織法は後半におけるよりも勝れていたようにみえる。織密度が必ずしも時代とともに細密化しないことは古墳時代の例（前期に最も細密で、中期、後期と下るにしたがって漸次に粗くなる）をみても明らかである。

弥生中期前半頃の韓国において、もし蚕織が行なわれていたとすれば、比恵及び栗山の綿が韓国製である可能性も生じてくる。しかし、弥生中期前半頃の韓国からの綿出土品が皆無であることから、当時の韓国において養蚕機織が行なわれていたと確言することはできない。このことから、九州北部から出土したこれらの綿は日本で作られた可能性が強いと考えたい。

第2表 漢代の平綿における繊維断面計測値と織密度

遺跡名	繊維横断面についての計測値		織密度		緯糸数と 経糸数の比
	完全度(%)	面積( $\mu^2$ )	経糸数(対1cm)	緯糸数(対1cm)	
陽高県(山西省)	50.9 (10)	37.1 (10)	125.8 (6)	70.8 (6)	1.97 (6)
樂浪	50.8 (23)	49.8 (23)	68.4 (10)	32.9 (10)	2.06 (10)
馬王堆1号	— (5) (53.9)	65.5 (5) (69.3)	61.1 (90)	33.0 (90)	1.95 (90)
ノイン・ウラ	53.9 (20)	73.0 (20)	86.7 (184)	—	—
バルミラ	—	—	71.9 (36)	37.9 (36)	2.15 (36)

- 備考(1) 馬王堆の綿織横断面計測値は『考古学報』(1974年第1期)<sup>6)</sup>にあるもの（ただし、〔 〕内の数値は筆者が同学報に示された繊維横断面写真をもとに算出したもの）であり、経糸数及び緯糸数は『長沙馬王堆1号漢墓』上集(1973)<sup>7)</sup>に表示されているもの（ただし、経糸数と緯糸数の比は筆者が同表の数値をもとに算出したもの）。
- ノイン・ウラの経糸数はL-Lesnichenko (1961)<sup>8)</sup>に表示されているもの。バルミラの数値はPfister<sup>9)</sup>の数値により計算したもの。
- (2) 本表の数値にはマワタでのものは含まれていない。
- (3) ( )内の数値は資料数。

第3表 弥生中期前半の平綱と漢墓から出た平綱における織密度  
 (それぞれ) の差の有意性の検定  
 (平均値)

遺跡	経糸数(対1cm)	緯糸数(対1cm)	経糸数と緯糸数の比	遺跡
弥生中期前半遺跡(2)	< ** 0.3 0.5 0.7 0.7	< * 0.4 — * 0.3	> 0.8 0.8 0.6 — 0.6 0.8	陽高漢墓(6) 楽浪漢墓(10) 馬王堆1号漢墓(90) ノイン・ウラ古墳(184) バルミラ古墳(36) 漢代墓(5又は4)

備考(1) <又は>の下に附した\*、\*\*、\*\*\*印はそれぞれ危険率0.05、0.01、0.001の水準で両平均値間に有意差を認めるもの。同じ場所に数値を記したもののは危険率0.05以下の水準では両平均値間に有意差を認めないもの(この数値が大きくなるほど両平均値間の差が小さくなる)。

- (2) ( ) 内の数値は資料数。
- (3) 弥生中期前半での数値(平均値)は、経糸数41、緯糸数20、経糸数と緯糸数の比2.15であり、漢代綱での数値(平均値)は第2表に示す通りである。
- (4) 最下列の漢代5墓(ただし、緯糸数と“経糸数と緯糸数の比”については4墓)での数値としては、それぞれの墓での平均値を平均した値(経糸数82.8、緯糸数43.7、経糸数と緯糸数の比2.03)を当てた。

第4表 弥生中期前半の平綱と同後半の平綱における織密度  
 (それぞれ) の差の有意性の検定  
 (平均値)

遺跡	経糸数(対1cm)	緯糸数(対1cm)	経糸数と緯糸数の比	遺跡
弥生中期前半遺跡(2)	> *	> 0.4	> 0.7	弥生中期後半遺跡(8)

備考(1) 第3表の備考(1)(2)(3)に同じ。

- (2) 弥生中期後半での数値(平均値)は、経糸数25.9、緯糸数16.6、経糸数と緯糸数の比1.57である。

#### (b) 繊維断面計測値からの推測

繊維断面計測値について、弥生中期前半の値と漢代4墓(バルミラの数値を欠く)での値とを比較すれば第5表のようになる。すなわち、比恩綱では、断面完全度については漢代4墓のいずれよりも小さい。しかし、いずれも有意な差ではない。どちらかといえば樂浪の値に近い。断面積の方は陽高及び樂浪よりも大きく、馬王堆及びノイン・ウラよりは小さい。ただし、有意差の認められるのは陽高及び馬王堆との間だけである。どちらかといえば樂浪に近い。

劍柄の繊維では、断面完全度については漢代4墓のいずれよりも小さい。ただしいずれも

有意な差ではない。どちらかといえば樂浪に近い。断面積については漢代4墓のいずれよりも大きい。かつ、陽高、樂浪及び馬王堆との間に有意差がある。どちらかといえばノイン・ウラの値に近い。剣柄の紺織維でのこの傾向は立岩遺跡の第10号墓棺から出た鉄剣の柄巻撫糸の場合とよく似ている<sup>3)</sup>。

以上から、剣身の紺を構成する繊維を産出した蚕は樂浪系品種の可能性がある。剣柄の繊維の場合は、断面完全度からみる時は樂浪系蚕品種の可能性があり、断面積からみる時は、中国本土の比較的大い繊維を産出する種類の蚕のものであることが考えられる。その蚕の飼育地としては華北中原から華中へかけての地方がまず考えられる。しかし、当時の樂浪や日本でそのような蚕が飼われていなかったと断言することもできない。剣柄を巻いた繊維を生産した蚕の眠性としては、四眠蚕の可能性が濃いが、三眠蚕のものでないといい切ることもできない。というのは、現在系統保存されている三眠蚕の繊度をみても必ずしも細くはなく（山東三眠で2.6d、四川三眠で2.3d、三眠白で2d、高麗三眠で1.6d、韓三眠で1.3d）<sup>4)</sup>、当時飼育されていた三眠蚕の繭の中から特に大型で繭層の厚いものを選んで使用することもできたからである。朝鮮の在来品種としては古來、三眠蚕が主体をなしていたから、当時の樂浪で飼育されていた蚕は当然三眠系の品種であったろうし、当時の日本で養蚕が行なわれていたとすれば、それも三眠系品種が主体をなしていたであろう。華北中原では主として三眠蚕、華中方面では四眠蚕が多かったと思われる。

これを要約すれば、比恵遺跡の剣身の紺を構成する繊維を産出した蚕としては、樂浪系（三眠蚕）であった可能性が大きい。剣柄の紺織維の場合は、中国本土系（眠性としては三眠蚕よりも四眠蚕の可能性が濃い）、樂浪系（三眠蚕）の両方が考えられる。剣身の紺の产地としては日本の可能性が大きいのに対して、剣柄の紺織維の場合は中国本土（特に華北平原から華中へかけての地方）、樂浪、日本のいずれかということになる。繊維断面積の値からみると中国本土の可能性が大きいといえるが、断面完全度からいえば樂浪か日本の可能性がでてくる。

比恵遺跡の剣とそれに附着している紺又は紺織維との関係について考えてみると、剣身の紺の場合は死者の埋葬時にその剣を紺で巻いて棺内へ納めたと考えられるのに対し、剣柄の繊維の場合は剣が作られた直後にその柄に巻かれたものとみなされる。したがって、剣の产地と繊維の产地は同じであったとみなければならない。ただし、剣を長い間使ったあと、何かの都合で新しい繊維で巻きかえることがあったとすれば、剣の产地と繊維の产地は必ずしも一致しないことになる。

ここで栗山遺跡第38号墓棺の紺の場合を検討してみよう。栗山の紺は、繊密度においては比恵の剣身の紺ときわめてよく似ている。しかし、断面完全度では、比恵の剣身の紺や剣柄の紺織維よりも大きく、断面積では、比恵の剣身の紺と剣柄の紺織維との中间よりも剣身の紺の方に寄った値である。いまこれを漢代4墓の値と比較してみると、断面完全度においては、

陽高、楽浪よりも大きく馬王堆、ノイン・ウラよりも小さい。どちらかといえば馬王堆、ノイン・ウラの方に近い値である。断面積においては陽高、楽浪、馬王堆のいずれよりも大きいが、ノイン・ウラよりは小さい。どちらかといえばノイン・ウラに近い値である。したがって、この綿の材料として使われている纖維の性格としては、中国本土(特に華北中原から華中へかけて)的色彩が強く滲み出ている。すなわち、この綿が織られた場所は日本(九州北部)である可能性が濃いにしても、その纖維を産出した蚕は中国本土系品種(三眠蚕又は四眠蚕)であった可能性が濃いといえる。その材料糸を中国本土から輸入したというよりは、そのような蚕を甘木市あたりで飼育していたとみる方が当たっているよう。

第5表 弥生中期前半の綿製品と漢墓から出土した綿製品における  
纖維断面積測定値の差の有意性検定

弥生時代遺跡とその資料	完 全 度	面 積	漢代 4 墓
比志遺跡剣身平綿(2)	< 0.4	> ***	陽高県漢墓(10)
〃	< 0.6	> 0.3	樂浪漢墓(23)
〃	{ — [ < ] 0.1	[ < ] 0.5	馬王堆1号漢墓(5)
〃	< 0.1	< 0.2	ノイン・ウラ古墳(20)
比志遺跡剣柄巻綿織維(2)	< 0.6	> ***	陽高県漢墓(10)
〃	< 0.7	> *	樂浪漢墓(23)
〃	{ — [ < ] 0.5	[ > ] • **	馬王堆1号漢墓(5)
〃	< 0.2	> 0.7	ノイン・ウラ古墳(20)
栗山遺跡第38号竪棺の平綿(2)	> 0.4	> ***	陽高県漢墓(10)
〃	> 0.5	> 0.1	樂浪漢墓(23)
〃	{ — [ < ] 0.95以上	[ > ] 0.4	馬王堆1号漢墓(5)
〃	< 0.95以上	< 0.8	ノイン・ウラ古墳(20)

備考 第3表の備考(1)(2)と同じ。

#### (5) 綿の副葬について

弥生時代の遺跡から出た綿製品で筆者の調査対象となったものは10数種類であるが、筆者が調査しなかったものを含めても20種類には達しない。それに比べ、古墳時代における出土は莫大な数量である。80種類を超える綿を出した月の輪古墳(岡山県久米郡柵原町)などは特例であるとしても、数種類程度の綿を出した古墳の数は算えきれぬほど多い。このことが、弥生時

代と古墳時代における絹生産量の違いをあらわしていることはいうまでもない。それら絹製品の大半は刀剣、鎌、鉗、鏡等の器物に附着して出ているが、古墳時代においては1つの器物に附着する絹製品の種類が単一の場合と複数の場合とがあり、多い時は4~5種類を算えることができるのに対し、弥生時代にあっては、筆者の経験した限りでは、多くの場合1器物に1種類のみであった（比忠遺跡の銅劍に2種類の絹製品が附着していたのを唯一の例外とする）。

月の輪古墳から多種類の絹帛が出たことについて西川 宏氏<sup>5)</sup>は、「このような種類の豊かさは、生産技術の発達の結果というよりも、むしろ生産単位の多元性を反映したものである。すなわち、後の律令制下で行われたような品質管理がいまだなされておらず、月の輪古墳の首長の支配下にある共同体や近隣の共同体の内部の、おそらくいくつもの世帯共同体で、それぞれに生産されたものが、供獻されたのであろう」という。もし氏のいわれる通りであるとすれば、1つの器物につき1種類（購物のみを対象として考えるならば劍柄巻絹織維は除外されることになるから、比忠遺跡の銅劍の場合もまた1器物1種類ということになる）といった弥生遺跡の場合は、生産単位は多元ではなくて一元であったことが想像される。そして、それら絹帛が購物として供獻されたものであったかどうかかも疑わしくなる。死者の親族が、偶然手許にあった絹で器物を包んで棺内へ入れたに過ぎないとみることもできるからである。その場合、意識的に副葬されたのは器物の方であり、絹の方は単に器物を包むためのもので、副葬品としての性格はそれほど濃くはなかったであろう。

#### (6) むすび

比忠遺跡から出た細形鋼劍の劍身に附着している半織物、及び劍柄に巻かれている織維はともに絹（家蚕の）である。

劍身の絹は、その織密度からみて中国製とは思えず、もっと技術の劣る國のものと思われる。韓國製の可能性もないではないが、その時代の絹が韓國で出土した例がないから、むしろ出土地である日本（九州北部）で作られた可能性が考えられる。したがって、弥生時代中期前半頃の九州北部においてすでに養蚕紡織が行なわれていたことになり、日本における養蚕の起源は前100年あるいはそれ以前にまで遡ることになる。養蚕の渡来経路としては、楽浪からもたらされた可能性が考えられる。漢の武帝による樂浪郡設置（前108年）よりも以前のことであったか、それとも以後であったかはわからない。南鮮を経由したか否かについても不明である。

劍柄の織維の場合は、劍の產地と織維の產地が同じである可能性が考えられる。その織維断面計測値からすると、中国本土（特に華北中原から華中へかけての地）、樂浪、日本（九州北部）のうちのいずれかということになる。すなわち、断面積からみると中国本土の可能性が大きいが、断面完全度による場合は樂浪が日本の可能性がでてくる。

織維断面計測値よりみて、劍身の絹の織維を産出した蚕は樂浪系品種の可能性が考えられるのに対し、劍柄の織維の場合は中国本土系品種（華北中原から華中方面にかけて多く飼育され

た種類)、栗浪系品種の両方が考えられる。

過去の例よりみて、弥生時代の遺跡(比恵遺跡を含む)から出た器物に附着する綿帛(劍柄に巻かれている糸や纖維は除外する)は、1つの器物につき1種類のみである。その点、古墳時代の場合(1器物に多種の綿織物を附着する例が少なからずある)と違っている。このことから、古墳時代においては綿生産単位の多元性が考えられるのに対して弥生時代の場合は一元的であったと想像される。また、古墳時代の墳墓から出る綿織物の場合は、墳墓によっては贋物としての性格が想定できるのに対し、弥生綿の場合は必ずしも贋物として供献されたとは考えられず、むしろ、たまたま手許にあった綿織物で器物を包んで埋納したと考える方が自然であろう。

終りに、本調査を行なう機会を与えられた福岡市教育委員会、九州大学考古学教室岡崎 敬教授ならびに栗山遺跡の綿を提供された福岡県教育庁文化課の橋口達也氏に対し感謝の意を表する。  
(註)

- 1) 銅劍が発掘された時は織物の附着する面が下になっていたという。腰棺の上部が大きく欠損していて、そこから入り込んだとみられる土が劍を覆っていたといわれるから、おそらく劍の上面の織物が、雨水や土によって削り去られてしまい、痕跡のみが残ったのに対し、下面の織物は削り去られることから免れたものと思われる。
- 2) 甘木市教育委員会「栗山遺跡」甘木市文化財調査報告第12集、1982年。この遺跡からは弥生中期前半に属する織物のほかに弥生中期後半及び弥生後期初頭に属する織物も出ている(同報告165、166頁、橋口達也氏執筆)。
- 栗山遺跡第38号腰棺の被葬者は熟年の男性で、その右大腿骨、右腓骨、左右の肋骨等に織物が附着していたが、筆者の調査の対象となったものはその中の左肋骨に附着していたものである。
- 3) 立岩遺跡調査委員会編「立岩遺跡」5章6(布目順郎執筆)、1977年  
布目順郎「蚕糸の起源と古代綿」第1章、1979年
- 4) 布目順郎「綿纖維遺物の研究——蚕糸業技術の観点から—」、Tab.1、1967年
- 5) 西川 宏「吉備の國」158—159頁、1975年
- 6) 上海市考古科学研究所文物整理組「長沙馬王堆1号漢墓出土の絹圓錦」、考古学報、1974年第1期、175—187頁
- 7) 湖南博物館編「長沙馬王堆1号漢墓」上集、1973年、文物出版社  
中国科学院考古研究所「長沙馬王堆1号漢墓」、1976年、織物と衣服類の部分は林巳奈夫氏担当。
- 8) Пуль-Песнинченко, Е., Археологические Китайские Шелковые Ткани и Вышивки, 1961, Ленинград.
- 9) Pfister, R., Textiles de Palmyre, I 1934, II 1937, III 1940, Paris.

## 付論II 比恵遺跡出土の絹織物の走査型 電子顕微鏡による観察

京都工芸繊維大学繊維学部助教授 小 西 孝

### 序言

透過型電子顕微鏡による物体の観察は、試料自身を数百オングストロムの薄片にウルトラミクロトームで切断しなければならない。ところが、二十数年前に開発された走査型電子顕微鏡は、試料表面に電子線を照射し、その結果、はじき出された二次電子を捕え、増幅してプロトラン管上に結像させるものである。この電子顕微鏡は、試料の作成が容易であり焦点深度が深いのが特徴である。

本報告は、比恵遺跡より出土した織物について走査型電子顕微鏡を用いた表面観察を行なったものである。

### 実験材料ならびに方法

材料は、前述した比恵遺跡出土の細形銅剣に附着していたものである。この試料は非常に堅く、カッター、レーザーではスライスすることができなかった。そのため、1~5 mm大の大きさに割断した。

X線回折用試料は、5 mm大の割断片をオブレートに包み、X線試料台に取り付けた。X線回折写真の撮影には、ラウエ平板カメラを使用した。ビンホール直径0.5 mm、カメラ距離30 mmで4 hrs露出した。X線はニッケルフィルターでK $\beta$ を除いたCu-K $\alpha$ 線を用いた。出力は40 kV、20 mAである。

走査型電子顕微鏡用試料は、1 mm大の割断片を試料台に接着し、金を厚さ約100 Åほど、蒸着させ電導性をもたらせた。検鏡は、陽極電圧5 kV、試料の吸収電流 $3 \times 10^{-11}$  A前後の条件で撮影した。フィルムは、コグック トライXを用い、D76現像液で現像した。

### 実験結果ならびに考察

#### X線回折

X線回折写真からは、何の情報も得られなかった。有機物中、特に炭素化合物が存在すると、4~5 Å ( $2\theta = 15^{\circ} \sim 25^{\circ}$ ) の位置にハローリングが現われるが検出できなかった。また、ラウエ斑点も現われず、このことから低分子炭素化合物も含まれていないことがわかった。他の無機物の定性は、銅陽極X線管を使用したため不明である。

#### 走査型電子顕微鏡による観察

図1に割断片の表面写真を示す。糸が直交しているので織物であることが判るが、この状態では、どちらがタテ糸かヨコ糸かは判別できない。撚りが甘いところから機械織りでないこと

がわかる。図2は図1の拡大写真であるが、特徴ある繊糸の断面が見られる。中空になっているサヤの様なものや、何か充てんしているものもある。図3と図4は、充てんしている部分の写真である。恰かもフィブリル束があるように見えるが、X線回折の結果から見ても、これは有機物（網）でなく、おそらく、長年月にわたり網たんぱく（フィブロインとセリシン）が銅イオンと錯体を作り、銅化合物になったものと思われる。このフィブリル束を包むサヤ状のものは、セリシンと銅の化合物の跡ではないかと思われる。フィブロインにはスキンコア構造がないことからも、セリシンらしい。フィブロインと異なりセリシンは親水性アミノ酸残基が多く、フィブロインよりも早く加水分解され、溶解することから考えて、早い時期に安定な銅化合物になったのではないかと思う。図4に見られるように、サヤの部分は充てん物よりも明るい。これは、サヤの部分からの2次電子発生量が多いことを示しており、より電導性のよいことを示している。

図5にサヤの部分を示すが、その内面は滑らかであり、充てん物の表面も滑らかであったものと思われる。しかし、図6に見られるようにサヤの内面が、非常に荒れているものもある。これは、電子顕微鏡で内部構造を見るために、薬品、紫外線あるいは放電効果を用いて表面の一部を昇華させて内部構造を見る、いわゆる、エッティング処理した表面像とよく似ている。長年月の流水、汚水にもとづく薬品エッティングは、全体平均にエッチされるが、これらの写真を見ると部分的にエッチされている。したがって、この試料は、多分、日光曝射によるエッティング効果ではないかと思われる。

図7は堆積物に埋まった中から一部側面が現われている写真である。図8は全体が荒れた表面でエッチされているが、図9の左下半分（割断した面）はエッチされていない。

### 結論

1. X線回折の結果より、フィブロイン、セリシンたんぱくの存在を示す回折はおろか、炭素化合物の存在を示す4~5 Åのハローも見られなかった。
2. 試料の横断面は繊糸の形態を示し、内部充てん物はフィブリル束に似た形でフィブロインの残骸のようである。また、スキンのような明るい構造物はセリシンの残骸を思わせる。
3. 側面はエッティング処理を受けた様な部分があり、これは試料がたんぱく質であったときの日光曝射によるものと推察される。

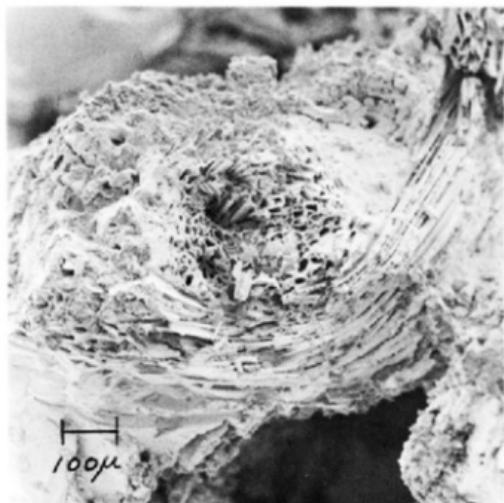


图 1

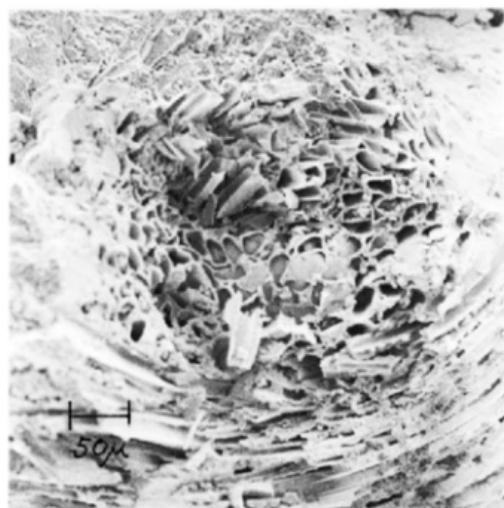


图 2

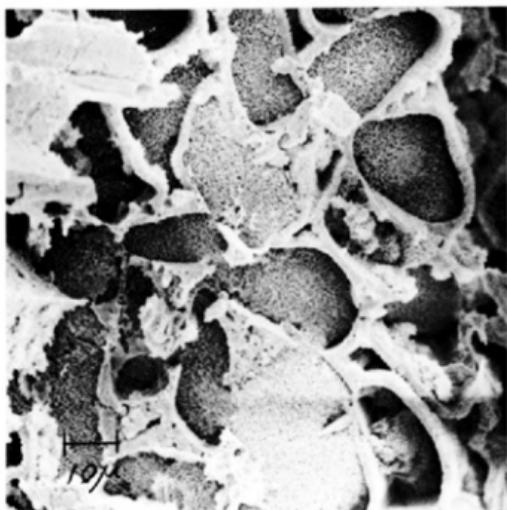


図 3



図 4

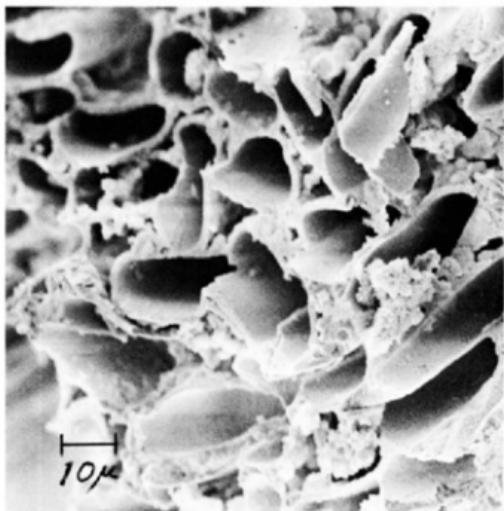


図 5

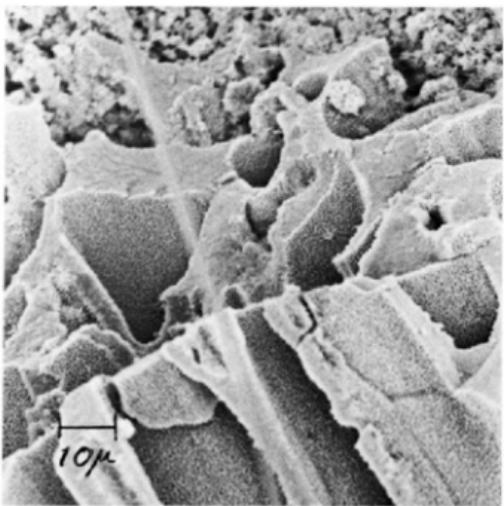


図 6

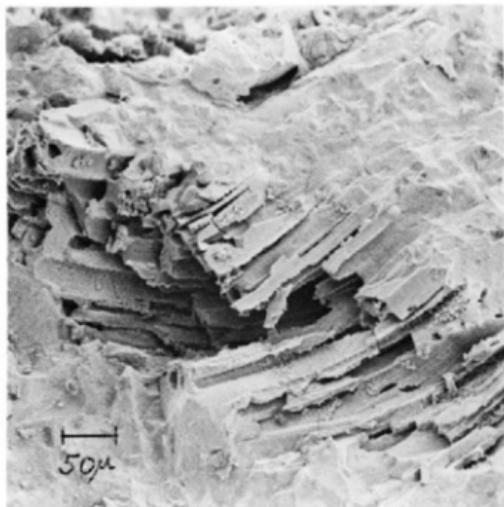


図 7



図 8

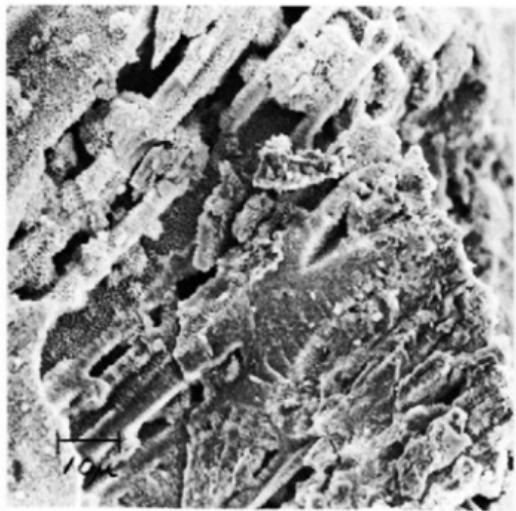


图 9

N  
f

N  
f



付図1 比恵遺跡群第6次調査遺構全体図 (1/100)



付図2 第5・6次調査地点図 (1/400)

福岡市博多区

# 比恵遺跡

—第6次調査・遺構編—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集

1983年3月31日

発行 福岡市教育委員会

印刷 正光印刷株式会社

比  
惠  
遺  
跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集

1983

福岡市教育委員会